

---

# とある結界術の!渾沌世界《カオスワールド》

asuta

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある結界術の渾沌世界カオスワールド

### 【Nコード】

N3562U

### 【作者名】

asuta

### 【あらすじ】

母、墨村守美子が

宙心丸と共に封印されてから  
約一年半後。

墨村良守は、  
妖とは無縁の平穏な日常を  
送っていた。

世間は第二次世界大戦という  
物騒な事件が起こるし、  
日常はツンツン髪の  
フラグ建築士の友人の所為で、  
騒がしいしだったが、  
それでも時音がいて、  
叶えたい夢もあって一応は  
充実した毎日だった。

だが、  
彼の瞳に昔以上の強さはなく、  
まるで死んでいるかのような  
虚無感がココロの片隅にあった。

そんな折、  
世界を揺るがすような大事件が  
舞い降りて…！？

科学と魔術と結界術が交差する時、  
物語は始まる！！

『結界師』と『とある』のクロスオーバーです。  
楽しんで頂けるとありがたいです。

## プロローグ 学園都市編（前書き）

記念すべき

第一話ですが、

両作品の主人公が登場しません。

まさか

この人から物語が

始まるなんて…

## プロローグ 学園都市編

(この場面、上やんなら不幸って言うんやろつな…)

と、

髪の色が青く、

耳にピアスをつけた

世界三大テノールも吃驚の野太い声の

常に目を閉じているように見える

どこからどう見てもまともではない少年は

行方不明になっていてる親友の事を思い浮かべた。

「というか、

上やんでなくてもこれは不幸と言うやろ…」

苦笑いを浮かべる高校のクラスメイトからは

『青髪ピアス』と呼ばれている少年。

苦笑いの理由はさつきから

科学の街であるここ『学園都市』の路上で暴れている

全くもって非科学的ななにかのせいである。

「ぐっへへへ。人間。人間。にーんげーん!!」

「どいつもこいつも美味そうだ!!」

そう。

そんなことを叫びながら金棒を振り回して

路上の真ん中で暴れている、

体長4mほどの頭に一本の角を生やした

二足歩行のブタっぽい生き物の所為である。

「なんでこんなことになるんやろ?」

青髪ピアスは深いため息をついた。

今日は、

バレンタインを挟んだ休日ということだ

少しでも女子からチョコを貰う可能性を高めるべく、

美容院にでも行き、イメージチェンジを図り、

(それが無駄な努力であることを青髪ピアスは知っていた)

ついでに電撃文庫の新刊を買って、

家に帰る途中に美女とぶつかりそのまま…

という薔薇色の日曜になっていた筈だ。

だが、現実…

「なんで…」

同じように、楽しい日曜日を過ごす筈だった人達が  
悲鳴を上げながら逃げ惑っていた。

「なんで…」

一人の少女が逃げ遅れてしまい、

ブタの攻撃を受けていた。

振り下ろされる3mは優に超える金棒を

少女はなんとかかわしたが、

その所為でビルの壁に捕まってしまった。

幸せなんかどこにも無かった。

上条当麻じょうまことではないが、  
不幸しか存在していなかった。

「なんで…」

青髪ピアスの少年は、  
耳たぶが削げるのをお構いなしに、  
両耳のピアスを思い切り引きちぎる。

「なんで俺が本気にならなきゃならねえんだよオオオ!!」  
少年は絶叫した。

そして彼は、

「ぐへへへへへ!! 追い詰めたあゝ。追い詰めたぞあゝ。」  
と言って少女に再び金棒を振り下ろす化け物と、  
そんな状況になって、  
使う筈でなかった力を使うとする少女の間に、  
少年は瞬間移動した。

ここまでは別に問題は無い。

ここは超能力を扱う街であり、  
テレポーターテレポーター、  
空間移動能力者も、  
珍しいとはいえ存在する。

だが、次の瞬間にイレギュラーが起きた。

少年が前に手を出すと、

ブオオン！！

という音を立て竜巻が発生してブタの化け物を、  
近くのビルまで吹き飛ばしたのだ。

ブタはビルの壁の高いところに凄まじい勢いで叩きつけられ、  
跳ね返って硬いアスファルトの地面に大の字で落ちた。

「なあんだあ！？いつてえ何がおこったあ〜？」

ブタは訳が分からないと言いたげな声をあげる。

「えっ！？」

少女も驚きの声を漏らした。

ブタが吹き飛ばされたことにはではない。

突然、テレポルト空間移動で現れた少年が  
エアロシユーター風力使いでブタを吹き飛ばした。

少女はそう認識した。

そのことについてだ。

その認識が正しいならば、

この学園都市にあつてはならない存在がそこにあることになる。

既存の理論では、

決して発現する筈のない、

それこそ学園都市の学者が、

何人いようともし生み出すことの出来ない存在。

その名が示す通り、

通常一人の人間に一つしか発現しない能力を、  
複数所持する者。

「多重能力者<sup>デュアルスキル</sup>…っ!？」

少女はその存在の名を口にした。

「オイオイどおした!? 豚ちゃんよぉ!!」

この俺に殺戮までさせる巫山戯たイベント用意して、

この程度ってことはねえよなぁ〜!？」

少女を助けた、

多重能力者であると見られる青い髪の少年は、

そう言っつてブタの化け物を挑発した。

普段閉じられている、

淀みきつた金色の瞳をキラキラさせて

少年は狂った笑みを浮かべた。

「ふざけんなアアア!!! 人間のおぶんざいでええええ!!!」

ブタの化け物は怒りのあまり声を荒げ、

鈍重な突進で青髪の少年に向かってきた。

「良いねえ!! 挽き肉になる気満々じゃねえかあ!!!」

化け物に合わせるように少年もブタに向かう。

人とは思えないとんでもない速さで!

そして、ブタに辿りつく前に準備を行う。

多重能力者という化け物を戦わせたことを、

死んで死ぬほど後悔させる程の大技を発動する準備を。

(まずはレベル4筋肉増強<sup>バリアブルマッスル</sup>により、

腕の筋肉を強化!!!)

青い髪の少年は最初の演算式を組み立てる。

それに合わせて腕の筋肉がメキメキと音を立てて増強した。

(次にレベル3炭素<sup>ダイヤモンドスモクチャー</sup>装甲で、

炭素の装甲で拳を覆い…)

少年が演算式を完成させると、

空气中に二酸化炭素の形で存在する炭素を集めて腕に装甲を完成さ

せた。

炭素の単体は化合の仕方によって様々な硬さになる。

簡単に折れてしまう鉛筆の芯から、

未来の素材として注目されているカーボンナノチューブまで様々な硬さにー。

（んでもって、レベル4大旋風発動！！  
ガルウインド

背中から竜巻を生み出し、

そいつをブースターに！！）

ブタの化け物を生み出した時と、

同じくらいの風速の竜巻を使い、

ブースターの代わりにした。

これでスタートダッシュの時に、

筋肉増強の効果で増加した速さが、

さらに増した。

だが、

同時に

（…っうあ！！）

脳天に雷が落ちたかのような衝撃が走る。

（…んのポンコツがあ！！）

こんな時でも黙ってられねえのか！？）

青髪は心の中で毒づいた。

途方もない頭痛と嗚咽が、

青髪から気力を奪う。

体調は最悪だった。

しかし、

元を正せば、

こんなことになったのは誰の所為だ？

現在いまこんなにも気分が悪いのは、  
目の前のブタの所為ではないか？

自分が戦わなければいけなくなったのは、  
街中で暴れてくれた化け物の所為ではないのか？

デカいだけの、

挽き肉になる程度の価値しかない

醜けだものい獣の所為ではないか？

青髪は

そう考えると

（頭痛なんざどうでもいい。

八裂きにしなきゃ気が済まねえ！！）

と思考をまとめ上げた。

ブタとの距離が零になる前に、

青髪を振り乱しながら、

少年はブタの腹めがけて飛び上がり、

腕を振りかぶる。

そして、

それと同時にある能力を発動させた。

その能力は、

レベル4エターナルブレイズ永遠燃焼。

最大温度2000バイロキネシスの発火能力である。

が、  
この能力の売りは温度ではない。  
最大の売りは、  
学園都市が所有する  
モンスタージェット機のエンジンに  
匹敵する程の炎の噴出力である。

青髪はそれを  
肘から発生させ、  
拳を硬く握りこんで  
化け物の腹にめがけて  
叩きつけた。

ブタは  
苦悶の表情を浮かべること、  
苦痛の悲鳴をあげることもなく、  
ただ白目をむき、  
腹が陥没し、  
内臓はゴム風船のように破裂し、  
学園都市のビル10軒ほど倒壊させながら、  
後方に数百メートル吹き飛んで、  
絶命した。

それを見ると青髪は、  
「ヒハハハハ！！」  
と狂ったように笑った。

「凄い…。」  
青髪によって助けられた少女が

眩いた。

その時、

「どこが凄いつーんだ!!」  
青髪が怒声をあげた。

「こんなことしか出来ねえんだよ…」  
青髪の少年は少女に近づく。  
だが、

その足どりは先程までの  
超高速が見る影もないような  
フラフラとしたぎこちないものだった。

「この能力を、  
研究者どもがなんて呼んだか知ってんのかよ。」  
依然、

覚束無い足取りで、  
少女に近づくと少年。

そんな状態の青髪の少年だったが、  
少女にとってはそれが逆に、  
化け物のように映った。

そして、

少女の両肩を掴むと、  
「死霊支配なんて  
呼ばれる多重能力の、

どこが凄いつて言うんだよ?」  
と尋ねた。

それを言う青髪の顔は、  
どこか悲しそうで、  
何かを諦めたようなそんな、  
絶望で塗りたくられた表情だった。

そして、  
そんな表情を浮かべたかと思うと、  
突然何の前ぶれもなくこと切れた。  
少女の体に、  
180?を超える大男の体重がかかる。  
その体を  
ふんぬう!!  
と力を込めて支える少女。

が、  
腕力が足りず、  
少女は地面に尻をついて、  
生まれて初めて異性に  
膝枕を捧げることになってしまった。

「……………」

「…すみません。  
起きてますかあ〜?  
もしも〜し?」

少女は、  
この妙な沈黙に耐えきれなくなり、  
自分の膝の上で眠る少年に声をかける。

だが、

「……………」

返事は、  
無かった。

「と、とにかくここから離れないと。」

アンチスキル  
警備員とかいう人達が

来ちゃうし、

そうになったら侵入したことがばれちゃう。」

少女はそう言って、

自分より遙かに背の高い青髪の体を背負って、  
裏路地に向かった。

先ほど、

彼の体を受け止め損ねて、

尻餅したとは思えないような、

女の子とは思えない腕力だった。

（まさか、  
イマジンプレーカー  
幻想殺しを

探しに来て、  
ちゅうのつりよくのまち  
学園都市の、  
イレギュラー  
多重能力者にあうなんて、  
思わなかった。)  
少女は青髪を背負いながら、  
そんなことを考える。

凄いことだ。

内部の人間でも見ることが出来ないものを、  
不法侵入者である自分がみることが  
出来るなんて…

だが、

それよりも気になったことがある。

(なんで学園都市に妖がいたんだろ？  
守美子の話では、  
学園都市は日本いや、  
世界を探しても珍しい、  
妖が存在できない場所の筈なのに…)  
少女は自分にとっての  
命の恩人である女性の話を思い出しながら  
考える。

(…もしかしたら、

この人に聞けば分かるかもしれない。)

背中に背負う  
デュアルスキル  
多重能力者の少年を  
チラリと見た。

思えばこの少年は不思議だった。  
その能力のことを考えれば当然だが、  
むしろ不思議なのは能力面よりも  
中身だった。

どこか自暴自棄で、  
八つ当たり気味で、  
乱暴かと思えば優しさも見えて、  
だけどなんだか悲しくて…

(…変わった人かも。  
守美子並に。)

少女はなんとなく、  
そう結論付けて、  
路地裏の人気の無いところまできて、  
自分の中の『力』発動した。

(この人が起きたら、  
昔、守美子が私に言ったことを言おう。  
あの言葉のおかげで、  
今の私があるんだからー。)



## プロローグ 学園都市編（後書き）

青髪ピアスが、  
レベル5の第六位ってのは  
よくあるんですけど、  
多重能力者ってのは新しいかもって  
思ってた書きました。

青髪ピアス「全国の僕のファンの方ホンマに申しわけありません。  
で、  
駄作者の所為

すっかりキヤ  
ラ崩壊してしまいましたが、  
引き続きごひ  
いきにお願いしますー。」

アスタ「全国に2、3人いりゃ良い方じゃね？」

青髪「ああ!？」

アスタ「ちよっ…何!？その怖い顔!？」

てか手のそれは炭素装甲では？  
というか、なんか腕がいつもよ  
り太くなって…」

青髪「…挽き肉になりやがれえ!！」

アスタ「ぎゃああああ!…!！」

ブローグ ロシア成教編(前書き)

すみません。

サーシャの喋り方って  
あってますか？

## プロローグ ロシア成教編

ここはベルギーの首都。

道を行く人々は21世紀に

相応しい格好をしていたが、

たった二人、

現代から浮いている魔術師がいた。

そのうちの一人、

黒い拘束服に赤いマントと帽子といった、

変態のような格好をした小柄な少女、

サーシャ「クロイツェフは

「第一の質問ですが貴方の側近は、

一体どこに行ったのでしょうか？」

と、自分の隣を歩く青い修道服を着た

眉目集齡と言った褒め言葉の

似合いそうな顔をした、

金髪の青年魔術師に尋ねた。

「うーん…

まだ僕と彼は知り合って日が浅いから、

彼の行きそうな場所は

完全に把握しているわけじゃないんだよね。」

青年は申しわけなさそうに答える。

「…そうですね。」

サーシャが素っ気なく言った。

「というか、

側近という言葉は間違ってるな。

僕には人を下につける程の地位も、

カリスマ性も持ち合わせていない。

そんな僕が彼を側近にするなんて  
おこがましすぎるよ。」

と言つて溜息をついた。

「第二の質問ですが、

ロシア成教の最終兵器と言われる

貴方に地位とカリスマ性が無いと、

本気で言ってるのですか？」

サーシャが尋ねると、

「僕はいつだつて本気だよ。」

と言つて彼は微笑んだ。

この目が鋭いことと、

顔が美しいこと以外どこにでもいそうな

この青年、

ルカ・トルーマンは、

実を言つととんでもない魔術師なのだ。

『見えざる者』への対処を行う

『殲滅白書』に所属していて、

サーシャの同僚に当たるのだが、

ロシア成教『殲滅白書』において、

地位はサーシャの上司であるワシリーサよりも

下ではあるが戦闘能力では

同部署どころか同宗教内にも右に出るもの等おらず、

ロシア成教の最終兵器とまで言われる男だ。

が、

それ以上に恐ろしいのは彼の魔術だ。

彼は神が定めた禁忌に触れかねない

この世の絶対法則を捻じ曲げる魔術を

行使できる。

（疑問一。ワシリーサは、ルカとトルーマンの魔術を、天使か悪魔に近いものだと言っていましたか、

もしや彼はローマ正教の神の右席のような存在なのでしょうか？）

サーシャは、第三次世界大戦を起こした、神の如き者の性質を持つ、自分を利用しようとした魔術師のことを思い出しながら考えた。そして同時に、

（疑問二。彼は自分の人格では人を下につけることなど出来ないと言っていましたか、だったらあの変な…ワシリーサは一体どうなるのでしょうか？）

自分に職権乱用で拘束服を着せさせた上司のことを考えた。すると、

「おい。サーシャさ〜ん。」  
とぼけたように自分を呼ぶ、ルカの声にサーシャははっとして、

「…第一の解答ですが、なんででしょうか？」  
と慌てて答えると、

「このまま二人で固まって探しても、早く終わらないから、

二手に分かれなない？」

とルカは提案した。

「第二の解答ですが別によろしいです。

しかし見つけたあとはどうすれば良いのですか？」

サーシャがそう言うと、

ルカは地面に魔法陣の書かれた札を投げて、手を組むと、

地面から土が盛り上がりある形を形成していく。

「これをここに置いておこう。」

彼はそう言うとその肩に腕を回した。

それは『人体』であった。

しかも、

土で出来ているとは全く思えない

本物の人体に限りなく近いものだった。

触るつもりはサーシャには毛頭無いが、

質感も非常に人間に近いであろう。

ルカ本人曰く、

内臓の機能にいたるまでリアルに

再現してあるらしい。

この魔術は

『アダム創世』という彼独自で作りあげた、

旧約聖書創世記で神が土塊から

アダムを作りあげた奇跡の模倣であるらしい。

神の奇跡の完全再現とはとんでもないが、

これはまだ、

彼をロシア成教の最終兵器と言わしめる魔術のほんの片鱗ですらない。

が、

ここで問題にすべきことは、  
それではなく、

「…第三の質問ですが、

貴方は街中で魔術を使えば、

一般人からどのような反応をされるか、

理解しているのですか？」

ということだった。

周りを見渡せば、

案の定、

道行く人々が足を止めて、

奇異の目でこちらを見ていた。

「続いて第四の質問ですが、

貴方はこの事態を」

どう乗りきるつもりですか？」と、

サーシャが言い切る前に、

ルカは両腕を空でも飛ぶかのように

大きく広げて、

「見たか！！

このルカ「トルーマンの世紀の大魔術を！！」

と高らかに叫び、

「アハハハハハハ！！」

と高笑いし始めた。

「……………」

「……」  
「……」  
辺りに沈黙が流れた。

どうやらこの男、  
自分がした魔術を  
手品として誤魔化す気らしい。

(…ルカ「トルーマンは、  
真性の馬鹿なのでしょうか？」  
サーシャはそう思った。

がしかし、  
「ブラボー!!!」  
「凄えぞ若造!!!」  
「もっと見せてくれ!!!」  
と次々に人々から完成が上がった。  
「ありがとう。」  
ルカはそう一言感謝の言葉を述べ、  
観衆に手を振った。

(…ありえない…奇跡だ。)  
サーシャは心の中でそう思った。

観衆が去ったところでルカは、  
「さてと。」

気を取り直して

人探しを再開しようか。

俺が街の西側を探すから、

サーシャさんは街の東側を探してくれ。」

と言つて、

西側に向かつて歩き出そうとした。  
すると、

「一つよろしいでしょうか？」

とサーシャはルカを引き止めた。

「なんだい？」

ルカがそう尋ねると

サーシャはルカの作った土人形を指差して、

「これはあからさまに誰かに似せて

作っている気がするのですが。」

と言つた。

「上条当麻くんだろ？」

ルカは先の戦争で活躍した

イマジンプレイカー  
幻想殺しの

少年の名を出した。

実際にこの土人形、

（正確には人体なのだが、

独立した意思が存在せず、

簡単な命令を聞く程度のことしかできないため

こう表現している）

は上条当麻に非常によく似ていた。

それは何故なのかとサーシャが尋ねると、

「君、ツンツン髪の子がタイプなんだろ？」

と巫山戯た調子で言ってきた。

その発言に対してサーシャが

「第一の質問ですが、  
一体何を言っているのですか？」  
キレ気味に尋ねると

「だつてえ〜。」

僕が彼を初めて紹介した時、

サーシャちゃんてば、

なんか妙に意識しちゃってたしい〜。

もしかしてえ〜って、思ったの〜？」

ルカは気味の悪い猫撫で声で答えた。

「第一の解答ですが、

断じてそんなことはありません。

そして、第一の警告ですが、

脳天にボールを食らいたくなければ

その気味の悪い声で話さないで下さい。」

サーシャがいつもにはないくらいに  
むきになる。

ルカは

「じゃあ、

君の好みのタイプは

あくまで上条当麻一人ってことか。

そして、彼を見て顔を赤らめたのは、

上条当麻の面影を見たからと。」

ニヒルな笑みを浮かべてそう言った。

すると、

ガッツ！！

ルカのこめかみにサーシャの持つ

拷問器具の一つであるボールが

クリティカルヒットした。

「痛いな〜。」

こんなもん人間にくだわすなんて、

「一体サーシャさんは何を考えているんですか？」

「バールを食らっても、

ルカは血を流さず余裕の笑みつかべた。

「うるさい!!」

顔を真っ赤にしてサーシャは

ズカズカとどこかに行こうとしていた。

恐らく彼を探しに行くつもりなのだろうが、

「…そっちは西だよ。」

このセリフを言うや否や、

今度は金槌がルカの脳天に

クリティカルヒットした。

(クソ…あの男…ワシリーサよりタチが悪い。)

サーシャはイライラを募らせながら、

ベルギーの街に行く。

そして、

しばらく歩くと立ち止まってあることを思った。

(…第一の疑問ですが、

私がこのような気分になされたのは、

あの少年が勝手にホテルから

いなくなってしまったからでは

ないのでしょうか?)

見当違い。

思わぬところにとばっちりである。

(∴第一の解答ですが、  
彼は以前から勝手な行動が多い気がします。)  
サーシャは思う。

現在彼女が探している『彼』というのは、  
最近『殲滅白書』に配属された、  
14、15歳ぐらいの少年なのだが、  
これが問題児なのだ。

こと戦闘においては最強。  
自身の体の一部を獣にする  
特殊な魔術(とサーシャは判断した)を行使し、  
『見えざる者』をいとも簡単に始末する。  
そんな戦闘のプロである彼だが、  
実力から反比例するように  
コミュニケーションが上手くない。

それどころか他人と、  
見えない壁を作っている傾向がある。  
(サーシャにだけは言われたくないのだが)

そのため戦闘では、  
独断、先行の個人プレー。

今回の任務に至っては、  
一人で無茶をして勝手にボロボロになる  
始末だ。

尤も、  
その傷も彼の体質だか、  
特殊な魔術だかで、  
ホテルにつく頃には治ってたのだが。  
が、  
これで終わりかと思えば、  
そうではなかった。

ホテルで一晩、  
その少年と同じ部屋で寝ていたのだが、  
(ルカの策略だと思われる)  
朝起きたらその少年は忽然と姿を消していた。

そして、  
ルカにそのことを話すと、  
搜索することになり、  
現在に至る訳である。

(…彼に、  
上条当麻の面影を感じた……  
ですか……)

街中を歩きながら、  
ルカの言ったことを思い出していた。  
「…彼が上条当麻に似ている筈がない。」  
サーシャはブツブツとそう呟いた。  
「…彼は、志々尾限は上条当麻とは違う。」

彼女はもう一度呟いた。

「…おい。お前。」

後ろから自分を呼びかける少年の声に気づかずじー。

「…尖った髪や、自分を顧みないところなど、

相似しているところはあるかもしれませんが、

ですが…」

少し興奮しているのか、

サーシャの声のトーンが上がる。

「…クロイツェフ？」

その後ろではサーシャの様子が何やら

おかしいことに首を傾げる少年がいた。

「…上条当麻の方が、その、えっと、」

サーシャが顔を赤らめてどきまぎしている。

まるでいつもの機会のような口調が嘘のようだ。

「クロイツェフ。」

少年がサーシャの肩に触れた。

その瞬間、

サーシャはその方向にぱつと振り返った。

そこにいたのは、

モスグリーンモスグリーンのロングコートを着た

大きな紙袋を二つほど左手で抱えた少年だった。

背格好イマジンブレイカーといい髪型といい、

幻想殺しの少年に

そっくりな少年だ。

見た目で分かる違いと言えば、

目の前の少年は獣のように目が鋭いことだろう。

この少年こそがサーシャとルカが搜索中だった、

志々尾限しっおけんなのだが、

サーシャは今現在、  
そんな喜びに浸っている暇など  
跡形も残らず存在していなかった。

少女は取り合えず、  
限から離れた。

そして、  
彼女は焦りだす。

(…き、聞かれてしまった。  
聞かれてはいけないことを…。)

サーシャは少年が肩を掴む  
ほんの一瞬前に、  
普段の彼女では到底言わないようなことを  
言っていたのだ。

(…聞かれてしまった。  
上条当麻をかつこいと  
言ってしまったことを…)

少女は焦った。  
誰にも漏らしたことのない  
秘めた思い(と、本人が思っているだけで、  
ルカやワシリーサはとっくに気がついていてる。)を  
聞かれてしまったのだ。

彼女は髪をくしゃくしゃと掻きむしった。

(…どうすれば…  
どうすればいい!?)

顔を真っ赤にして、  
脳細胞がショートした彼女のとった行動は

「…あっ!？」

彼女ははっとした。

しかし、  
時既に遅し。

限の頭には、  
ボールがクリーンヒットしていた。

「なるほど。」

簡単に話をまとめると君は理不尽な理由で、  
サーシャさんの拷問器具を食らい、  
昏倒させられて、

サーシャさんにここまで運ばれてきた。  
そういう訳だね？」

公園のベンチに腰掛けているルカは、  
抱えていた袋を隣に置いて

自分と同じベンチに腰掛ける  
限にそう尋ねた。

「…はい。そうです。」

そう答えた限の頭には先ほどのボールの  
傷は殆どなかった。

「君が妖混じりという、  
不思議超次元トンデモ体質じゃなければ、  
とっくに死んでるところだね。」

ルカは皮肉混じりに、  
呆れたと言わんばかりのポーズをとって言った。

妖混じりとは、

その名の通り体の一部、又は全てを  
妖―

魔術サイドの人間が

『見えざるもの』と呼ぶ存在に寄生された  
人間である。

体の一部又は全てを妖に変化させることができ、  
その体に宿した妖の力のある、  
魔術サイドの人間からしてみれば、  
極めて珍しい存在だ。

「でもさあ〜。

いくら君が普通の人間より丈夫で、  
傷の治りが早いと言っても、

その痛覚は人並に存在するんだから、  
バールでぶん殴られれば痛いってこと  
あの子には分かって欲しいよね〜。」

とルカは間延びした口調で  
近くのスターバックスまで

ルカと限のコーヒーを買いに行った少女に対して  
ボヤいた。

それに対して限は

「…そうですね。」  
と相槌を打った。

「だろ？」

痛いものは痛いんだ。

あんな攻撃まともに食らって平気な奴なんて、  
非常識な変態くらいしかないって。」

ルカはそう言っただけ苦笑する。

それに対しても限は、

「…そうですね。」

と適当な相槌を打った。

その反応にルカは元々切れ長な目を

一瞬細め、

かと思うと笑みを浮かべて、

「もつとフレンドリーに話そうぜ？」

限くん。」

と限の肩に腕を回して言った。

「でも、俺…。」

「歳の差なんて気にすることじゃない。

人は老若男女誰とでも友達になれるのさ。」

限が話そうとしたことを

勝手に予想して話続けるルカ。

しかし、

「違います…。」

歳の差じゃなくて…。」

「？じゃあ、なんだと言いたい？」

どうやらルカの予想とは違ったらしい。

そして、

ルカは限の言いたかったことを尋ねた。

そして、

限は言う。

「俺、人に深く関わったことがあまりないから。

だからフレンドリーとか、

親しげとか言われても分からないんです。」

それを語る限の表情は辛いとか悲しいとか、  
そういう次元で表せられるものではなかった。

妖混じりという体質のせいで、  
実の姉を傷つけた過去。

その過去の負い目のせいか、  
人と見えない壁を作り続け、  
それでも他人のために

『夜行』という日本の異能集団に所属し、  
妖と戦い続けたこと。

ルカはそんな彼の過去を知っていた。

だからこそ、

「だからこそ、

君は僕と壁を作らずに関わって欲しいんだ。」

ルカはそう言って微笑む。

優しい微笑みだ。

まるでロシア成教の最終兵器なんて呼ばれていることが  
すべて嘘であるかのようにだった。

「君はさ、

今まで僕が想像つかないような痛みの中かで  
生きてきたんだからさ。

もっと楽な生き方をして良いんだよ。

他人と距離とって、

孤独に生きるのなんてさ辛いだけじゃん。

だろ？」

ルカがそう言ってウインクした。

限はその言葉に

「…はい。」

少し顔を綻ばせた。

限は思った。

こんな暖かい気持ちになるのは

あいつと一緒に同じ学校に通って、

あいつと一緒に妖と戦って、

あいつと友達になったあの時以来だと。

限はそう思って

紙袋の中から小さな箱を取り出し、

それを膝に乗せ、

蓋を開けた。

「へえ。」

チョコレートケーキか。

美味そうじゃん。」

ルカがそう言うと限は、

「ルカさんも食べますか？」

と尋ねた。

「良いの？」

「はい。」

朝っぱらから色んな店回って、

色んなチョコケーキ買いましたから。

俺だけじゃ食い切れないくらいあるんで。」

そう言うと限は紙袋から別の箱を出して、

それをルカに手渡した。

「サンキュ！」

俺、チョコケーキ好きなんだよね。」

ルカの喜びようを見て、

限は、

(…本当に好きなんだな。)

と思った。

箱を開けてルカは  
ケーキをつかんで一口食べた。

「美味え!!!」

流石チヨコレートの国!!!  
ヘルギー

やっぱり普段食うヤツとは  
ダンチ段違いだわ!!!」

ルカはまるで幼児のような調子になって  
言った。

「なんつーかさ、

甘いものって人を幸せにするよね。

限くんもそう思わない?」

ルカのその言葉に、

「あいつも、

そんなこと言っていました。」

と限は何故だか寂しそうに言った。

「あいつ?」

良守っていう子のことかい?」

ルカが尋ねると限は、

「はい。」

と、薄らと微笑みを浮かべた。

「……ケーキ作りが趣味の男の子で

『お菓子の城を作る』って

変な野望を持った変わった子なんだっけ?」

ルカが尋ねると、

「はい。」

変わったヤツでした。

事あるごとに俺に突っかかってくる

無鉄砲で無茶苦茶で。」

と限は言って微笑んだ。

「で、

チヨコレートケーキは、

その子との思い出ってわけか。」

ルカのまるで悟ったような態度に、

「なんで分かったんですか？」

面を食らったような顔で限は言った。

「想像はつくよ。

甘いものが嫌いな君が、

朝っぱらから街中回って

ケーキを大量に買うなんて、

何か理由がなきゃあり得ないし。」

ルカはそう言ってニヒルに笑って見せた。

「…大方こんなところだ。

君は昨日の夜良守くんの夢を見た。

それは君が初めて良守くんのケーキを食べた時の夢だった。

チヨコレートケーキだ。

その懐かしさからか、

君はチヨコレートケーキが食べたくなくなった。

だから、

彼の作ったケーキの味に近いものを探して

この街のケーキ店を色々回った。

違うかい？」

限は目を見開いて驚いた。

当たっていた。

ルカが人の心を読めるかのように、

何ひとつ違わなかった。

「その通りみたいだね。」

限の表情を見て、

ルカはそう言った。

「はい…」

でも、何個か食べたんですけど、全部違うんです。」

限の言葉に、

「当たり前だろ。」

違う人間が作ってるんだ。」

ルカは正論を言う。

「そうじゃないんです。」

「?」

限の言葉にルカは首を傾げた。

「あいつのケーキ、

食べたところか暖かくなつたんです。」

限が胸に手を当ててルカに訴えた。

ルカは、

「そういうことが。」

と呟くと、

「それはね、

非常に感情論じみてると思うけど、

優しさの味だと思うよ。」

と限に対して言った。

「優しさの…味?」

「そう。」

優しさの味。

君を大切に思う心。

こいつがあれば、

どことなくそ不味い料理だろうが、

上手く感じるんだ。」

限の問いかけにルカは  
はつきりと答える。

「君は、

良守くんにとつても、

大事な存在だったんだよ。

きつとね。」

ルカはそう言つて、

悪戯っぽくウインクした。

そう言われると、

限は黙り込む。

そんな限にルカは

「ねえ？

良守くんとただただに会いたくない？」

と尋ねた。

「∴ 第一の疑問ですが、  
彼らはどこに？」

二人の仕事仲間のいる筈の場所に戻ったサーシャの言った一言は  
それだった。

いない。

志々尾限も、

ルカ・トルーマンも。

二人とも。

何処かに行ってしまったのだろうか？  
と思つたサーシャの目に、

あるものが移った。  
ベンチにセロハンテープで張り付けられた  
置手紙が。

ロシア語で書かれているが、  
訳はこんな感じだ。

僕達、

このまま日本に旅行に行くわ。  
ワシリーサに報告よろ（、、、）ノ

ルカ・イーグルアイ・トルーマン

P S

お土産は京都の生八つ橋だよ。

「……………」

サーシャは、  
ただ呆れるしかなかった。

「ルカさん。  
良いんですか？」

空港まで向かうタクシーの車内で、  
限は隣に座るルカに尋ねた。

「何がだい？」

ルカが聞き返すと、

「ルカさんが、

俺をこっちに戻した時に

言ったことです。」

限がそう言つと、

「ああ！」

とたった今思い出したかのように

手をポンとうち鳴らして

声をあげた。

「君の死を知る存在に、

君が黄泉返つたことを知られてはいけない

つてヤツのことか。」

ルカは限にそのことについて、

「別にどうでも良いよ。

むしろ、

僕には君を無理矢理この世に引き戻した責任がある。

君の命を弄んだ。

だからせめて君の我俣くらい聞いてやりたいんだ。」

と自分の心中を吐露した。

…なんて恐ろしいのだろうか？

彼は、

ルカ「トルーマンは

この世の絶対法則、

『人は死んでも蘇らない』を

超越したのだ。

だが、

それでも彼の恐ろしさを伝えただけで、  
ロシア成教の最終兵器たる理由の半分なのだ。

そんな彼が日本に向かう。

一体どれほど物語は

巨大なものになることであろうか？

「てか、

チケットも無いのに、

どうやって日本に行くんですか？」

「…ごめん。」

そのこと忘れてた。」

続く



## プロローグ ロシア成教編（後書き）

青髪「第二話どうやった？おもしろかった？」

ルカ「なんで君がここにいるんだい？」

「ここはアスタが仕切ってるんじゃないのか？」

青髪「作者は不慮の事故で、

出られません。」

ルカ「そうなんだ。

可哀想に。」

青髪「てか、

君誰かに似てへん？」

ルカ「誰かに似てる？

誰にさ？」

青髪「それが全く思い出せないんやなあ。」

ルカ「んじゃ、

読者に聞いてみれば？」

青髪「それ良い考えやな。」

ルカ「てな訳でお便り募集しまーす。

「僕が誰に似てるかピンときたら、  
すぐにいってね〜。キラッ」

青髪「ウザッ!」

**プロローグ 烏森学園編（前書き）**

これでプロローグは終わりです。

そして、

ついに我らが主人公が登場します。

## プロローグ 烏森学園編

ここは

名門と呼ばれる

中高一貫の私立学校『烏森学園』

という学校がある以外に、

別段目立ったところのない、

どこにでもある普通の街の、

どこにでもある普通のアパートである。

そこにある、

少し狭いかもしれないとある部屋。

そこは昔、

妖混じりという特異体質の少年が、

『夜行』という異能者組織の任務の

一時の住居として使っていた場所である。

その少年は、

ある日のある夜、

殺されてしまったこの世におらず、

今その部屋を使用しているのも

その少年と関わりもない

少し風変わりな人間達だった―

「上条当麻。起きたまえ。」  
という、

白いスーツを着て、  
緑色の髪をオールバックにした青年の声で、  
不幸少年、

上条当麻はバレンタインの朝を迎えることになった。  
「うう……。あと五分。」

当麻は朝の眠い時のセオリーをしっかりと守り、  
睡眠時間の延長を申し出た。  
そんな彼の反応を見て青年は、  
「必然。」

君はよほど眠りたいと思われる。」  
と言って笑みを浮かべる。  
ある種の企みを含んだ笑みだ。  
そして、彼は

「我が前に鉄くろがねの砲身を！！  
弾の材質はオリハルコン！！  
用途は射出！！威力は絶大！！  
その爆発力で、  
目の前の少年を殲滅せよ！！」  
と叫んだ。

すると、  
彼の目の前に、  
海賊ものの映画に出てきそうな、  
黒い砲身の大砲が現れた。

アルスマグナ  
黄金錬成。

緑色の髪の青年、  
元ローマ正教の錬金術師  
アウレオルス・イザードの完成させた、  
思ったことを全て現実にする

究極の錬金法だ。

そんな危険な力が発動されても、  
依然まどろみ続ける、  
不幸な不幸な上条当麻。

そして、  
アウレオルスはそんな彼をよそに  
「放て!!!」  
と大声で叫んだ。

『どがーん』という、  
火薬の音がアパートに響いたと思ったら、  
何事もなかったかのように静かになる。  
周辺住民は、  
さぞ不安になったことであろう。

そして、  
そんな静けさの後、  
「ふざけんな!!!」  
このロリコン外道錬金術師!!!」  
という少年の怒声が響き渡った。

「蒼然。  
上条当麻、  
君は早朝から、  
何故そんなに機嫌が悪い？」  
白いスーツに不釣り合いの、  
保育所が着るような、

人参やら、トマトやらの野菜が、  
可愛いキヤラクターとして描かれたエプロンを  
着たアウレオルスは、  
ちゃぶ台に座って食事を摂る当麻に  
向かって尋ねた。

ちなみに朝食のメニューは、  
バトル（アウレオルスの手作り）  
ミネストローネ（アウレオルス特製）  
となっている。

どちらも、

プロ顔負けの出来である。

決して黄金錬成で作った訳ではない。  
アウレオルスの実力である。

当麻はそんなアウレオルスの作ったミネストローネを  
皿を持って口の中に一気に流し込み、  
その皿をぞんざいにもちゃぶ台に叩きつけ、  
「てめえのせいだ！！」

このマヌケ錬金術師！！」  
と錬金術師に叫ぶ。

「愕然。

私が何をしたというのだ？」  
アウレオルスはその言葉通り、  
愕然とした表情で言った。

「朝っぱらから、  
俺に大砲を打ち込もうとしたことを  
もう忘れたのか！？」

お前はあれか？ボケか？お爺ちゃんですか？」

当麻は叫ぶ。

「釈然。」

私はただ、

爽やかな朝を演出しようとして……」

「砲撃で目覚める朝のどこが

爽やかなんだよ!?

てめえのせいで、

こっちは死にかけたんだぞ!?!」

当麻はアウレオルスに怒涛のツツコミをかました。

すると、

「釈然。」

君は事実死んでいないのだから、

別に怒る理由等無かるう。」

と、開き直るアウレオルス。

そんな彼に当麻は、

「普通なら死んでるんです!!!

こんな右手が無かつたらな!!!」

と、自分の右手を彼に見せつけて言った。

イマジンプレイカー

幻想殺しー。

そう呼ばれる力が、

どこにでもいる普通の高校生、

上条当麻の右手には備わっていた。

それが異能の力であるなら、

魔術だろつが、超能力だろつが、神の奇跡だろつが、

なんだって打ち消せる。

イマジンプレイカー

幻想殺しは、

そういう力であった。

勿論それは

アウレオルスの究極の錬金法、  
アルスマグナ  
黄金錬成であるかと例外ではない。

そんな一見素晴らしい右手だが、  
神の奇跡すら打ち消せてしまったため、  
幸運も、運命の赤い糸も打ち消してしまったため、  
当麻は不幸に悩ませれているのだ。

財布を無くすなんてことはざらで、  
うっかり携帯やキャッシュカードを踏み砕いたり  
街で不良に絡まれてる女の子を助けたら、  
不良に追いかけ回され町内をフルマラソン、  
拳句のはて助けた女の子に、  
ストーキングされることになったりと…。

そんな彼であったが、  
今一番不幸だと思ふことがあった。

「まあ、

そうそうカリカリするな。

上条当麻。」

アウレオルスがそう言うと、

当麻は、

ぶちッ！

と頭の血管が切れたような気がした。

（ああ〜もう、不幸だあ〜）。

なんでこんなヤツと暮らさなきゃいけないんだよ。  
（

当麻は声にならない叫び声をあげた。

当麻は好き好んで、  
アウレオルスと生活を始めた訳ではない。  
全ては突然の出会いによって引き起こされた  
不幸なのである。

話しを遡ること、  
約4ヶ月前―

魔術サイド最大勢力、  
ローマ正教『神の右席』のメンバー、  
『右方のフィアンマ』を倒し、  
第三次世界大戦を終結させた上条当麻は、  
世間的には、  
行方不明ということになっていた。

そう、あくまで世間的に…

上条当麻は、  
しっかりと世界に存在していた。  
存在していたのだが、  
（不幸だ…）  
そんな状況であった。

体を何かに縛り付けられ、

手足の自由は訊かず、

目には目隠し、

自分のいる場所は全く不明。

回りに人はいるものの話している言語は、

何語かどうかも見当がつかない。

(…ごめんインデックス。

帰ったら謝るって約束したのに…

もしかしたら、もう一生会えないかもしれない…)

そんな最悪の想像さえうかんだ。

きんじょせくろく  
禁書目録と呼ばれ、

脳に記憶した10万3000冊の魔導書と、

自身の完全記憶能力のため、

一年ごとに記憶を失わなければいけなかった少女。

そんな絶望的な状況から、

魔術師達がついた嘘もろとも、

幻想を打ち砕いてなんとか助けられることができた少女。

その代償で自分は記憶を失って、

少女のためと言いつつの、

自分の都合でそれを誤魔化し続けて、

それにも関わらずそのことを、

「いつものとうまが帰ってくればそれでいい。」

とだけ言って許してくれた少女。

(…もう会えないのかよ。

あいつの笑顔を見ることは

もう二度と叶わないっていいのかよ…!!)

当麻は、泣いた。

泣かずになんていられなかった。

(俺には幻想殺イマジンプレイカーがあるのに…!!)

幻想ならどうにでもなるのに…!!  
こんなつまらない現実に対しては  
無力でしかないのかよ…!!)  
少年は自分の無力さをとにかく呪った。  
(…こんな酷い最終回クライマックスってないよな。)  
そう彼が思った瞬間だった。

「

!」

何かを叫ぶ声がした。

その瞬間、

彼のつまらない現実<sup>は</sup>終わりを告げた。  
その終わりを告げる声<sup>が</sup>どんな意味か、  
当麻には分からなかった。

分かっていたらならこう聞こえたはずだ。

「倒れ伏せる、下衆ども!!」

当麻の耳には人が十数人倒れる音がして、

そしてこの瞬間彼は助けられた。

「喟然、カルト教団に捕まるとは、

君はなんと不幸なのだ。」

当麻を突然現れて、

突然助けた男は言った。

「愕然。

君が禁書目録を過酷な運命から救い出したとは、  
到底考えたくはないな。」

男は当麻を拘束するものを外して、

当麻にさせられていた目隠しをとって

「だが、当然。

君には禁書目録を救ってもらった借りがある。」

と、

かつて禁書目録を当麻と同じように救おうとした錬金術師は、言う。

「アウレオルス……イザード？」

当麻は目の前の人物の名を口ずさんだ。

「久しぶりだな、上条当麻。」

助けに来たぞ。」

アウレオルスはそう言って微笑んだ。

「…なんで？」

どうしてお前がここに？」

当麻は驚きを隠せずにいた。

アウレオルス「イザードは、

かつて当麻がステイル「マグヌスという魔術師と共に倒した錬金術師である。」

彼は、

インデックスを救うため、

姫神秋紗という

吸血鬼を引きつける体質の少女を利用し、

黄金錬成の完成のために、

沢山の学生を利用し、

そして最終的に

自分の目的が叶えられないことを知り暴走した下衆の極みのような男である。

当麻は、

そんな男が自分を助けに来たことが信じられなかった。

いや、

それ以前に彼は当麻との戦いで

自らの黄金鍊成で自滅し、  
その術と共に全ての記憶を失い、  
顔形をステイルの炎の魔術で変えられ、  
その後行方知れずだった筈だ。

そんな彼が、  
上条当麻を知覚し、  
黄金鍊成を使い、  
当麻と戦った時の姿で現れた。

当麻はそれが信じられなかった。  
そんな当麻の驚きに満ちた表情を見ると、  
「私は彼女達に助けられたのだ。」  
と、アウレオルスは  
薄暗い部屋の入り口に立つ二人の女性を見て言った。

この二人の女性と、  
一人の鍊金術師、  
この出会いが上条当麻の運命を  
変えたのであった。

もつとも、  
彼女達と当麻の間に何が起こったかとか、  
今はそれが問題ではない。

ここで問題にすべきことは、  
当麻を助けた時のアウレオルスは、  
正義の味方ヒーローのようだった。  
けれども現在のアウレオルスは、



そんな私立の中高一貫校であろうとも、  
日常は普通の学校生活となんら変わらない。

今日も一人の少年、

墨村良守の世界では、

四限数学という極々当たり前な出来事が展開されている。

墨村良守は、

ノートの上で方程式を解きながら、

(∵ 上条は、今頃寝てんのかな?)

と授業とは関係ない、

自分の友人のことを考えた。

12月の始めごろ、

この烏森学園の

高等部一年一組に転入してきた上条当麻は、

良守の知る限り、

まるで不幸が服を着て歩いているような人間だ。

彼は今日、

ホームルーム開始10分前に学校につくように、

義兄に腹立ちつばなしだったが、

なんとかそれを堪えて登校したらしい。

しかし、

そんな彼が

ダッシュで一年三組の廊下を横切ったを確認したのは、

二時間目の授業中。

話を聞けば、

登校中に5人の他校の不良と見られる男子が

烏森学園の女生徒に絡んでいるのを目撃したらしい。  
まあ、

俗に言うナンパというやつだが、  
女生徒の方とはかく嫌がっていたので、  
当麻はお人好しにもその女生徒を助けたらしい。  
さっさと逃げる女生徒を追いかけようとする  
5人の不良を当麻は一人で伸して

(本人曰く「昔は3人以上だったら逃げてたけど、  
今なら10人以上でもなんとかなるぜ!」とのことだ。)  
まんまとフラグを作りながら、  
白馬の王子様を演じきったわけだ。

此処までは良かった。

しかし、

現実はそのも甘くなく、  
その不良達の先輩と見られる暴走族風味の  
男達十数人にバイクで追いかけて回されたらしい。  
こうして当麻は彼等から逃げ回るため町内を  
激走し、

その結果として盛大に遅刻したわけだ。

(…つーか、バイクから逃げ回って逃げ切れるって  
どんな体力してんだ?あいつ)  
良守は黒板に書かれた授業内容を書き写しながら、  
冷静なツッコミをした。

(てか、あいつの日常って壮絶過ぎじゃね?  
以前の俺程じゃないけど。)

良守は烏森の土地を、  
結界師という異能者として守っていた頃のことを  
思い出しながらそう考えた。  
すると、

「墨村。この問題は解けるかい？」

という数学教師の木原厘からの質問が飛んできた。

「あつ！はい！」

良守はそう言っただけで慌てて立ち上がった。

良守は黒板に書かれた問題を見つめると

少し目を細め、

（流石木原先生だな。

問題のレベルが高い。）  
と関心した。

この烏森学園の教師陣の中で一番優秀なのが、  
この木原厘である。

見た目20代後半の茶髪の男だが、  
実年齢はそれよりももっと上だ。

教育と、研究と、超能力の街『学園都市』の研究者の家庭の生まれ  
だが、

弟は学園都市第一位の能力者の能力を発現した優秀な人間であるの  
に対し、

自分は一族一の落ちこぼれという、  
なんだか暗い過去の持ち主だが、  
とにかく優しく生徒思いで、

その上数学の教え方も上手い先生だ。

そんな先生の出した問題を良守は、  
前に出ていとも簡単に、

「これでどうですか？」

と簡単に解いてしまった。

「うん。素晴らしいよ。」

そういつて木原は微笑んだ。

クラスメイトからも、

「おおー!!!」

という歓声が上がった。

(凄え。あれ、断崖大の過去問で、

正答率20%の問題だぞ!!!)

(まじで!?!断崖大つて学園都市の!?!?

ヤバくね!?!?)

(…かっこいい。良守くん。)

ひそひそ声で周りがそう言っていたが、

良守の耳には全く入っていなかった。

良守はさっさと自分の席に戻る。

良守は変わった。

周りから、

九九の七の段が言えないとまで言われた

学力は飛躍的に伸び、

低かった身長は、

交際中の彼女、

雪村時音を簡単に追い越し、

妖との殺伐とした戦いは一切無くなり、

姿はかっこ良さよりも、

むしろ艶かしさを含んだ美麗の男子といった

雰囲気となり、

心は

どこまでも空虚でどこまで虚無になった。

キンコンカーンコン。

授業終了を告げるチャイムが鳴り、

新設された烏森学園に備わった食堂に直行する

髪を丸めた坊主の男子やら、

某炎髪灼眼の打ち手宜しく、

( どうやら良守は当麻の趣味に多少影響されたりしい。 )

購買にメロンパンを買いに行く女子やらが、

周りにあふれた。

それを見ると良守は

「さてと。」

と言って立ち上がり、

父修二の作った弁当と

コンビニで買ったコーヒー牛乳を持ち

ある場所に向かった。

勿論、

友人である上条当麻のクラス、

一年一組の教室である。

ある出来事をきっかけに二人は

昼食を一緒に食べるようになったのだ。

そついう理由で

良守が一年二組の教室から出ると、

「す、墨村くん！」

一人の少女が良守に話しかけた。

高校生にしては低い身長、

起伏があまりに少ない体、

二つに結んだ亜麻色の髪、

そして小動物のように可愛らしい顔、

「よお、神田。俺に何か用？」

良守は少女、神田百合奈に微笑んだ。

良守は自覚していないが、

この微笑み、妖艶にして殺傷力最大である。

「!!!？」

神田は、途端に顔を真っ赤にして

口をパクパクさせた。

「どうした？顔赤いぞ？」

良守は心配そうに尋ねると

「あの…えっと…これ。」

そう言っつて神田は、

可愛らしい包みに包まれた弁当箱を差し出した。

「…俺に？」

良守が半信半疑で尋ねると神田は、

こくこくと高速で頷いた。

「ありがとう。」

と言っつて良守は、

再び自分が全く知覚していない必殺兵器を繰り出した。

その瞬間、

神田は学園都市のレベル5も真っ青な光速移動で

良守の前から姿を消した。

「…前から思っつてたけど、

あいつっつて変わってるよな。」

良守はぼそつと呟いた。

（…にしてもどうしよ？

弁当二つも食えねえよな？

よく分からないけど神田が

俺に作ってくれた方を食うべきなのか？  
良守はそんなことを考えた。

ちなみに、

彼は何故神田が自分に弁当を作ったのか  
さっぱり分からない。

ようするに鈍感なのだ。

どうしようかと、

良守は思案していると、

「不幸だああああ！！」

一組の教室から叫び声が聞こえてきた。

「んで、

話しを簡単に要約すると、

お義兄さんの作った弁当を、

どっかに落としたってことだな？」

良守が机に突っ伏したまま、

滝のような涙を流す当麻に尋ねると、

「…はい、そうです。不幸な上条さんです。」

と投げやりな返事をした。

「っーか、

弁当箱ドブに落としたって、

お前の不幸も相当だな。」

良守がそう言うと、

「いや。ドブには落としてない。」

当麻はそう反論した。

「どつちでも変わんないだろ。」

良守がそれにすかさずつつこみを入れ、  
当麻は

「不幸だ…」

とお決まりの台詞でうなだれた。

「購買、まだ売ってるかなあ〜？」

どうせ行ったところで

俺の前で誰かが最後の商品を取るんだろっけど。  
遂に讒言まで言い出した。

そんな当麻を見ていられなかった良守は、

「…俺、弁当二つあるけど一つやるか？」

と尋ねた。

すると当麻は顔をぱっと上げ、

「本当か？」

と太陽のような明るい表情で良守に尋ねた。

そんな当麻に戸惑いつつ良守は、

「お、おう。勿論。」

と答えた。

すると、

「ありがとう！心の友よ〜！」

と言って当麻は良守に抱きついた。

「ちょ、馬鹿やめる上条！離れる！

暑苦しいて。」

良守はこの瞬間、

デルタフォースの一角の

そいつから  
馬鹿さ加減を思い知ったのだった…

「ご馳走様でした〜!!」

当麻はそう言って手を合わせた。

良守も軽く手を合わせた。

食事を終えると当麻席を立ち上がった。

「何処に行くんだ？」

良守が尋ねると、

「野暮用だよ。野暮用。」

当麻は良守を背に、

手を振って教室を出て行った。

（この学校にも慣れたなあ〜。）

当麻は廊下を歩きながらふと思った。

慣れつつある風景と人達、

なんだか長い間ずっとここにいた気分だ。

（…ここに慣れても、

この制服だけは慣れないけど。）

当麻は歩きながらそう思った。

紺色の学校指定のベスト、

薄らとチャックがらの入ったワイシャツ、

黒いネクタイに、

モスグリーンのスラックス。

（絶対似合っつてねえよな…

この制服。）

学園都市にいた時に、

ずっと学ランを着ていた当麻は、

烏森学園の制服に対して率直にそう思った。

この烏森学園の制服は元々は学ランだったらしいが、  
新設に伴って制服が一新されたわけなのだが、

「はあ。学ランのまままで良かったのになあ。」  
当麻はため息をついた。  
すると、

「どうしたの？当麻くん？」  
と後ろから自分に話しかける女子の声がした。

「そりゃ、この世の不条理に絶望していたとのことなのですよ。  
上条さんはね。」

その声は自分の身近な声だったので、  
振り返らずにそう答えた。

「なんかよく分からないけど、  
大変なのね。」

その女子はそう言いながら、  
当麻の横に並んで歩いた。

「大変なんですよ。」  
当麻が自虐気味にそう言った。

そして、  
今度はうって変わって真面目になり、

「…霧ヶ丘女子大、  
合格おめでとございます。

時音さん。」  
と当麻は言った。

黒髪ポニーテールで、  
身長が当麻と同じくらいのも、  
美少女と表現しても良い少女、  
雪村時音は、

「ありがとう。」  
と言って微笑んだ。

「…良守は」  
「元気でしたよ。」

当麻は時音が聞こうとしたことを予測し、

先にそう答えた。

「そう……」

時音は少し俯きながら、  
どこか悲しそうに言う。

「はい。」

百合奈からの弁当をおいそうに食べて……」

当麻がそう言い切る前に、

「あべしっ！！！」

時音のボディーパーブローが当麻に炸裂した。

「……良守、クロス」

拳をめきめき鳴らし、

嫉妬の炎を燃やす良守ときねの彼女。

「何故俺が？鬼か？この女？」

当麻はその姿に率直な感想を述べた。  
すると、

「なんか言った？」

時音は当麻を睨みつけた。

「いえっ！！なんでもありません！！！」

当麻は背筋をピンと伸ばし、  
敬礼した。

「ならよし。」

「どうやら、」

鬼の怒りは去ったようだ。

そしてまた深刻な表情になり、

「当麻くん。」

と言って時音は当麻の名前を呼んだ。

「なんでせうか？」

当麻がそう聞くと時音は、

「私がない間、」

良守のこと守ってね。」

とたった一言言った。

「勿論、絶対守りますよ。」

当麻はそう誓った。

その表情は笑っていたが、

何よりも強く、

一方通行より、神の右席より、成人より、

神の力より、そして恐らく本物神よりも、

強く、ただ強く誓った。

「…ありがとう。当麻くん。」

そう言っ隣を歩いていた時音は、

早足で廊下に溢れる人の波の向こう側に消えていった。

「こんなことを誓わせる為に、

わざわざ俺を呼んだのか。時音さんは。」

当麻は廊下を歩きながらそう呟いた。

「今更過ぎるだろ。こんな誓いなんて。」

当麻は言う。

二度目の死を迎えた後も、

何も変わらない幻想殺しがそこにいた。イマジンブレイカー

「友達を守るなんて、

今更過ぎるよ。ホントに。」

(…心配しなくても、絶対に守ります。)  
当麻の心は固まっていた。

（あいつは、  
始めて会った時から、  
守らなきゃいけないと思ったんだ。）

（あいつは、  
危う過ぎる。）

（まるで幻想みたいなんだ。  
俺の右手で破壊できてしまう、  
まるで風の前砂埃みたいな、  
空虚過ぎる幻想みたいなんだ。）

（だから俺は、  
絶対幻想殺しこの手を振るおう。  
風斬の時みたいに幻想を守ろう。）

（そうすればきつと学園都市に戻って、  
またインデックスあいつと一緒にいれるから。）

普通の街の、普通の私立学校の、普通の少年達の  
あまりに強すぎる思い。

これは、

幻想を殺す少年と

空虚な幻想になってしまった少年の物語。

結界術と魔術と科学が一点に交差する物語。

プロローグ 烏森学園編（後書き）

青髪「いや〜。キャラ崩壊してしまいましたね〜。アウレオルスはん。」

アウレオルス「必然。中の人が銀髪の侍と同じだから、ギャグはお手の物。」

青髪「そうかあ〜。そりゃまあ、良かったやないの。」

アウレオルス「…キャラ崩壊、相当恨んでるだろ。」

青髪「勿論!〜!」

アウレオルス「先ほど、『作者が次は青髪がかっこ良いよ』と書いていたが?」

青髪「キャラ崩壊バンザーイ!〜!」

アウレオルス「……………」

青髪「ではみなさん。お便りお待ちしておりますー!。」



死霊支配（デッドマスター）（前書き）

青髪「なあ？アスタはん……」

作者「なんだい？青ピ？」

青髪「今回の僕、

ホンマにかっこええ？」

作者「……」

## 死霊支配（デッドマスター）

ここは学園都市。

総人口280万人のうち、

その8割が学生という教育の街。

『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの』  
という巫山戯た思想に塗りにたくられた科学者が、  
その学生達や街に捨てられた孤児に、  
薬物投与や肉体改造での能力の開発という  
少し人道から外れたことを平気で行う街。

そんな歪んだ街にそびえ立つ、

核兵器すら受け付けない

窓がなく中の音も漏れない

この世から隔絶されたビルに

その全ての歪みと街その者を作った人間がいた。

巨大なカプセルのようなものに満たされた

弱アルカリ性の培養液に漂うようにして、

その中に逆さまに浸かっている

男性にも女性にも、

老人にも子供にも、

聖人にも囚人にも見える

なんとも気味の悪い人物である。

いや、

人物と呼ぶのも間違いだろう。  
何せ人としての生命活動を、  
機械に任せきりにしているのだから。

その名は

『アレイスター・クロウリー』  
と言った。

元々は

世界最高の魔術師で、  
突然魔術を全て捨て、  
一から科学を学び直した、  
魔術世界最大の裏切者である。

そして、

そんな人物に対峙して、  
痛い程の怒りを向けている少年が一人いた。

整髪料で固められた、  
ツンツンとした金髪に、  
サングラス、

さらには学ランの下にアロハシャツを覗かせる、  
なんとも強烈な見た目の少年である。

が、

そんな軽い見た目とは裏腹に、  
世界の力の均衡を保つために、  
世界の裏をあちこち飛び回る  
多角スパイという一面を持つ少年だ。

そんな少年が、

サングラスの下の瞳に、

怒りの炎を燃やす理由はただ一つ。

「貴様、一体何を考えている？」

この男が何を考えてこんなことをしたのか、想像がつかないことだった。

「…何のことだね？土御門元春？」

アレイスターが尋ねると、

「とぼけるな！貴様のせいで、

世界の、少なくとも、

この日本においてのパワーバランスが乱れたということが自覚出来ないのか？」

少年、土御門元春は怒声を上げた。

「…雪村時音のことか？」

アレイスターの問いかける。

「それだけではない！

先刻侵入した水沢華鳥

のことだ。」

土御門はアレイスターに

そう言った。

だが、

「？」

意味が分からないと言いたげな表情をした。

土御門は『チッ』と舌打ちした。

（…全く、白々しいヤツだ。）

アレイスターの態度にそう思いながら、構うものかと土御門は話し始める。

「雪村時音に水沢華鳥が、

裏会側うらいかたにとつてどれ程重要か

分かっているのか？」

それらを学園都市じゅんに引き込めば戦争は必至だ。

貴様はこれが何を意味するか分かってしているのか？」

土御門の怒声に愉快そうな微笑を浮かべる

アレクスター・クロウリー  
学園都市統括理事長。

「一年半前、

裏会あちひいで何が起こったか忘れたのか？

異能あちひいサイドは科学や魔術に比べ、

数こそ少ないが質は二つの勢力と同等だぞ？

そんなものを、

二極化しているパワーバランスに加えれば、

何が起るのか想像がつかないのか？」

土御門は烈火の如き怒りの咆哮を上げた。

すると、

「フッフ」

と何処からともなく怪しい笑い声が聞こえた。

土御門はその声の主が誰なのか分からなかった。

いや、

分かっていたが信じたくなかった。

「フハハハハハハハハハハ！！！！！」

狂ったような高笑いをする人物が

目の前の得体の知れぬ人物だと思いたくなかったのだ。

「いやあ、君は、勘違いをしているようだ。

雪村時音は自らの夢を叶えるために、

霧ヶ丘女子大学に自らの意思で、

正当な手段を踏み入学をしたのだ。

私は関係ない。」

アレクスターは狂った笑い混じりの声で、

そう言った。

「それに、今回の侵入者についてもそうだ。

私の意思はなんら関係ない。」

私を出し抜こうとする者のなんらかの意思だ。」

「!!!?」

アレイスターの一言に土御門は驚愕した。

アレイスターは魔術師として最強だが、

それ以上に彼の恐ろしい部分は、

人格や狡猾さといった内面的なことなのだ。

そんな彼を出し抜こうとする者がいるとは…

土御門がそう思っていると、

「しかも、それをしようとする人物は

一人ではなく二人以上、

さらに一人は恐らく学園都市の人間ないぶのようだ。」

「なっ…!?どういうことだ!?!」

アレイスターがさらに驚くべき発言をしたため、

彼はそれを問い正した。

「…私の知らぬ間に、

新たな暗部組織を作ったものがいるのだよ。」

アレイスターが答えた。

「馬鹿な!?!」

暗部組織はロシアから帰還した

アクセラレータ  
一方通行に壊滅させれた筈だ!?!」

土御門が反論した。

#### 暗部組織

学園都市の真つ黒な闇の象徴のようなもので、

学園都市統括理事会の命令で動き

任務を行う者達のことである。

だが、

そう呼ばれる組織の全ては、

第三次世界大戦の舞台であったロシアから帰還した学園都市最強の能力者『一方通行』に消された。その筈だった。

「信じられないのも無理はない。

私も自分がここまでしてやられる等、

まるで信じられないのだ。」

「じゃあ、ホントに…!?!?」

「…ああ。本当だ。」

そう言うアレイスターの顔に、

不安や焦りが現れているのを、

土御門はなんとなく感じた。

「…今回、件の暗部組織に

侵入者の捕縛、

もしくは殺害の命令が下った。

そこで君に頼みたいことがある。」

アレイスターが頼み事などをするのは、

これが初めてなのではないかと土御門は思った。

「…何だ?」

土御門はその内容を尋ねた。

「侵入した少女の保護を頼みたい。」

アレイスターのその言葉に土御門は、

「分かった。」

と二つ返事で答えた。

土御門もそうすべきだと思ったからだ。

だが、

そうすることの意図は

二人の間で全く違っていた。

一人は異なる二つの勢力が激突するのを防ぐため。

そしてもう一人は、

「…やれやれ。」

この仕事土御門元春だけでは無理があるかもしれんな。」

アレキスターは、

人の気配が消えたビルの中で呟いた。

「だがあの少女には死霊支配が接近した。」

抜かりは無い。」

アレキスターは呟いた。

「しかし甘いな。」

この程度では私の計画プランの妨害にもならない。」

世界最高の魔術師にして、学園都市最高の科学者はそう言って歪んだ笑みを浮かべた。

まるで全ての元凶の正体が

始めから分かっているかのように！。

デッドマスター  
死霊支配。

この学園都市にたった一人しかいない  
多重能力者の少年に与えられた異名だ。

尤も、

最初から与えられていた異名ではない。

あの日、

彼にとつて最も大切な人がいなくなった日に、  
今まで自分と気さくな態度で関わっていた研究者に  
侮蔑と畏怖をこめてつけられた異名なのだ。

一見すると酷い話に聞こえる。

けれど彼がそう呼ばれるのも仕方ないのだ。  
周りに居合わせた研究者達を  
一人残らず殺したのだから。

まだ、

一方通行のように、

地獄のような実験をさせられていたというなら  
正当性があるかもしれない。

けれど彼は一度だって、

そんな危険な実験をされたことは無かった。

むしろ、

研究者達と死霊支配の関係は良好で、

死霊支配にとつてはそこが居心地の良い場所となっていた。

特に

彼の能力を発現した、

『木山冬華』という名の女性は、

物心ついた頃から学園都市にいて、  
親の愛情を知らなかった彼にとつては、  
彼女が伝えてくれる暖かさこそが  
恐らくそれなのだと思えた。

死霊支配と呼ばれる少年にとつては、  
それはとてつもなく大切な存在で、  
言いようがないくらいに愛しくて―

だからこそ、

それが無くなってしまうえば、  
世界なんて途方もなく無意味だった。

それが研究者を殺した理由と言うなら、  
少し残酷かもしれない。

けれど仕方ないのだ。

ホントは

傷つけたくなくたって、  
何も破壊しなくたって、  
本当の親を失い、

本物ではなくてもそれと同じくらいに

大切な存在を失った少年には、  
自分を止めること等出来なかったのだから――

そんな少年は、  
研究者達を八裂きにしながらも、  
必死に叫び続けた。

駆けつけた警備員を  
アンチスキル  
ありとあらゆる手段であの世に送りながらも、  
少年は泣き叫んだ。

偶々目に入った、  
髪も肌も真っ白な悪魔のような少年を  
手にかけてようとした時も、  
少年の思いはその言葉で染まっていた。

自分の血と白い悪魔の瞳の緋を見つめながら、  
痛みに飲み込まれて、  
消えゆく意識の中でも  
その言葉は存在し続けた。

自分を死んだことにしたあの日も、  
きつとそれを思っていた。

木山の親友だという、  
パン屋の女主人に預けられたあの日も、  
多分その言葉が思い出された。

上条当麻しんじゅうちと土御門元春との  
平穏な日々の中で彼等と笑いあっている時も、  
頭の片隅にはその言葉が確かにあった。

そして今。

少年は目を覚ました。

久しぶりに能力を使ったからかもしれない。  
頭が痛かった。

元々、  
能力を日に十個以上使えば、  
凄く痛むのだが、  
今日はたった五つだけで、  
脳に潰れるような痛みが襲っていた。

それにー。

（ああ、畜生。

何でだ？

頭の中、あの人のことで一杯じゃねえか…）

暖かな微笑みが、  
青髪ピアスとか死霊支配とかでない  
自分の本当の名を呼んでくれる心地良い声が、  
風に揺れる少し色素の薄い綺麗な髪が、

自分に向けられる優しい眼差しが、  
この青空に手を伸ばせば、  
全てが戻ってくる気がした。

でも、

それは叶わなかった。

青い髪の少年は

自分の髪と同じ色の空間を、  
右手がすり抜けるのを感じた。

涙が滲んだ。

（上やん。

てめえなら出来んのかな？

大切な人が目の前にいないっていう  
巫山戯た幻想をズタズタに引き裂いて、  
原型留めねえくれえにぶつ殺すことがさ…）

大した力が無くたってなんだって出来る。

街の不良だって、

魔術師だって、

あの一方通行だって倒せる。

彼は知っている。

自分を青髪ピアスと呼ぶ少年が、  
実は凄いヒーローだということを。

「何処にも行かないで。

戻ってきてよ。

木山センセイ…」

死霊支配の口は、  
またこの言葉を紡いでいた。

## 死霊支配(デッドマスター)(後書き)

青髪「いやあ。やっと本編行きましたね。」

土御門「そうだニャー。」

青髪「てか、今回のゲスト、

なんで土御門はん？

今回たいして出てけえへんかったのに。」

土御門「このコーナーのゲストの条件が、

『青髪以外のその回で出た人二人ま

で

ってなってるのニャー。

今回出てきたのは青髪の他に俺だけ

だから、

今回は俺ってことですよ。」

青髪「ん？でももう一人……」

土御門「あいつはヒッキーだから、

参加出来ないぜよ。」

青髪「恐らく原作のラスボスに対して

扱い酷過ぎと違う!?!」

土御門「別に構わないんだぜい。

きつとみんな思ってるから。

そんなことより今やるべきこと

あるんじゃないかやー？」

青髪「何ですー？」

土御門「そろそろこのコーナー、

名前が欲しいんじゃないかやー。」

青髪「そういえばそうやな。

んじゃ、募集してみるー？」

土御門「やってみるべきだぜい。」

青髪「てなわけで、

このコーナーの名前を募集したいと思います

！。

感想コーナーにこの話の御意見御感想と共に、

このコーナーのナイスな名前をのせてなー。」

土御門「…ぶっちゃけ絶対来ないけど。」

青髪「……」

土御門「感想待ってるんだぜい。」

死霊支配(デッドマスター)？ ブラックアイテム(前書き)

今回も駄文で申し訳ございません。

楽しんでくれたら幸いです。

## 死霊支配（デッドマスター）？ ブラックアイテム

「あつ。もしもしセンパイ。

聞こえますう〜？

こちら座敷<sup>おきへしゆたじ</sup>瞬間ですう〜。」

学園都市の第七学区の表通りを歩きながら、

少年は一般的に迷惑と言われる声量で、

ゲコ太やカナミンと言った、

少女向けのアニメのキャラクターのストラップが

ジャラジャラとついたサーモンピンクの携帯を片手に

何者かと会話していた。

そんな少年の姿は、

人の目を惹くものがあった。

袖が自身の腕より長いボーダーの長袖にTシャツに、  
フィット感が欠片も残されていないオーバーオール  
といっただらしない服装。

人形のように可愛らしい、

少女と言ってもおかしくない外見。

くしゃくしゃとした清潔感のない茶色い髪の毛。

そして、

携帯を持つ右手とは逆の手で、

袖に仕込んだバタフライナイフを、

取り出したり閉まったり、

刃を出したり閉まったりを繰り返す妙な仕草。

街中で見かけると驚くかもしれない。

そんな印象を受ける異様な少年。

だが、  
驚くべくは外見やその仕草より  
話しの内容であった。

「そついえばあゝ、

さつき、土御門センパイ殺したんですけどお  
大したことありませんでしたよ〜。」

全くもって平和からかけ離れた一言である。

しかも、話の調子がそれを語るような

口振りでなかった。

まるで女子高生が友達に対して先生の悪口を言つような  
そんな話振りだった。

「いやあゝ。窓の無いビルから、

ボクがつけてたのにも、

全く気がつかなかつたしい〜。

ム力ついたので、

ナイフを臍物に転移してぶっ殺しましたあゝ。」

軽い口振りである。

命をオモチャとしてしか思っていないような、  
軽卒すぎる発言である。

「ていうかあゝ、

あれってホントに暗部抗争の生き残りなんですか？

腹が立つくらい弱かつたんですけどあゝ。」

座敷琶が電話の相手に尋ねた。

「へえ〜。

あれでもホンモノなんですなあ〜。

だとして昔の暗部って甘過ぎです〜。」

座敷琶はそつ言つて、

侮蔑たつぷりな嘲笑をした。

「つていうかそれはそつと、

ボクらを集めてこの組織作った人、

『永澤久継』ながさわひさつぐ でしたっけ？

あの人ホントに凄いですよね。」

今度はうって変わって変わって少し楽しそうだ。

尤も口調が殆ど棒読みで、

あまり感情が伝わらないのだが。

「えっ？

何が凄いかって？

そりゃ、統括理事長を

出し抜きまくってることですよ。」

今回だって理事長の行動予測して、

土御門センパイをボクに殺させるし、

ボクらの組織のことだって、

きつと寝耳に水でしたっけ。」

感情が余り籠っていないが、

彼にすると相当興奮気味らしい。

「ってどうか、

彼のどこまでの『案内人』のボクが、

こんな暗部組織にはいつてるなんて

理事長さん、

絶対気付いてないですよ。」

その調子で話していると、

「はいはい。すいません。

分かりましたよ。

調子に乗り過ぎましたあ。」

少年は電話の相手に釘を刺されたらしく、

少年は嫌々という感じに返事をする。

「んじゃ、

ボクはこのまま侵入者を探すんで、

電話切りますねえ。」

バイバイ。麦野センパイ。」  
そう言って座敷琵琶は携帯を切り、  
それを閉じてオーバーオールの  
胸ポケットにしまった。

そして彼はにたりと笑う。

タイゲット  
侵入者を見つけたらどうするか。

自身の能力である、

シフトムービング  
レベル4位置転送を

どう使うのか？

最大移動距離13km、

最大転移重量500kgを利用して、

遠くから瓦礫を落として圧死させるか、

数十本のナイフを同時に転移させて刺殺するか。

テレポーター

空間移動能力者という

括りにいる彼には出来ることが

あまりにも多く存在していた。

そして、

彼は自分を転移した。

学園都市のビル群の高いところへ。

取り合えず何をどうするかはこれから

決めれば良いのだから。

そう考えて。

その顔に似合わず、  
飢えた獣のように舌舐めずりしながら。

「……………」

髪ピアスの少年は、

現在の状況を冷静に考えてみていた。

その結果おかしい点が二つあることに  
気がついた。

一つめは自分が今寝そべている場所。

自分が眠っていた理由は

能力使用で脳を酷使し過ぎた結果として

受け止められるが、

見上げた空に浮かぶ雲が、

やたらと大きく感じる理由はどついうこと

なのだろうか？

そして二つ目のおかしな点は、

自分の手や、腰や、背中が触れている地面は

非常に硬いのに、

頭が触れているところはやたらと柔らかいということ。

(…取り敢えず雲が近いつていうのは、

ビルの屋上みてえに高えとこにいるからだ。

だが、俺の記憶は間違いなく、

路上でクソ豚を八裂きにしたところで途切れてる。

コイツはどおいうことだ？

てか、頭が柔らかいってというのは

一体全体何が…)

青髪ピアスは思考を働かせていると、

「あの、大丈夫かな？」

という声と共に、

視界に一人の少女の顔が飛び込んだ。

ゴールドブラウンの髪をショートカットにした、

同色の瞳をした垂れ目、

少し幼さを残した自分と近い年くらいの

美少女と呼んでもよい少女の顔が。

(…おっ！可愛いな、オイ！

けど、どおして空の上から女の顔が？)

青髪は素朴な疑問を浮かべながら、

現在の状況を冷静に考察してみた。

自分は仰向けになって空を見上げていた。

膝の上が妙に柔らかい。

そして、少女の顔。

このことから推測される状況はただ一つ。

その答えを導き出した青髪は、

心臓の高鳴りと顔の火照りを感じた。

抑えようとしても止まらない。

しかも、それに耐えきれない。

そこから

なんとしても逃げ出したいという衝動から、

青髪は起き上がるうとした。

だが、

そんなことをすればどうなることか。

答えは簡単だ。

「痛っ！！」

「っええ！！」

少女は鼻と少年のデコがかち合い、ぶつかることとなる。

鼻を抑えながら悶絶する少女に、

「すっ、すまん!!」

僕、あんまもてへんから

女の子に膝枕とかされたことなく、

取り乱してもうた!

ホンマにごめんな!!」

と自分のデコの痛みに耐えつつ、

手を合わせて少女に対して青髪は謝った。

そんな青髪に対して、

「だ、大丈夫だから。」

謝らなくて良い。」

と必死な青髪にあたふたとしながら言った。

「さよか？」

女の子やのに顔とか傷ついてへん？」

依然少女の心配をする青髪に、

「ホントに大丈夫だって。」

それに私、

傷とかついても平気なくらいキモいから。

だから安心して。

取り敢えずお互い落ち着こ?ね?」

と精一杯の気遣いを見せて、

少女はその場の收拾をつけた。

落ち着いた後、

青髪はまじまじと

地べたに座る少女を見つめた。

赤いネクタイに、

白いブラウス、タブルボタンのブレザー、

そしてプリーツスカート。

少女の顔に非常に似合った服装だ。

だが、それよりも青髪の目を引いたのは、  
プリーツスカートから伸びる真っ白な足と  
ブレザーがはち切れるのではないかと  
疑ってしまうような胸であった。

「あの…どうしたの？」

首を傾げて尋ねる少女に、

青髪は真剣な表情で、

「いや、

スタイルええなあ〜思て。」

と言った。

すると少女は、

「えっ!？」

そんなことないよ。

私デブだし。足だつて太いし…。」  
と謙遜した。

「いやいや。

そんなことあるて。」

青髪はそう言つて微笑む。

そんな青髪の様子に少女は首を傾げた。

理由は簡単だ。

「てか、君なんやろ？」

能力の使い過ぎでぶつ倒れた僕のこと  
助けてくれたん。

ホンマサンキューな。」

この青髪の明るい雰囲気だった。

凶悪ささえ感じられた、

豚の妖との戦いの時とは、

口調から何から全てが違つていた。

「名前とアドレス教えてくれへん？」

君みたいな子と知り合える機会、  
ホンマにないねん。」

青髪のその言葉は、  
少女にとつて、

決して嘘には聞こえなかったことであろう。

「携帯は持てないからアドレスはないの。

でも、名前は吉宮万里<sup>よしみやはんり</sup>。

一応、レベル3の空間移動能力者。」

少女はそう答える。

すると青髪は、

「僕の名前は青峰奴御<sup>あおみねのお</sup>って

言いますー。

てか君空間移動能力者なんか。

凄いなー。

もしかしてこんなビルの屋上に

僕を転移してくれたん？」

青髪も自己紹介し少女に尋ねた。

すると、

「そうだよ。」

少女はそう言つて微笑んだ。

青髪はそれを見て優しく笑う。

だが、急にその笑顔が表情から消え失せ、

閉じているように見えていた目を見開き

淀みきつた金色の瞳を見せつけ、

恐ろしい怒りや憤りすら感じる表情になって、

「それ、嘘やろ。」

と恐ろしげな声で言う。

「えっ!?!」

「え!?!じゃない。

君の言つてること無理が

あり過ぎるねん。」

驚きの声を上げる少女に向かって、  
青髪は言う。

「ええか、君がもし本当に

レベル3の空間移動能力者やったら、

僕と自分をこんな高い所に連れて来れん。

このビル、

ビル風の強さから推測するに地上200mってところやろ。

レベル3の空間移動能力者の直線距離の

移動距離の限界は50mがせいぜいやし、

重量やつて人一人分が限界や。

僕もレベル3の移動能力テレポーターやから

その辺はよく分かるで。」

「あと、

こんな高いビルの上で

僕を介抱する理由がない。

ビル風が強過ぎて寒いしな。」

さらにもう一つおかしな点を

青髪は指摘した。

そして、

「あと、ついでに言うなら

君、学園都市の人間やないやろ。

だから原石でない限り能力者である筈がない。

つっても原石は特殊な能力者が多くて、

空間移動能力者が原石であるなんてことない。」

という指摘をした。

「そんなことっ」

『ない』と言おうとした少女に対して、

「君の着てる制服、

学園都市のどの学校の制服とも合致せん。

僕あ、学園都市の女の子の制服は

全て記憶しとるからごまかせへんで。」

青髪はそう言つてさらに追い詰めた。

少女の困つたようにも見える表情を見ると

どうやら青髪の言葉は的を射ているらしい。

「…まあ、もう確かめる必要もないけど

一応やらせてもらうで。」

そう言つて青髪は少女の手に触れて、

目を閉じ、

ある演算式を組み立てた。

そして、

目を開けると

「水沢華鳥みずさわあとり…ね。

可愛い名前じゃねえかよ。

だが、多重妖混じりつてのは

よく意味が分からないな。

空飛んだりしてるし可愛いし、

てめえは天使つてヤツなのかあ？」

と尋ねる。

少女、水沢華鳥は自分の本当の名前と能力を

言われたことに別段驚いた様子はない。

青髪は多重能力者であるから、

きつと心か記憶のどちらかを読むような

そんな能力を持つているのだからと思つたのだから。

それどころか俯き気味な表情で

「天使じゃない。

多重妖混じりわたしはただの化物。

多分青峰くん、貴方以上の。」  
と言った。

青髪は

「俺以上の化物？」

いるとしたら一方通行くれえだよ。」  
アッセラレータ

と自嘲気味に言った。

すると少女は急に立ち上がった。

「あっ？一体どおして…」

「見てて。」

青髪が尋ねようとすると、

少女はそれを止める。

そして、

少女の周りの空気が少し重くなったと思うと

その時科学の街ではあり得ないような、

異常現象が起きた。

華鳥の

着ている服の背中の中を突き破り、

そこから自身の身長の二倍ほどの長さがある

巨大な翼が生えたのだ。

それも天使といった非現実な翼でなく

茶色の鳶や鷹のような茶色の羽の中に、

まばらに緑や赤や青といった

鮮やかな羽が見える翼だ。

だが華鳥の体に現れた変化は翼だけではなかった。

水のような青い鱗に覆われた

水掻きのある手からさらに鋭い爪がある、

異様な外見の両腕。

整った容姿を崩さない程度に

顔に発生した腕のものと同じ鱗、

そして猛禽類を思わせる甘草色の瞳。

外見は確かに、

化物かもしれなかった。

「驚いた？当たり前だよな？」

華鳥は尋ねた。

すると、青髪は

「何が化物やねん。

めっちゃ神々しいやん。」

と満面の笑みで言った。

「てか、君は自分が人外である事を見せつけて

僕の恋愛対象から外れるつもりやろうが

そうはいかんで。

なんとたつて僕あ、義姉義妹義母義娘双子未亡人先輩後輩同級生女教師幼なじみお嬢様金髪黒髪茶髪金髪ロングヘアセミロングショートヘアボブ縦ロールストレートツインテールポニーテールお下げ三つ編み二つ縛りウェーブくせつ毛アホ毛セーラーブレザー体操服柔道着弓道着保母さん看護婦さんメイドさん婦警さん巫女さんシスターさん軍人さん秘書さんロリシヨタツンデレチアガールスチュワードesuエイトレス白ゴス黒ゴスチャイナドレス病弱アルビノ電波系妄想癖二重人格女王様お姫様ニーソックスガーターベルト男装の麗人メガネ目隠し眼帯包帯スクール水着ワンピース水着ビキニ水着スリングショーツ水着バカ水着人外幽霊獣耳娘まであらゆる女性を迎え入れる包容力を持つてるんやで。

人外の君かて僕の恋愛対象や。

残念やったな。なははははは！！」

と言つて馬鹿笑いをした。

「……………」

華鳥は顔を赤くする。

しかも何やらぼそぼそ呟きながら。

「なあ、そこは拒絶するとかしてくれんと僕かて困るんやけど？」

なんかめっちゃ滑ったみたいになってるやん。

関西人としてそれは耐えれないんやが。」

青髪はそう言つと、

「あ、ごめん。」

華鳥はそう言つて申し訳なさそうに謝つた。

そんなに本気で謝る必要もないのにと

青髪は思ったが逆にそれを指摘するのも

華鳥に悪いと思いやめることにした。

そして、

とてつもなく強いビル風がふき、

華鳥は

「…そろそろ行かないと。」

と思ひ出したかのように言った。

「守美子さんつて人を、

助ける為にか？」

青髪はその質問に少女は、

「そんなところまで分かるんだ。

青峰くんの力つて。」

と驚いているのだから、

どうでも良いのだから図りかねる声を漏らした。

「『幻想殺し』やつけ？

その能力を使うヤツを探すんやろ？

僕に出来ることないん？」

青髪は尋ねた。

尋ねながらも、

青髪は華鳥のことを凄いと思った。  
恐ろしいではなく凄いと。

自分のことが色々と読まれているというのに、  
それを全く恐ろしいと思わない。

普通の人間だったら、

それは何より怖いことであり、

もし自分の記憶や過去を

覗けるような人間がいるとしたら

人はその人間を嫌う傾向がある。

自分の疚しい過去や汚い感情を探られるのだ。

当然であろう。

実際この街で心や記憶や感情に関する力を持つ者は  
人から忌み嫌われる者が多い。

「分らないと思うけど多分ない。

事前に調べた情報だと『幻想殺し』って

かなり非公式な能力だから、

『ばんく』っていうのにも載ってないらしいし。」

華鳥はそう言って笑った。

『バンク』に『空間移動能力者』。

いずれも学園都市内での用語であり、

外から来た人間がしるのも不自然かもしれないが

この少女も一応侵入者なのだから

当然かもしれない。

青髪がそんなことを考えていると、

「それに、

私みたいな化物に関わったら、

幸せがみんな逃げて行くよ。」

華鳥はそう言って笑った。

笑っているのに、

心の中身は正反対に見える、

そんな悲しい笑顔だった。

そして多重妖混じりと呼ばれる少女はその表情で青髪に言う。

「私が行き着くのは

地獄の果てに決まってるんだから。

青峰くんが来て良い場所じゃ、ないんだから。」

青髪は何も言えなかった。

いや、言っただとこで

自分は上条当麻のような、

誰かを救える偽善を言える程

立派な人間でないから何を言っても

意味が無いと思っただからだ。

「さよなら。青峰くん。」

木山先生に会えると良いね。」

青髪が躊躇しているうちに、

少女は風を追い抜くような速度で、

どこかに飛んで行った。

青髪は待てとも言えなかった。

ただ華鳥の過去を見てしまって、

華鳥を死霊支配じぶんと重ねて

そんな彼女をなんとなく引き止めたくて、

青過ぎる空に手を伸ばすだけだった。

そして虚しくなった青髪はポケットに

手を入れて、

その場から立ち去ることを決めた。

立ち去って少女のことを

忘れることにした。

第20学区のとある廃ビル。  
元々幼児向けの玩具の会社であったそこは  
暗部組織と呼ばれる者達の隠れ家と  
なっていた。

そこの一階の元々受付などがあつたロビー。  
そこにその暗部の構成員達がいた。  
黒いライダースーツに身を包んだ  
ウェーブのかかった元々明るめの茶色だったロングヘアを  
ライダースーツと同じ真っ黒に染めた女性。  
ウール生地のスーターのようにも見えるワンピースを着た  
シヨートカットの小学校高学年位に見える  
背の低い少女。  
おかつぱ頭にピンクのジャージといった  
地味な風貌の無表情な少女。  
茶色いジャージを着てジーンズを剥いた  
金髪の成年と言つて良い見た目の少年。  
銀髪ツインテールに緑と赤のオツドアイ、  
ロリータファッションに身を包む、  
メイクがキツめの少女。

そんな構成員達はそれぞれ  
ライダースーツの女性が受付のカウンターに腰掛け、  
足を組み、目を瞑り、  
銀髪ツインテールの少女が  
床にコンポを置いて、  
ヒップホップに合わせてダンスの練習をして、  
他の三人が元々会社の備品であつたと思われる

4人掛けのソファーにまるで、  
悲しみに打ちひしがれるように座っていた。  
この様子を見れば彼女達の  
繋がりが希薄に見えてしまいかもしれない。

だが、

本来銀髪ツインテールの少女を除く四人は  
『アイテム』と呼ばれる組織のメンバーであった。

一度は暗部抗争やリーダーであった麦野沈利の暴走によって  
解散となったアイテムだがそれでも

あることがきっかけで

殺し合いの戦いに発展していた

麦野沈利と浜面仕上が和解し、

アイテムは再び結成することとなった。

そんな紆余曲折を経ていたからこそ、

金髪の少年浜面仕上も、

無表情な少女滝壺理后も、

アイテムのメンバーで最年少であった絹旗最愛も、  
分からなかったのだ。

麦野沈利が何故、

自分達を裏切って

学園都市の暗部に引き戻し、

その心を服装や髪の色のように

真っ黒に染め上げたのが。

辺りに重苦しい空気が流れていた。

その時、

「沈利ねえーさん。」

瞬時からメールきたぜ〜。」

と踊っていた銀髪ツインテールの少女が、動きとコンポから鳴り響く音を止めて黒髪の女、麦野沈利に話しかける。

「内容は？椿舞姫？」

麦野は無機質で凍り付いたような声で、銀髪の少女、椿に尋ねた。

「『イエーイ（星）

侵入者見つけた〜（ハロウィン）

第九学区の上空にて（ハート）

これから刈りに行くぜ〜（幽霊）

みんなも来てね（ハート）』  
だつてさ。」

柳は携帯の画面に写る

座敷琶のメールに添付された写真を

麦野に見せながら言った。

「別に絵文字まで説明しなくても

宜しいのですが。」

麦野は冷静なツツコミをしそして、

「では、第九学区に向かいますよう。」

と冷淡に吐き捨てるように言った。

「ホントにやんのかよ!？」

浜面が急に立ち上がって言った。

「当たり前です。」

不穏分子の削除が私達にかせられた

使命ですから。」

麦野はまるで台本でもあるかのような

感情が一つも込められていない台詞を吐いた。

「てめえ!!!」

ふざけんのも大概に…」

『しゃがれ！！』と怒鳴ろうとした時であった。  
「えっ！？」

浜面は信じられない出来事に対して  
マヌケにも聞こえる声を出していた。  
自分の頬を掠めるかかすめないかの位置に、  
細い光線が通り抜けた。

浜面はそれが何か分かっていた。

曖昧な形で存在する電子を操り、  
それをぶつけて物質を破壊する、  
麦野沈利の能力。

学園都市のレベル5の第四位としての力。

マルチタウナー  
『原子崩し』

浜面は頭ではそのことが分かっていた。  
分かっているからこそ分かりたくなかった。

「浜面仕上。

貴方は自分にかせられた使命を  
忘れたのですか？

学園都市の礎になることではないのですか？」

麦野沈利がそんなことをいえる程に、  
学園都市に染まってしまったことを。

「分からないと言うなら、  
滝壺理后を破壊しますか？」

麦野は自分の言うことに従わない浜面に、  
最低の一言を放つ。

「てめええええエエエエ！！」

愛する人を傷つけると言う麦野に、

浜面は拳を振りかざそうとする。  
だが、

「超やめて下さい！！浜面！！！」

絹旗に後ろから抱きつくような形で止められた。

「放せ！！絹旗！！！」

「超落ち着いて下さい！！！」

今の麦野に勝てるわけないってのが、  
分かんないんですか！？？」

絹旗にそう言われ浜面ははっとした。

同時に歯ぎしりする程の悔しさがこみ上げた。

「取り合えず、

気は済んだね。浜面ちゃん。」

突然椿が緊迫した空気を、

巫山戯た調子でぶち壊し、

「沈利姐さん、さっさと行こうぜ。」

『ブラックアイテム』は、

暇じゃねえんだからさ。」

と麦野をせかした。

「そうですね。」

浜面仕上も私との実力差を、

しっかり理解したようですし。」

麦野はそう言っつて、

浜面と絹旗の隣を横切り

廃ビルの外に停めたワゴン車に向かった。

その後ろに椿が続ぎ、

浜面の手前で止まり、

「これが『ブラックアイテム』だぜ。」

浜面ちゃん。」

と言っつて気味の悪い笑みを浮かべた。

浜面は何も反応を示さない。

それがつまらないのか、  
椿はさつさとワゴン車に乗りこんだ。  
絹旗も乗りこむ。

浜面もそれに続こうとした。  
すると、

「はまづら。」

と後ろからソファアに座っていた滝壺に  
声をかけられたため、

「どうした？ 滝壺？」

と浜面は彼女に問いかけた。

「アイテム<sup>わたしたち</sup>って、

なんでこんなことになっちゃったんだろ？」

滝壺の言葉に浜面は衝撃を受けた。

普段無表情な彼女が本当に辛そうな表情をしていた。

浜面は思わず滝壺を抱きしめた。

滝壺が、

その辛さに耐えられそうになかった。

自分が、

その辛さに耐えられそうになかった。

だから抱きしめた。

浜面は滝壺を本気で愛している。

だから麦野のしたことは許せなかった。

学園都市狙われていた滝壺を

わざわざ危険な暗部に引き戻したのだから。

和解した時に、

もう滝壺を傷つけることはないと思ったのに  
滝壺を傷つけたから。

麦野が許せない。

もし麦野をあそこまでに  
変えてしまった者がいるならば、  
そいつが許せない。

『ブラックアイテム』を作らせた、  
永澤久継が許せない。

『ブラックアイテム』が許せない。

そして、

何よりそれを滝壺のために  
どうにかしてやることの出来ない  
自分が許せなかった。

死霊支配（デッドマスター）？ ブラックアイテム（後書き）

麦野「最早、原作と性格がかすりもしてないですね。私。」

青髪「まあまあ。そう言うなや。作者かて下手なりに頑張ってるやから。」

麦野「そうですね。下手なりに頑張ってますからね。」

青髪「そうそう。下手なりに。」

アスタ「お前ら、それ以上言ったら泣くぞ…。」

死霊支配（デッドマスター） 多重妖混じり（前書き）

ぐだぐたやん…

それでも良いなら  
読んで下さい…

## 死霊支配（デッドマスター） 多重妖混じり

メモリーブローラ  
記憶探求。

学園都市に本来いてはならない、  
たった一人の多重能力者の持つ能力である。

触れた者の記憶の中から、  
あるいくつかの『単語』<sup>ワード</sup>を手がかりに  
記憶の検索を行い、  
触れた者の視点で体感出来る能力である。

例えば、  
『昨夜 食事』を『単語』として検索すれば、  
昨夜の食事風景が体験出来る訳である。  
これの特徴としては、

『単語』をアバウトに設定すると、  
複数の記憶を体感出来ることだ。  
例えば検索する単語を『好きな人』と検索すると  
現在好きな人との先週のデートから、  
初恋の人との甘ずっぱい思い出まで色々な記憶を  
体感出来る訳だ。  
ちなみに体感に使う時間は  
いくら体感する思い出が多岐とも  
地球上の時間で0.5秒ほどである。

これほどのスペックで  
判定が限りなくレベル4に近いレベル3  
というのだから可笑しな話である。

たが、  
路上を歩く青峰、  
いや水沢華鳥に名乗ったのは  
通っている高校の名簿に載っている偽名だから、  
ここでは青髪ピアスというべきだろうか？  
とにかく彼はこの能力を、  
愚かにも学園都市に侵入した少女華鳥に対して  
使用したのだが、  
使わなければ良かったと後悔した。

彼女に対して行った検索は二つだ。  
一つは『自分の本当の名前』。  
もう一つは『自分の能力』。  
この二つの検索で青髪は分かってしまったのだ。  
彼女が今までどれほど辛かったのかが。

少女、水沢華鳥は10歳になるまで  
名前を与えられていなかった。  
この少女はとある小さな村の、  
結構裕福な家計に生まれたらしく両親も健在。  
しかし、名前が与えられていなかった。  
その理由は生まれる時に、  
背中に羽が生え、  
腕は人魚のように鱗と水掻きのついた、  
異形の姿で生まれたからだ。  
その所為で両親にも祖父母にも兄弟にも  
忌み嫌われて、ロクに食事も与えられず、  
放ったらかしにされ、そして名前すらつけて貰えなかった。  
という話である。

それは少女が力のコントロールを身につけ、  
普通の人間らしい姿になっても  
変わらなかったそうだ。

唯一友人であった

『せんくん』という自分と同じ、

異形の姿になれる少年にも、

華鳥が7歳の時に力を暴走させ攻撃した

ことをきっかけに、

『化物』と言われ蔑まれ、

遠ざけられたらしい。

(…ひどい話しやな。)

青髪。ピアスは率直にそう思った。

学園都市の(青髪自身もそれなのだが)孤児、

つまりは『置き去り』チャイルドエライですら

名前が無い子供なんていない。

それがどれ程辛いのかなんて分からないが、

いわゆる幼児虐待だの育児放棄だの次元を

超えてしまっていることだけは確かだ。

だが青髪。ピアスが許せなかったのは、

(なんやねん!! 同じ力を持ったヤツにすら

化物扱いつて!!)

それであった。

青髪はそれが許せなかった。

青髪は能力者はけものに

『化け物』呼ばわりされるスペックを誇っている。

だから青髪は分かる。

それが本気で辛いのだと。

それでも一方通行を化け物呼ばわりするのだから

矛盾であるのだが。

そんな辛い過去があるのだから、  
『守美子』と呼ばれる女性に、  
初めて名前をつけられ、

その名前を愛しそうに呼ばれた時は  
言い様がないくらい嬉しかった筈だ。  
その村に訪れた異能者であった、

『守美子』と呼ばれる女性。

たった一人橋の下で蹲る少女に、  
声をかけ、少女に攻撃を受けても、  
少女を抱きしめた女性。

「今まで辛かったでしょ？」

化け物なんて呼ばれて、  
ずっと一人で。」

「私もね、同業者に化け物と  
呼ばれたことがあるの。」

「なんだかあなたとは気があいそう。  
名前教えてくれない？」

「名前無いの？」

「だったら私がつけてあげる。」

「姓は『水沢』、

名前は『華やか』の『華』に『鳥』で

『あとり』なんてどう？」

普通に『花鶏』だとあまりかわいくないし。」

「気に入ってくれた？良かった。」

「じゃあ、よろしくね『華鳥』。」

青髪の頭の中で女性の言葉がはつきり再生された。  
かれのちから  
記憶探求では、

当事者の感情まで体感出来ないが、

きつとこの時華鳥は嬉しかった筈だ。  
たった十日間の記憶が以上に鮮明なのだから。

レベル3の記憶探求はどうも不完全で  
どうでもいい記憶や

忘れたいくらい辛い記憶ほど、

映像が不鮮明で聞こえる音もノイズ混じりになる。

だからその逆もしかり。

その者にとって大切な記憶程、

はつきりした状態で見えるのだ。

だから彼女の心情も容易に想像出来る。

それに、青髪には分かるのだ。

大切な人に名前を呼ばれることの嬉しさが。

青髪の場合は自分の名前をつけた者は

自分を学園都市に置き去りにした両親だが、

大切な人に名前を呼ばれることの嬉しさは

きつと共通なのだと思う。

だから、

『守美子』と、

どんな理由があるかは知らないが

永遠に会えないと知って悲しかった。

『幻想殺し』でそれを助けられると知って、  
嬉しかった。

学園都市に侵入してでも、

その手がかりを探そうとした。

『木山先生に会えると良いね。』

似た境遇にいる、

自分と同じく誰かに会いたがっている者に向けた彼女の言葉が青髪の胸に響く。

自分は一体何をしているんだろう？

何か手伝えることがあったのではないか？

自分と同じ境遇にある人のために、

その人が会いたい人に会えるように

することが出来たのではないか？

上条当麻だったらそうしていた。

彼の場合、

自分よりも遥かに幸せな人間にも

手を差し伸べるのだ。

自分と同じく不幸な人間にだったら

尚更手を差し伸べるのだろう。

だが、

青髪はどうだ？

自分と同じ境遇の者にも

手を差し伸べられない。

いや

差し伸べたいが、

差し伸べられない。

今日彼は、

自分の化け物性を再確認した。

そして、

結局どこまで行っても自分は  
デッドマスター  
死霊支配だったのだ。

青髪の力は、  
バッドエンド  
誰かを幻想から救う力じゃない。  
バッドエンド  
死霊を積極的に誰かに届ける力だ。

そんな彼では華鳥を助けられない。

「畜生！！」

青髪は思わず呟く。

冷たい風が耳たぶの傷に吹き付け、  
青髪の憤りを加速させた。

うざったく感じた青髪は、

すぐさま肉体治療と名付けた  
セルフリパース  
治癒能力でそれを治す。

（そっいや、どうすりゃいいんだろ？

リミッター  
制御装置無くしたんよなあ。）

青髪は自分の耳に目をやりながら言う。

制御装置は青髪が、

学園都市から支給された、能力を隠すための、  
一見ピアスのようにも見えるアイテムだ。

これがある間は、

レベル2にダウンした筋肉増強  
バリアブルマッスル

以外の能力が使えない。

これがあるお陰で青髪はまともな生活が出来る。

いつキレて能力を使用してしまおうか

分からないからそれをつけるしかなかった。

何処まで行っても、

青髪は自分が誰かを傷つけたり殺すのが怖いのだ。

これからどうしようか？

そう悩む青髪の目の前に、  
信じられない光景が飛び込んできた。

第9学区の家電量販店が連なる大通り。

だが休日だというのに、

そこに人は一人も居なかった。

空から少女が落ちてきて道路の真ん中に

クレーターを作ったと思ったら、

その少女が突然立ち上がるという異常事態発生。

さらにその頭上に洗濯機が落ちるとい

唐突な危険事態。

極めつけはそれを少女が

人魚の様にも見える爪の生えた

異形の腕を使い真つ二つという異常現象。

これだけ非日常を体感すれば人は

その場から逃げ出したくなるものだ。

「あんたさあ〜。

一体どんな体してんのお〜？

普通人は上空何百メートルから

蹴り落とされれば死ぬし、

その後洗濯機を真つ二つにするなんていう

馬鹿げたこと出来ませんよ？」

少年座敷琶瞬時は、

自分を睨みつける、目の前の侵入者に対して言った。

「私、化け物だからこのくらい軽いよ。」

侵入者の少女、華鳥は笑う。

「ふーん。そうなんだあ。」

まあ、化け物だろうと僕の敵じゃないけど。」

少年はそう言っテレポートて華鳥の前から消えた。

いや、空間移動能力で何処かに

転移したのだ。

「無理だよ。」

化け物を止めるなんて。」

少女は絶望を込めてそう言った。

座敷琶は、

5階建ての家電量販店の3階に転移した。

侵入者の少女の位置からは死角になり、

自分の位置からは少女がはっきり見える、

そんな位置にあるビルである。

「つたく、なんだあの化け物。」

座敷琶は毒づきながら、

壁に張り付きながら窓から、

少女の様子を観察する。

接近戦は彼にとってまずかった。

向こうは人間離れた耐久力と、

洗濯機を真つ二つにする妙な斬撃を保持している。

『敵じゃない』なんていうのは強がりだ。

それどころか、

遠距離以外で視線の先にいる化け物と、

立ち回れる気がしなかった。

「でも、任務ですし、やるしかないよなあ。」

そう呟いて座敷琶は、走り出して、

並んでいる冷蔵庫、洗濯機、マッサージ機等、

ありとあらゆる家電に手を触れ、

侵入者の少女の頭上と、その半径10mくらいにそれ等を次々にテレポートした。

すると、彼女の頭上から、

ありとあらゆる家電がまるで土砂降りのように降り注いだ。

彼の能力、空間転移は、

彼の前任の『案内人』である結標の能力、

『座標指定』と、

同等の力を誇る空間移動系最高クラスの能力だ。

最大重量で『座標指定』に遥かに劣り、

あちらと違い触れたものしか転移出来ないが、

移動出来る距離が異常に長く、

そして通常、空間移動能力者は、

空間移動の後に次の移動に移るのに

タイムラグが生じるが彼の能力にはそれが無いのだ。

その長所を生かし、

次々と侵入者の頭上に物体を転移させ続けた。

少女はそれに対応している暇もなく、

容赦なしに瓦礫の山の中に埋もれていく。

その様子を見ながら少年は、

ぐったりと壁に凭れかかる。

「あはははは。」

笑いがこみ上げた。

よくよく確認すると油汗を尋常じゃないくらいかいていた。

「あはは。どんなもんだ。」

座敷琶は額にかいた汗を拭いながら、誇らし気に笑った。

その時、

「何のこと？」

と後ろから侵入者の少女の声が聞こえた。

少年がぱつと後ろを、

誰もいる筈のない壁側を振り返ろうとすると、

「ぶおえ!!!」

頬を思い切り殴られた。

何やら壁を突き破って現れた、

背中に猛禽類のような翼を生やした少女の、異形の腕に。

座敷琶はそのまま吹き飛び、

二転三転して、

「あぶつ!!!」

ドラム式の洗濯機に背中をぶつけてようやく止まった。

(……………何だ一体!?何が起こった!?)

座敷琶は

訳が分からなかった。

普通なら瓦礫の山に埋もれたら人は

圧死する筈だ。

いや、

それ以前に上空350mから踵落としを食らえば、

それだけで臓器という臓器がはじけ、

骨という骨が粉碎して死ぬ筈だ。

「…化け物!?!」

座敷琶の頭の中にその言葉が浮かぶ。

彼女は自分のことをそう呼んだ。

だが、座敷琶はそれは単なる比喩だと思った。化け物なんている筈が無かった。

「最初からそう言ってるよ？」

私は化け物って。」

にも関わらず少女は

そんな事を言いながら近づいてくる。

「…来るなよ……」

座敷琶は弱々しい声を上げた。

「多重妖混じりっていう、

化け物なんだって。私。」

座敷琶は少女の声を無視し、

「…来るなって言ってるだろ……」

ひたすら恐怖を拒絶した。

その顔に浮かんでいたのは、

絶望、そして死への不安。

だが、それでも少女は近づいてくる。

「来るなよオオオ！！！」

少年は絶叫した。

だが、少女には届かない。

恐怖で目に涙をうかべながら、

ガクガクと顎が動く。

ファッション誌の読者モデルのような整った顔に、

人形のような微笑みを浮かべるその姿が、

少年にはまるで悪魔の笑みのように映っていた。

（武器！武器っ…！何か武器っ！

武器は無いのかよ。）

ひたすら床に何か無いかと、

手を乱雑に動かす。

すると、

少年の手元に何かが触れた。

希望を持って確認すると、

それは少年が普段袖に隠している

バタフライナイフであった。

どうやら先程の衝撃で手元から落ちたらしい。

少年はその刃と、人間離れた狂気をむき出しにし、

ニタリと笑った。

それこそさながら悪魔のように。

「死ねええええ!!!」

発狂するように絶叫しながら、

少女の頭に刃をむき出しにしたナイフを転移させた。

やったと、

座敷琶は一瞬思ったが、

少女は

「君は学園都市の人間だから

知らないんだろうけど。」

と平然と話している。

(何だよ。何なんだよ。何なんだこいつ!?)

普通だったら、

脳に刃物が刺されば、

良くて麻痺、悪ければ植物人間は、確定だ。

なのにどうして?

座敷琶はひたすらそう思った。

だが、その疑問はすぐさま解決した。

「妖混じりは、

常人離れた優れた身体能力と、

感覚神経を持っていて、

その上傷の治りも凄く早いんだけど。」

そう言いながら、

少女は驚くべき行動に出た。

異形の手で自らの頭蓋を貫いたのだ。  
だが、

それでも少女は倒れることもなく、  
話し続ける。

「多重妖混じりっていうのは、  
二種類の妖を体内に宿しているから、  
邪気が強くて。

身体能力は普通の妖混じりの比じゃないし、  
感覚神経だって凄く鋭敏。それに……」  
語りながら、

少女は手で脳みそをかき混ぜ続ける。  
座敷琶は耐えきれなくなり、

「うえっ」  
と酸っぱいものを吐き出した。

（なんだよ！これは！  
僕はB級ホラー映画でも見てるのか！？  
絹旗か！？絹旗のいたずらか！？）

冷静さを完全にかき取り乱す座敷琶。  
だが、座敷琶が思っているような  
絹旗最愛の巫山戯たいたずらという訳では  
決して無かった。

少女は頭に突っ込んでいた手を引き出した。  
そこにあっただのは、

豆腐のようにも見える桃色の欠片がいくつかついた  
座敷琶のバタフライナイフだった。

「それにね、  
傷の治りが妖混じりの、  
軽く10倍は早いのだ。」

そう言っている間に微笑みを浮かべる少女の、  
頭に空いた風穴はまるで、

それが存在していたのが嘘だったかのように消えた。

座敷琵琶のナイフを床に捨てた。

カランコロンと、床に転がる音が

気味悪く聞こえた。

「止める！！止せ！！止まれ！！」

座敷琵琶は涙を流し必死の形相で訴えた。

「嫌だ。」

貴方は私の邪魔をした。

それで守美子を救えなかったら

どうするの？」

そう問いかけながら少女は

異形の腕を上げた。

そしてそのまま、

ズシャ！！

振り下ろされなかった。

座敷琵琶の顔に人魚の鉤爪が突き刺さる代わりに、

華鳥の頭に巨大な鉄槌がめり込んだ。

いきなり飛び込んで来たその勢いで、

華鳥は横殴りにふっ飛ばされた。

「助けてやったぞ。」

瞬時ちゃんよお。」

華鳥を殴り飛ばした銀髪ツインテールの少女、

椿舞姫が言った。

「…助けてなんて言ってないけど。」

座敷琵琶はそう言って、

目の前の少女から目を反らした。

「よく言うぜ。」

半べそかいてた癖によお。」

椿はニヤニヤと笑みをうかべながら言った。

「ふん。」

座敷琶は憤り混じりの声をあげる。

先ほどまでの恐怖はもうどこかに行っていた。だから決定的な問題点に気づくことが出来た。「ていうかあ、

舞姫は一体どうして此処が分かったのお？」

その質問をされ椿は

「うっ！？」

という声を上げた。

「僕、第九学区で侵入者発見って言ってるから、一度も連絡してないよね？」

座敷琶はそう言って目を細め、

椿の顔をじっと見つめた。

「えっと、そりゃあれだ。」

滝壺AIMストーカーさんの能力追跡だ。

あれ使えば、」

「僕だって能力者のはしくれたよお？あれが超能力とは思えないけどなあ？」

必死に誤魔化そうとする椿を座敷琶はさらに凝視した。

すると、椿は急に回れ右をして、

華鳥がぶち破った壁の前に立ち、

「絹旗ちゃん！

ここまで飛ばしてくれて

サンキューな！」

と道路の端に止めたワゴン車の表に、

腕を組んでワゴン車によりかかっている  
麦野の隣に立つ絹旗に向かって叫んだ。

「？はあ、どういたしまして。」

絹旗は首を傾げながらも、  
取り合えず答えた。

「……」

そんな椿を座敷琶はあきれ顔で見つめた。  
誤魔化し方が輪をかいて下手くそだったからだ。  
といっても、

まさか4日程前に座敷琶の携帯に、  
GPSを勝手に仕込んで、  
ストーキングに及んでたとは椿は  
口が避けても言えないのだが。

と、

そんな椿と座敷琶の耳に、

「何勝手に和んでる？」

と言う声が飛び込んだ。

座敷琶はその声に反応し、  
すぐさま椿の隣に轉移し、

椿に触れ、道路の真ん中に轉移した。  
誤差にして0.2秒。

椿が華鳥に食らわせた鉄槌が、

近くの街路樹に突き刺さっていた。

「おい。あれやったの、

侵入者の女の子か？」

椿が冷や汗をかきながら尋ねた。

「間違いなくね。」

座敷琶が答えた。

「嘘だろ！？だって…」

『あいつは確かに殺った筈だ。』 そう言おうとした瞬間に椿は座敷琶を突き飛ばし、自分はバックスステップをとった。その瞬間猛スピードで何かがその間を突っ切った。そして、それが道路に降り立った。巨大な猛禽類の翼を広げ、半魚の腕を持った人外の少女が。

「貴方たち。」

よくもやってくれた。

絶対許さない。」

華鳥はそう言って二人の敵を睨みつけた。

「『よくもやってくれた』だと!？」

その声に反応して椿は少女を睨み返し、ぎりぎりと歯ぎしりし、

両腕を大きく広げ

「そりゃこっちのセリフだ、ボケエエエエ!!!」と叫んだ。

その瞬間、道路や街路樹から塵が巻き起こり、

少女の両手に集まり、

二本の剣を象った。

右手に青龍刀、左手にカトラスを握り、

椿は

「てめえのせいでウチの自慢の銀髪が

台無しじゃねえかヤ マン野郎おおオオ!!!」

と瞳に怒りの炎を滾らせながら叫んだ。

無惨にもツインテールを片方斬られたとはいえ、

この少女はなんてことを言うのだろうか？

「…こわい。」

隣で座敷琶は呟いた。

だが、怒りを向けられた当の本人は、

「貴女、ひよつとして垣根帝督？」  
と椿のしたことを見て疑問を述べた。

垣根帝督とは学園都市の第二位であり、

『未現物質』<sup>データクマター</sup>という

この世に無い物質を生成する能力を持った人物である。

「どこの世界なら、

垣根帝督がこんなにキュートな女の子なんだろうな!?

粗チ のしゃぶり過ぎで頭が変になったか!?

このビツチやるオ!!!」

華鳥の質問に椿は暴言で返した。

「じゃあ、貴女的能力は」

「んなモン、

てめえの卑猥な体に刻みやがれえええエエ!!!」

質問をしようとした華鳥に

椿は人とは思えない猛スピードで迫り、

青龍刀で斬りかかった。

華鳥はそれを上回る速度で

飛びそれを難なくかわした。

「オラオラオラオラ!!!」

だが、

椿は止まらない。

飛びながら避ける華鳥を追走し二本の剣を振り回す。

「この!!!」

華鳥は足を鳥の足のような姿に変化させ、

椿の頭に蹴りを入れた。

が、

それは椿が仰け反るような形で回避し、

爪が顔にかすめ、

三本の浅い切り傷を作るだけで終わる。

「もつと楽しませろよ!!!」

売女野郎が！！」

そう華鳥に叫ぶ椿は化け物であった。

少なくとも二人の姿を見ていた座敷琶には  
そう見えた。

「これが舞姫の本領か……」

座敷琶は呟いた。

椿舞姫の能力は、

『アトミックタクト  
元素掌握』。

原子を構成する三要素、

電子、陽子、中性子の三つに分解し、

それを別の原子に再構成し、

使用者の望む形状に留める能力である。

今回の場合、

道路のアスファルトを構成する原子を、

鉄の青龍刀と、鉛のカトラスに作り変えたのである。

一見レベル5に匹敵してもおかしくない力だが、

無生物しか分解出来なかつたり、

構成出来ない原子があつたり、

常温で気体の状態で存在する原子を

常温で個体の状態で存在する原子に変更するのに、

膨大な演算が必要だつたりするため、

レベル4に留まっているのだ。

しかし、

彼女の恐ろしさは<sup>だいのつらよく</sup>大能力に留まらない。

真に恐ろしいのは身体能力である。

過去学園都市の行った危険な実験の中に、

『ブラッドイスター  
血の復活祭計画』というものが

存在した。

人間の筋肉を改造し、

人間の運動能力の限界を超えた生物兵器を作る実験である。

『普通の人間の運動能力を上げても

単身では役に立たない。

単身でも一個小隊を壊滅出来るレベルの兵器が欲しい。』

その下らない理由の為、

レベル3、レベル4の能力者が犠牲になったのだ。

この実験は自転車に旅客機のエンジンを積み込むようなもので

案の定被験者となった37名の能力者のうち

生き残ったのはたった二名であった。

他の被験者は自らの筋力に耐えられず、

又は被験者同士の殺し合いで死亡したらしい。

その後実験は凍結され、

使用されていた施設は差し押さえられ、

当時その実験に携わった研究者は捕まったわけだが

その生き残りの一人が椿舞姫なのだ。

座敷琶瞬時は今、

その恐ろしさを思い知ったのだが、

「…にしても、

あの人外の女の子は何なんだろう？」

という疑問が沸いた。

翼を生やした侵入者の女は、

生物兵器の動き以上の速さで立ち回っていた。

「『多重妖混じり』か…」

座敷琶は呟く。

妖。

もしそんなものが存在するならば、

「むぎのセンパイたち  
超能力者と、

どっちがおそろしいんだろっな？」

座敷琶は無邪気に呟いた。

「ふう。」

学園都市の14学区にある、  
高層マンションの最上階。

ここには学園統括理事の一人が住んでいた。

長い白髪混じりの黒髪を後ろにまとめた、

ブランドものの銀縁メガネをかけ、細身のスーツをきた

神経質という印象をうける40代後半の男性だった。

彼の名は永澤久継。

アレイスターを出し抜き暗部組織を作り、

土御門元春を座敷琶瞬時に命令し殺害させた男。

そんな男はあることで困っていた。

「君は誰なのかな？」

彼はそう言っただけ息をつき、

腰掛けていた社長室に置いてあるような椅子に

疲れたようにぐったりと沈み込む。

そんな彼の様子に目の前にいる、

赤い切れ長の瞳に、黒い短めの髪

青年に見える男性は、

口を裂いて笑い、

「どうも。」

わたくし、火黒と申します。

以後お見知りおきを。」

と巫山戯た調子で、

中世の騎士のような立ち振舞いをした。

「で、

君は一体何の用だ？」

永澤は呆れたように尋ねた。  
すると火黒は、

「いえ、一つ質問がございました。」  
と言って微笑んだ。

そして、

「土御門の坊やを殺すように仕向けたのは  
お前か？永澤久継？」

とギラギラと目を光らせ、

永澤の首に刀と自らの殺意を  
突きつけながら尋ねた。

刀の刃が掌を突き抜けながら現れたところを  
見る限りどうやら彼は人ではないらしい。

そんな当たりをつけると永澤は目を閉じ、

「そつだよ。」  
と一言だけ答えた。

「どうやら坊やの推測は正しかったらしいね。」

そう言つて意味あり気になんまりと笑つた。  
そして、

「だが、甘かつたねえ。」

俺の主人様はご生憎生きていらつしやる。」  
と思い切り皮肉つた。

「それは、座敷琵琶瞬時がしくじつたということか？」

永澤が尋ねると火黒は、  
「違う違う。」

坊やが生きてんのは、  
刃を統べる『鬼神』たる俺のおかげさ。

彼の殺害方法が銃殺とかなら、  
絶対助からなかつたけどね。」

とおちゃらけた笑みをこぼす。

「それで、用件は？」

永澤は吐き捨てるように尋ねた。  
すると、

「坊やからの命令を受けててね。

お前を殺しに来たんだよ。」

今までの妙な笑顔がピタリと止まり、  
彼はドスのきいた低い声で言った。

こうして、

学園都市統括理事の一人は……

死霊支配（テッドマスター） 多重妖混じり（後書き）

アスタ「なあ…青髪くん…」

青髪「うわあっ！…えらくどんよりしてる…」

火黒「どうしたんだい？」

アスタ「…お気に入り登録件数が…」

青髪「少ないなあ…」

火黒「そういえば。」

アスタ「…誰でも良いから、なんでも良いから指摘してくれん？」

青髪「えっと、作者が可哀想やから、感想お待ちしてますっ！」

火黒「オリキャラに対する質問や、世界観に対する質問、さらには作者への質問なんてのも応募してるぜ。」

青髪「ホンマによろしゅう頼むで〜」

死霊支配(デッドマスター) ? 青白い翼(前書き)

次くらいで、

この話は終わります

死霊支配（デッドマスター）？ 青白い翼

青髪は驚愕した。

自分の視界に、

足を引きづりながら、苦しそうに腹をおさえ、  
それでもどこかに向かおうとする、

金髪の少年の姿が映ったからだ。

「…土御門？」

青髪はその名を呟く。

きつと、今が平常時だったなら、

彼が腹をおさえているのを見たとしても、

『変なものでも食べて腹痛になった』

程度にしか思わなかっただろう。

だが、

今学園都市には、

水沢華鳥しみずはなづしやがいる。

とても平常時とは言えない。

多角スパイの彼が危険な任務を

与えられていて、

それでこうなつたとしても不思議ではない。

そう思つた青髪は、

「大丈夫か？土御門はん？」

土御門元春を止めて声をかけた。

「ああ。大丈夫だぜい。青ピ。」

土御門元春はニヤリと笑う。

いつも通りの土御門元春だった。

だが、青髪には分かった。

これは、普段の土御門ではなく多角スパイとしての土御門だと。だから青髪は怒鳴る。

「巫山戯んな！全然大丈夫とちゃうないか！  
また危険なことさせられてるんやないのか！？」

青髪は知っていた。

大霸制祭の時、土御門がみんなが楽しんでる間に何をしていたのかを。

暗部でどんなことをしていたのかを。

ずっと、当麻や、青髪や、クラスメイトや、

義妹の土御門舞夏を守る為に戦い続けたことを。

だから、こういう時には大抵危険なことをしていると青髪は分かるのだ。

「危険なこと？何をいつてるのかにや〜？」

土御門はとぼけた調子でそう言った。

「土御門！！君はまた自分だけ傷つこうとするんか？

上やんには真実を教えて、

僕には何も教えてくれないんか！？」

青髪は土御門のアロハシャツの襟元を掴み、

怒りを顕にする。

不幸なあまりに、誰かの不幸に巻き込まれる

当麻ばかりが事件に巻き込まれる。

力がない当麻ばかりが戦わなければならない。

なのに自分はある癖に、

その力が死霊バットエンドしか操れない為に、

戦えない。

いや、

そう言いつつただ自分は逃げていただけなのかもしれない。  
だったらなおのことだ。

「もう俺はつまんねえことで逃げたくねえ！  
わりいが、てめえの記憶覗かせて貰うぞ！！」  
青髪はそう言って、演算を開始した。  
記憶を覗くことに罪悪感は無かった。  
事件が起こる度に、土御門の記憶を覗いていたのだから。

「…貴様、何者だ？」

土御門元春は苦しそうに、  
童顔の少年を見上げながら尋ねた。

「僕は『座敷琶瞬時』です。」

『ブラックアイテム』の構成員やっています。」  
その少年、座敷琶は答えた。

「では、貴様が…」

「はい。この度いゝ、  
侵入者駆除を任されたあゝ、  
暗部組織でえーす。」

真剣な土御門に対して、

おどけた態度で接する少年。

「てなわけで、

センパイをぶつ殺す任務は

終わったんで本ちゃんに移りたいと

思いまーす。」

最後まで巫山戯た調子のまま少年は去っていく。

「…ま、待て。」

そう霞んでしまうような声で言うと、

土御門の視界は暗転した。

暫くして土御門の視界は、

再び明るくなった。

目の前に包帯に顔が覆われた派手な着物の男が、

「…刃……べる……のお……が……て  
…かったな。」

ノイズ

血がべつとりついたナイフを  
手で遊ばせている。

「…すま……助かつ……黒。」

土御門も何か言うがノイズのようなものに  
遮られてしまい何も聞こえない。

「……………がやつ……のか？」

包帯の男が何かを尋ねた。

すると、土御門が頷いた。

「……………るのか？」

包帯の男が尋ねた。

「ああ。」

土御門がはつきりそう言うのが聞こえ、  
映像はそこで途切れた。

だが、なんとなく分かった。

土御門は侵入者の、水沢華鳥の為に動いていたのだ。  
そして傷付いて、死にかけて…

「…んの、大馬鹿野郎があ……!!」

思わず青髪は土御門を殴り飛ばした。

「何てことするんだ!? 青ピ……!!」

土御門は頬を抑えて青髪に怒鳴った。

道行く人達は驚いてこちらを振り返るが、  
そんなものは気にしない。

土御門には一度言わなければいけないかった。

「一人で無茶してんじゃねえよ……!!」

何勝手に傷付いてんだよ……!!

てめえといい、上やんといい、

なんでこうも自分を省みねえ!!!

そういうのホントム力つくんだよ!!!

無駄な心配ばつかさせんじゃねえ!!!

土御門はきよとんとした。

土御門にしてみればいきなり青髪にいきなりなぐられ、

怒鳴られたりしたのだから。

「…てめえのことなんざ、

とうの昔に気付いてんだよ。

今まで何をやっていたのかも、

現在進行形で何やってんのかもな。」

青髪はそんな土御門にそう言った。

土御門は、

「青髪……」

と彼の名前を呟き驚く。

自分のことを知られていた、それもあるが、

こんなに真剣な青髪を見たことがなかったからだ。

「てめえ、華鳥を助けるんだろ？」

だったら、全部話してくれないか？」

青髪は土御門に尋ねる。

すると、

「…分かった。お前には話しておいても良いだろう。」

と、土御門はため息混じりに言った。

「土御門はん……」

「ただ、ここでは目立ち過ぎる。

場所を移すぞ。」

土御門にそう言われ、

青髪は辺りを見渡し、

道行く人達がこちらを注目していることに顔を赤くした。

公共の場ということも忘れ、恥ずかしいことを

叫び続けていたのだ。

第七学区の人気のない路地裏。

そこにつくと、

土御門は青髪に色々なことを話した。

自分が多重スパイであること、

今まで自分がしてきたこと、

そして現在水沢華鳥が、

暗部組織『ブラックアイテム』に狙われていること。

大半は青髪が『記憶探求』を使って、

知っていたことであつた。

それでも、

「やつぱは嬉しいわあ、土御門はん。

ホンマ話してくれてサンキューな。」

青髪は土御門から見て、

とても優しい表情でそう言うことができた。

「本当は、青髪には話さないつもりだったんだ。

お前とは普通に普通の悪友でいたかったからにや〜。」

土御門は申しわけなさそうに言った。

「でも、

これでホンマの友達になれた気がするわ。」

青髪はそう言い本当に嬉しそうな表情で

「上ちゃんにも、

無理をさせなくてええしな。」

と微笑んだ。

「……」

土御門は思わず沈黙する。

上条当麻といい、青髪といい、

土御門にとって非常に裏切り辛い人格をしていると苦笑する。

彼らと接していると自らの魔法名、

『背中を刺す刃』を名乗りづらくなつたしまう。

「…お前、ホントに水沢華鳥を助けるのか？」

土御門は尋ねる。

「助ける。君のお陰で踏ん切りついたし。」

青髪の調子はいつもの巫山戯たものでなかった。

なんだかこのまま消えてしまいきそうな、

優しく煌びやかなそんな心持ちに見えた。

「だが、

敵の中には大能力者<sup>レベル4</sup>がいる。

いや、もしかしたら超能力者<sup>レベル5</sup>も

いるかもしれない。

そんなところに素人のお前が行ったら」

「素人なんかじゃない。」

止めようとする土御門にそう断言する青髪。

「僕を誰だと思つとるん？」

学園都市唯一の多重能力者<sup>デュアルスキル</sup>やで？

そんな僕が素人なわけないやん。」

青髪はそう言つて、

「んじゃ。またな土御門。」

土御門に背中を向け手を振り、

<sup>バリアブルマッスル</sup>筋肉増強を使い、

一気にその場から消え去つた。

行き先は第九学区。

その目的は、

華鳥を殺させないこと―

「クソオ!!!」

とっと、堕ちてアヘリやがれ!!!」

椿が青龍刀を横に薙ぐと華鳥は上空に飛んで逃げる。すると、椿は歯をカツと噛み締め、

「逃げんな売女野郎オオ!!!」

と汚い言葉を発しながらカトラスを華鳥に向かって乱暴に投げつける。

それを華鳥は旋回して交わす。

「んのメス豚がアアアア!!!」

椿は喉が潰れるのではないかと思うほどに、怒りの叫び声を上げた。

そして、椿は青龍刀も華鳥に向かって投げつけ、ありとあらゆる形状の武器を作り出した。

ブーメラン、トマホーク、鎗、手斧、六尺坊、トンファー、クラディウス、フレイル、ハンマー、

古今東西ありとあらゆる武器を精製しては、空中にいる華鳥に投げつける。

しかし、それらは全ていとも簡単にかわされてしまっ

「なんで当たんねえんだよオオオ!!!」

椿は苛立ち混じりに叫ぶ。

そんな椿に華鳥は、

「武器の扱いが拙すぎる。」

と吐き捨てるように言う。

「貴女の動きは早くて、武器を作る能力も凄いけど、武器の扱いが下手過ぎる。」

素人の攻撃なんて絶対当たらない。」

椿は華鳥の言葉にギリギリと歯ぎしりする。

その言葉に自分が見下されたような気分になった。なまじっか、華鳥が上空にいるせいで、

余計にそんな気分になった。

「見下してんじゃねえよオ!!!」

肉 器の癖にいいいいいい!!!!!!」

椿は『元素掌握』を使い、

薙刀を作り出し華鳥に向かって真っ直ぐ投げる。

「きかない。」

華鳥はそう言つて薙刀を片手で叩き落とす。

すると、

「んじゃ、こいつはどうだアアア!?!」

華鳥の頭上から声がして驚いて上を見上げると、

「チエストおおおおオオオ!!!!!!」

と叫びながら牙狼棒という、

先に棘のついた3mを優に超える鉄の棒を振り下ろす

椿の姿があつた。

華鳥はそれを寸でのころでなんとか躲し、

「ふう。」

と胸を撫で下ろす。

ズシーンという、超重量兵器を携える少女が

落ちる音が鳴る。

地面に降りた椿は飢えた獣のような眼光を、

未だ空にいる華鳥に突き刺すように向ける。

その時、

「椿!!!」

と自分を呼ぶ声がした。

浜面、滝壺、絹旗、座敷琵琶、そして麦野が、

自分に加勢しようと近づいていた。

椿はそちらを睨みつけ、

手に持つ牙狼棒を地面打ち付け、

「来るんじゃねえ!!!」

と怒鳴つた。

それに対し、

「けど…」

と言おうとする絹旗の言葉を遮り、

「あの女はウチの獲物だ!!!」

ウチが仕留める!!!」

と怒鳴り散らす。

「けどお前、攻撃が一度も…」

『当たってない』と言おうとした浜面に対し椿は、

「落ち着けよお〜。浜面ちゃんよお〜。」

血気盛んだね〜。そんなにやりてえのかあ〜?

んだったら、隅っこで滝壺姐さんとやってるよ。

ウチがあいつやっただあとに、

好きなだけやらしてやつからよお〜。」

と最低の一言で返した。

その言葉に、浜面と滝壺は顔をかつと赤らめる。

その時、

「冷静になるのは貴女です。」

と冷淡に吐き捨てる麦野の声がした。

と、椿が思うと次の瞬間には

「え!?!」

という間抜けな声を上げていた。

浜面も、滝壺も、絹旗も、座敷琶も、敵である筈の華鳥も、

同様の声を上げていた。

その現実を理解するのに要した時間は2秒。

そして、それを受け入れた時には

「ぎゃあああああ!!!」

椿は悲鳴を上げていた。

右手の肩より先が消えていたのだ。

激痛が爆発し、椿は傷口を抑え地面をのたうち回った。

麦野が『原子崩し』で椿の右腕を吹き飛ばした。

「麦野おおお！！てめえええ！！！！」

「なんで、舞姫をおおお！！！！」

そう叫びながら浜面と座敷琶は麦野に飛びかかるうとした。すると、

「やめて！はまづら！」

「超やめて下さい！」

と浜面を滝壺が、

座敷琶を絹旗がそれぞれ止める。

麦野はそれを見て億劫そうに首をコキコキと鳴らす。

「てめえ！なんで椿に攻撃した！？」

浜面は滝壺に抑えられながらも、  
麦野に向かって叫ぶ。

すると麦野は、

「粛清のつもりですが何か？」

と感情の籠っていない声で答える。

「粛清だと！？」

浜面が嘘だとばかりに聞き返すと、

「ええ。粛清です。」

椿舞姫は『学園都市に糾す侵入者を倒す』という

我ら『ブラックアイテム』に課せられた使命を忘れ

私欲の為に戦おうとしました。

それを正すことの何が悪いのですか？」

と麦野はまるでマニユアルでも存在するかのような

機械のように感情の籠っていない声で言った。

「『粛清』だと！？」

浜面は麦野のその答えに驚愕する。

暗部抗争の時も麦野は、

当時のアイテムの構成員であったフレンドの

下半身を吹き飛ばした。  
けれどそれは麦野は頭に血が上り、  
怒りにまかせて行ったことなのだ。

だが、

今回の場合は違う。

現在の麦野は冷静さを欠かずに、  
いやむしろ冷静過ぎるくらいに冷静に  
人を殺すことが出来る。

それこそ、

工場の機械が行っているような、  
単純な反復作業の要領で。

「そもそも最初から私がやれば、  
30秒もかからなかった仕事を…  
本当に役に立たないですね。」

麦野はそう感情のない無機質な声で  
吐き捨てる。  
すると、

「貴女、酷いよ。」

それは仲間に対して言う台詞じゃない。  
と空から華鳥が蔑むように、

麦野を見下ろして言う。

すると麦野は、

「椿舞姫は仲間ではありません。」

私の忠実な道具ぶかです。」  
と断言した。

今とんでもないことを、

麦野は断言した。

「そう…。」

華鳥はそれに対して、  
小さく呟くとゆっくりと地面に降り立ち、  
変化を解いた。

「兎に角、

私が介入したので、

この戦いは7秒で終わります。

覚悟して下さい。」

麦野は無機質な声で、

マニュアル通りの脅し文句を言う。

それに華鳥は全く動じない。

寧ろ目には今まで以上に強い光が灯っていた。

そして、ドスのきいた声でこう言う。

「訂正して。」

と。

麦野は

「何を？」

と聞き返す。

すると、その瞬間少女は変貌を遂げた。

下半身は青い鱗の魚の尾となり、

腕は水掻きのついた尾と同じ色の鱗に覆われた、

異形のものとなり、

短めのゴールドブラウンの髪は腰の位置まで伸び、

同色の瞳は純度の高いアメジストを

はめ込んだような紫色となった。

「7秒っていつの、訂正して。」

華鳥はそう言って麦野を見つめた。

「なるほど。」

麦野は感情の籠もらない声でそう言った。

「火黒。そつちはどんな状況だ？」

土御門は

友人が先に向かった第九学区に走りながら、  
携帯で自分が所有する妖に話しかけた。

すると、

『ちよつと苦戦中かな。』

といつもの巫山戯た調子を保ちながら、  
息を切らす火黒の声がかえってきた。

すると、その後に硝子が割れる、

パリーンという音が土御門の携帯に響いた。

「交戦中か？」

『まあ、そんなところかな？』

「永澤か？」

『いや、彼自体は戦闘力のない

一般人なんだけど…』

と火黒が言いかけた時、

会話の途中に割って入るように、

金属と金属がぶつかるキーンという音が鳴り響いた。

そして、暫くたった後、

『…ヤツの下に一人ヤバイのがいてね。

そいつと交戦中だよ。』

と火黒は少し話し辛そうに言った。

「そいつは誰だ!？」

土御門が尋ねると、

『第二位。』

と一言だけ返ってきた。

「な!？」

土御門が驚きの声を上げると、

『てか、流石に片手でこいつを

相手にすんのはキツイから。  
んじゃ。」

という火黒の聲がして電話が切れた。

「おい！？火黒！？」

土御門は第九学区に向かう足を止め、

火黒の名を呼ぶが、

返ってくるのは、ツイッターという、

携帯の虚しい音だけだった。

「第二位：垣根帝督か？」

土御門は火黒の言った言葉から、

火黒が戦っているであろう相手の名を呟いた。

火黒の言葉が間違っていないければ、

確かにそうなのだ。

だが、

(…：どうということだ？

垣根帝督は、

一方通行によって倒された後、

脳を3分割されレベル5を

産み出す存在になり果てた筈だ。

そんなヤツがどうして…)

考えが間違っていないければ

その筈であった。

(…：永澤久継が何かしたのか？)

土御門はその考えに至る。

火黒の言葉通りならば、

垣根は今永澤の下についているということになる。

ならば、

垣根の復活にも永澤は大いに関わっている

可能性があるかもしれない。

「…調べる必要があるな。だが、」

土御門はそう呟くと再び第九学区に向かい、走り出した。

それを調べるのは、  
コトが全て終わった後でも良い。  
それよりも、今すべきことは  
戦地に向かう青髪しほぐちを止めること―  
出来なければ、  
彼と共に戦うことだ―

「行くよ。」  
美しくも恐ろしい人魚は、  
右腕を高々と振り上げた。  
すると、

そこに螺旋状の回転を描きながら  
高等学校のプールクラスの量の水が集まり、  
巨大な水球となる。

「…なるほど。」  
素晴らしい力ですね。」  
麦野が無味乾燥な台詞を言う。  
「ありがとう。」

けど完全変化した私の力は  
こんなものじゃない。」  
そう言って華鳥は悪戯っぽく笑う。  
すると、

華鳥の手に収まっていた水球が、  
ブクブクとまるで卵から孵る鳥が、  
殻を突き破ろうとするように暴れ、



「!?!?」

今まで何にも関心を示さなかった麦野も、目を見開いて驚く。

「どう?」

これがこの姿に変化した私の力。

水を操り、象った生物に命を吹き込む、

私の妖術。」

麦野の心中を察したのか、

華鳥はそう自慢気に言った。

「なるほど。」

確かにこれは凄いですね。」

額に冷たい汗を吹き出しながら、

麦野は言う。

そして、今まで変化のなかった表情を、

邪悪な笑みに変えた。

すると、麦野にも変化が現れた。

背中に一対の翼が音もなく、

突然現れたのだ。

蝙蝠のような、悪魔のような羽。

しかし、その色はまるで蛍光塗料を

べったりと塗りつけたように、

青白く怪しく輝いていた。

「お陰でこちらも、

本気で戦えそうです。」

麦野はそれを華鳥に見せつけて言う。

「貴女も凄いね。」

華鳥は表情を曇らせながらそう言う。

「お褒めいただき光栄です。」

麦野は言った。

空気が張り詰める。

お互いに、人知を超えた力を見せつけ、それによって互いに仕掛けることが難しくなったのだ。

勝負は一瞬。

先に仕掛けたのは、

「tv:jmなsgz@ああ!!!」  
華鳥であった。

腕を麦野に向かって振り下ろし、それに連動して水龍が麦野に向かい牙を向け咆哮を上げる。

その顎が麦野に襲いかかろうとした時、

「るああああ!!!」

麦野が水龍にも負けない程、甲高い叫び声を上げながら、

翼で自分の前方を龍の攻撃に対応する形で覆い盾のようにした。

「無駄!!!」

華鳥はその様子にそう言う。

その言葉通り龍は盾の上からでも、麦野を噛み砕こうとする。

だがおかしかった。

牙が翼を突き抜けないのだ。

いや、それどころか、

「…崩壊してる?」

龍が翼に触れた部分が、

どんどん消えていつているような気がした。

その様子を見て華鳥は、

（そんな筈ない!!!）

取り乱すな水沢華鳥！！）

と自己暗示をし、

歯を強く食いしぼり、

水龍の五体全体を麦野にぶつけようとする。  
だが、

華鳥が思ったことは事実だった。

水龍は何も無かったかのように  
消えさつたのだ。

「…なんで？」

華鳥はその事実には驚愕する。

すると麦野は、

「私の翼は触れた物質を、

原子以下の単位で崩壊させます。

この世の物質ならば、

触れているだけで何であろうと

消すことができるんですよ。

たとえ空気であろうとね。」

と華鳥を絶望させる一言を言った。

華鳥は表情を曇らせた。

「無論貴女の龍であろうともです。

そして、この翼は…」

そう言いつつ麦野は、

絶望を顔に浮かべる華鳥に向かい、

右手をすつと前に出し、

太陽の光のような光線を繰り出した。

それは真っ直ぐ華鳥に向かい直進し、

華鳥の胸から下を吹き飛ばした。

一瞬華鳥は何が起こったのか、

全く理解が及ばなかった。

だが、いきなり力なく地面に倒れふせ、

足を動かそうにも全く動かない状況に

華鳥はやつと自分が何をされたか理解する。

「私の『原子崩し』を、

強化してくれます。」

麦野は地面に倒れた、

上半身だけの体を右手で起こし、

自分を睨みつける華鳥にそう言う。

「…どうやら、私の勝ちのようですね。」

麦野がそう無感情に言う。

華鳥は、

「…何を言ってるの？」

また再生すればもう一度やれるよ?」

と言って、体に力をいれる。

だが、体には何も変化が起こらなかった。

「…そんな、どうして？」

まさか、さっきの完全変化で限界が…」

華鳥がそう言おうとした時、

「ぐあああああああ!!」

華鳥は悲鳴を上げて地面をのたうち回った。

脳をかき混ぜても痛みすら感じなかった体が、

突然痛み始めた。

妖混じりは、

異常な回復力を誇るが、

それを連続で使えば逆に体が壊れる。

妖としての力を使うのはあくまでも

人間の肉体だからである。

体全体を妖化する完全変化も同様だ。

華鳥の体は知らず知らずのうちに、  
限界となっていたのだ。

痛みが少し落ち着いたとき、

「ちく……しろう……」

華鳥は涙を浮かべながらそう粒やいた。

そんな華鳥に麦野はゆっくりと歩み寄り、

彼女の頭を踏みつけた。

それは、自分の忌むべきものに対する

侮蔑を含んでいた。

そして麦野は華鳥に、

「何か遺言がありますか？

汚らわしい侵入者。」

と吐き捨てるように尋ねた。

「……るか。」

「何ですか？

よく聞こえないのですか？」

何かを呟く華鳥に麦野は尋ねた。

すると華鳥ははっきりと言う。

「…死ねるか。」

守美子に会うまで、

絶対に死ねるか。」

その目に涙を浮かべながら。

悔やんでも悔やみきれない程の

悔しさを含んだ表情で。

麦野は

「…そうですね。」

とただ一言言い、

「では、死んで下さい。」

と言って華鳥に向かって右手をかざした。

会いたかった。  
守美子に。何があっても。  
絶対に助けたかった。

(…悔しいな。)  
そう思いながら華鳥は目を閉じる。

だが、

『原子崩し』は彼女を決して殺さなかった。

戦闘機が通り過ぎたような  
巨大な風切り音を響かせる  
何かが通り過ぎ、  
何かにぶつかったような轟音を響かせた。

華鳥はその音に驚き目を開くと  
「ゴバツ!!!」

麦野は血を吐き出していた。  
しかも、尋常じゃない量だった。  
口を両手で押さえていたにも関わらず、  
指の隙間から真っ赤な液体が漏れ出していた。  
華鳥は思った。

麦野は内臓をいくつか潰されたのだと。

「……貴方は…何者…ですか？」

麦野は不明瞭な声で尋ねた。  
華鳥は全く気が付かなかったが、  
誰かが隣に立っていた。

しかも、それは自分が知っている  
人物であった。

その人物は面倒くさそうに答えた。

「…デッドマスター死霊支配。」

それは空のように青い髪と、

清潔さの欠如した澱み、くすんだ金色の瞳をした、  
身長が190センチに近い背の高い少年だった。

その少年、

死霊支配は言う。

「…ハットエント死霊を、届けにきたぜ。」

ブラックアイテムに対して、

空気が痛くなるほどの、

巨大な殺意を向けて笑いながら。

死霊支配(デッドマスター)？ 青白い翼(後書き)

青髪「夏目友人帳第三期おめでと〜!!」

浜面・滝壺「今さら!?!」

青髪「いや〜。二期から見てるんやけどまじおもしろいなアレ。調子に乗って漫画全巻買ったで。」

浜面「つーか、このコーナーこんなこと話していいのかよ!?!」

滝壺「…わたしはぬらりひよんの孫の方が好きだな。」

浜面「頼むから滝壺も悪ノリしないで!!てか、妖怪漫画とのクロスオーバーの作品で別の妖怪漫画の話ししないで!!」

滝壺「ぶつちやけ、この2作品の方が人気あるよ。」

浜面「だから、そういうこと言わないで!!」

青髪「こんなんやけど、感想待ってるで〜。」

死霊支配(デッドマスター) V モブキャラ(前書き)

すみません。

嘘つきました。

死霊支配はちょっとだけ続きます。

死霊支配（デッドマスター）Ⅴ モブキャラ

「青峰くん…？なんで？」

華鳥は信じられなかった。

今日会って、少し話したただけの青髪の少年が自分の前に現れたからだ。

青髪はそんな華鳥に、

「惚れたのかもなあ。お前に。」

と言つて微笑んだ。

その言葉に華鳥は顔を真っ赤にして

「巫山戯ないで！！！」

と怒鳴つた。

「私みたいな化け物が行き着く場所は地獄でしかないんだよ！？不幸にしかねないんだよ！？分かってるの！？」

華鳥は泣きながら、訴えるように、諭すように叫んだ。

この自分を化け物と呼ぶ少女は、きつと青髪を巻き込みたくなかったのだ。

青髪が豚の化け物から華鳥を助けたからかもしれない。

青髪が自分と同じ痛みを抱えていたからかもしれない。

きつとそんな理由でこの少女は自分を巻き込みたくなかったのだと青髪は思った。

だが、だからこそ青髪は言いたかった。

「地獄なんかじゃねえよ。まして、不幸でもねえよ。」

青髪のその言葉に少女は、

「なんで、そんなこと言えるの！？」  
と尋ねる。

「今、化け物おれが幸せで、その幸せが地獄に繋がるなんて考えられねえからだ！！俺は、上やんと同じように誰かを助けることが出来て幸せだ！土御門しんごうが真実を教えてくれて幸せだ！そして、」

根拠なんて無かった。けれど確かにそう言えた。この胸に湧き上がる感情がそれ以外で表せられないのだ。きつと上条当麻は不幸の中で、誰かの為に拳を振るう時にはきつとこんな気持ちになるのだから。だからこそ、きつと自分の顔は綻んでいるのだから。

「俺は水沢華鳥を救うことが出来てホントに幸せだ。この幸せがいつか地獄になるなんて思えない。」

水沢華鳥は一筋の涙を流していた。綺麗な透き通った暖かい水滴が学園都市の黒く硬い路上に落ちた。

「お前もきつと最後は幸福だ。絶対に華鳥は守美子さん絶対に会える。幸せになれる。そうじゃないっていう運命を神様があたえるっていうなら、」

青髪は華鳥に右手を差し伸べ、

「そんな神様は俺が死霊を届けてやる。」

と言った。華鳥は最早、上半身だけになった体を左手で懸命に支えながら、右手を青髪の右手に伸ばそうとした。

だが、その時―

橙色に輝く閃光が青髪に襲いかかった。

音もなく襲いかかるそれは、その閃光に背を向けて確認が出来ない青髪を貫いた。

…と思いきや、

「危ねえなあ。いきなり後ろからなんてよお。」

青髪は無傷だった。

閃光は青髪に当たる手前で角度を大きく変え、近くのビルを倒壊させた。

「なあ！？ 麦野ちゃんよおおおおお！？」

青髪は麦野の方に向き直り腹を抑えながら肩で息をする彼女を睨み、咆えた。

「…おかしい。何故、原子崩しの狙いが外れた？」

麦野は疑問を述べた。

すると、青髪はクハハハと笑い、

「方位誤報ルートミッシングつてな。物体の運動の方向のみを操る大能力だ。レベル4のちから

無意識下での能力展開が出来ねえわ、矢印のサイズは変えれねえわの一方通行の完全下位交換だが、便利な力なんだぜ？」

と説明をした。

すると、麦野は

「なるほど、それが貴方の力ですか…」

と納得したように目を閉じ、

「大したことはありませんね。少なくともあの方に力を授けられたこの原子崩しわたしには。」

と目を開き無機質な、けれど嘲ているかのような口調で言った。

「てめえがそう思いたきゃ、そう思えば良さ。」

青髪は面倒くさそうにそう言い、

「だがよお、麦野沈利い。てめえいつからエンジェルに目覚めたんだあ？俺の知っている麦野ちゃんは、んな巫山戯た羽はついてねえぞ。」

と無気味な笑みを浮かべて尋ねた。

すると、麦野は

「貴方には関係のないことですよ。」

と吐き捨てるように言った。

「そうかよ。」

青髪はそう言つて、『ケツ』と声を鳴らす。

「そんじゃあ、肝臓と脾臓をペシヤンコにしてやったのに、しっかり生きてるつてのはどおいう見だあ？麦野ちゃんよお。」

青髪の次なる質問に麦野は再び、

「貴方には関係のないことですよ。」

と冷淡に吐き捨てた。

だが、今度は先程とは少し違っていた。

麦野が、胸より下が消え失せ身動きがとれない華鳥に原子崩しを放つたのだ。

「チツ。」

青髪は舌打ちをして地面をダン！と踏み鳴らした。すると、華鳥に襲い掛かっていた閃光は進行方向をずらし、近くの道路標識を破壊した。

「大丈夫か？」

青髪が尋ねると華鳥は

「うん…大丈夫。」

と答えた。

「また外しましたか：やはり少々厄介な力そうですね。」

麦野のその淡々とした言葉に青髪は、

「麦野オオオ！！」

と彼女の名を叫び、澀んだ金色の瞳に怒りを燃やし、麦野を睨みつけた。

「なんですか？その顔は？こちらは学園都市に侵入した外敵を倒し、学園都市の礎になることを誇りとした、仕事をしているのです。貴方のような下らないヒーローごっこで私達の仕事を邪魔しないで下さい。」

麦野は淡々とした口調でそう言った。

「ああ！？」

青髪は額に青筋を立てた。その時、

「…まあ、そうそうキレんなよ。青髪の兄ちゃんよお。」

と腕が千切れ、血が流れた右肩を左手で押さえながら、黒いゴスロリ服を着た右側の髪が切れた、銀髪ツインテールの少女が汚い口調でそう言った。

「…椿舞姫。」

麦野はその少女の名を呟いた。

「何も言わないでくれ。沈利姐さん。ウチはちゃんと自覚したから。」

椿は何かを言いかけると麦野を遮ってそう言った。

「お偉いさんに許されてる楽しい殺戮は、あくまでも仕事の上だけ。」

私情を持ち込んでの殺戮は御法度……だろ？」

椿の言葉に麦野は、

「やっと、学園都市の市民としての自覚が出てきたようですね。」  
と言った。

「ってことでよお、この青髪の兄ちゃんウチに任せてくんねえ？」  
椿がそう言つと麦野は

「構いません。しかし、今度逸脱したら…分かっていますか？」

と椿に釘を刺した。すると椿はニヤリと笑い

「分あてるよ。カッカッして戦っても楽しかねえし、何より左手ぶつとばされたら、武器もてねえし、オニーも出来ねえ。」

と言った。麦野は、

「…そうですか。」

とだけ言った。そして、

「座敷琶瞬時、私と椿舞姫のバックアップをお願いします。」

と少し後ろで固まっていたブラックアイテムのメンバーの方に声をかけた。

「えっ！？でも…」

座敷琶は躊躇った。

麦野は、先程椿の腕を吹き飛ばした。

彼女とは同級生であり友人でもう3年の付き合いになる。

そんな椿を麦野は何の躊躇もなく攻撃した。

普通は従える筈がない。だが、

「バックアップ頼むぜえ〜。瞬時ちゃんよお〜。」

という椿の言葉に座敷琶は、

「舞姫と組むのは不本意ですけどお〜、仕事だし仕方ないんで協力しまあ〜す。」

と舞姫の隣に空間移動しながら言った。

一番戦いに私情を持ち込んでいるのは彼かもしれない。

『っていうかあ〜、卑猥な単語を発すんなよなあ〜。』という座敷琶の椿に対する駄目だしを聞きながら麦野は、

「では、浜面仕上と絹旗最愛は、滝壺理后を死力を尽くして護つて下さい。」

と残ったメンバーに命令を下す。

「んなことためえに言われなくなつて」

『滝壺は俺が護る』と言おうとした浜面の口を無理矢理塞ぎ絹旗は、「超了解です。」

と慌しい口調で言った。

私情を挟むような言葉を言えば、麦野が浜面を攻撃するかもしれない。

そう思つての行動だろう。

「ということなので、そこをどいてくれませんか？学園都市の為とはいえ、一般市民を犠牲にはしたくないので。」

麦野は青髪に尋ねた。

青髪はめんどくさそうに頭を掻きむしつた。

そして、

「誰がどくかよ。知的障害者どもが!!」

青髪は麦野に対してそう言い放つた。

(つつてもどおすつかなあ…コイツ等を八つ裂きにしまふことな  
んぞ、刹那から瞬息の間で出来ちまうが、それやったらコイツ等は  
確定で死体決定、最悪華鳥も巻き込んでしまふんだよな。)

麦野に対して、強気にそう言い放つてみたは良いものの結局青髪は  
どこぞの第一位のような人間を殺害出来る強い人格が無かつた。

けれどかといつて上条当麻のような、誰も傷つかずに誰かを助けら  
れる程の強さも無かつた。

しかし、スキルアウトの青年のように誰かの目の前に立つて、その  
人に背負い護りながら敵を倒すそんな強さも無かつた。

(…あれだけ華鳥にかっこつけといて、俺って何なんだよ!?巫山  
戲やがって!!)

青髪は眉間に皺をよせて歯ぎしりした。

決意さえあれば自分は上条当麻に、ヒーローになれるのだと思っていた。

上条当麻には能力なんてものはなく、自分には能力があるのだから、より自分の方がヒーローの資質があるとさえ思えた。

だが、違った。

ヒーローの資質なんていうものは能力のある無しのちゃちなものはなかった。

強い心があるかどうかなのだ。

(何も出来ねえじゃねえか！なんで俺はこんななんだよ…！！)  
青髪は焦燥にも似た感情を抱えた。

自分がどうにかしなければならぬ。

目の前の敵を殺さずに倒し、ただ大切な人を助けたい、もう一度会いたいと思っっている少女を救う。

そんな最高の幸福を――  
ハッピーエンド

だが、そんな青髪の考えを大きく変えるようなモノが視界に飛びこんだ。

「…つち…みかど？」

南東約1800m先、高いビルに遮られ普通の人間では決して捉えられない位置、そこに腹を押さえながら、血の気が失せた顔に、冬場だというのに汗をぐっしょりとかき、此方に向かって必死に走る、一見ガラの悪い不良にも見える親友の姿があった。

それを確認すると、青髪は

「あいつ…また無茶しやがって。」

と言って笑った。

親友が、土御門の自分を省みない行動に心配な筈なのに笑った。

その行動があまりにも土御門らしいから。

そして、

「…だが、頼りになるヤツが現れてくれた。」

そういう理由だった。

「何が言いたいんですか？」

麦野は青髪の言葉が訳わからなそうに尋ねる。すると青髪は叫んだ。

「こつこついうことだよ！」

その瞬間、

「えっ!？」

という間の抜けた声が出た。

それは、ブラックアイテムの構成員の目の前の青い髪の少年の一見酔狂な行動に対する驚き。

そして、水沢華鳥の自分の置かれた状況に対する驚きだった。

彼はレベル4の大旋風を使ったのだ。

水沢華鳥を飛ばす為に――

吹き飛んでいく華鳥を、

「レベル4の風力操作エアロシユクターでも結構飛ぶなあ。」

と適当に感心しながら青髪は見送った。

「貴方、何を考えているのですか？」

麦野が尋ねると青髪は、

「かっこつけんのはやめた。」

と一言一言はつきりとそう言った。

「は？一体何を言ってる……」

「ヒーロー気取んのは、もうやめた。こっからはモブキャラっぽくモブキャラらしく戦おう。」

青髪は麦野の言葉をさえぎって、そう宣言した。

「駄目だ姐さん。話しになんねえ。」

椿は呆れ口調でそう言った。

「……そのようですね。」

麦野も感情のこもっていない声で言った。

そして、

「座敷琵琶瞬時、侵入者の落下地点は予測出来ますか？」と尋ねた。

「南東に1800mつてとこですかねえ〜？」

座敷琵琶が答えた。

「どうやら、彼は移動距離が同系等の能力者の中でもトップクラスに長いという性質上、敵の場所を知る性質に長けているらしい。」

「追ってください。」

「了解です。」

麦野の命令に一つ返事で答え、座敷琵琶はその場から一瞬でいなくなった。

「災難だったな、青髪の兄ちゃんよお。」

椿はその様子を見てニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべた。

「何のこといつてんだ？」

青髪は目を見開いてきよとんとした。

「ああ！？そりゃ、折角恋人を逃がしてヒーロー気取れるつてのに、こつちに瞬時ちゃんがいたことだろおが。」

椿のその答えに、

「華鳥テレポーターがあの空間移動能力者にやられるとでも思つてんのかあ！？」と尋ねる。

「当たり前だろおが！！瞬時が手負いの相手を仕留め損なう訳がねえ！！！」

椿はそう言った。

だが、この少女には見えていない。

360°全体を見渡せる視野と5km先まで見える視力を得る大能力ル4『バードマンシューティング』クレボンスタイ『透視能力』によって遮蔽物を無視し、遠くまで見渡せた青髪に見えていた土御門が椿舞姫には見えていないのだ。

「その辺は抜かりねえよ。あの土御門シスコンが一度負けた相手に勝てるかどうかだな。」

青髪はそれを踏まえて、土御門を信じてそういった。

「だがよお、てめえは他人のこと気にする暇ねえんじゃねえの？」  
狂気に満ちた声を響かせ、青髪は澱んだ眼光を椿に向ける。

「んじゃあ、何を気にすりやいいんだあ？」

椿が小馬鹿にしたような口調で言った。

「てめえ等が綺麗な死に方出来つかどうかだろおがあ！！！！あ  
あ！！？」

そう叫び声を上げながら椿舞姫に、麦野沈利に、『筋肉増強』によ  
って強化した脚力で向かっていった。

「あと、ちよつとか：間に合うか？」

土御門元春は、携帯の地図アプリを確認しながら、ある場所に向か  
っていた。

携帯の地図アプリに表示された赤い点の位置、そこを目指しながら  
これは、学園都市側からの支給されたアプリケーションで、仕掛け  
た発信機の位置が地図上に表示されるというものである。

現在表示されているのは座敷琶瞬時の現在地。

座敷琶からの攻撃をされた時に、隙を見て発信機を取りつけたのだ。  
青髪には座敷琶が動かなくなった場所を伝えて向かわせたのだ。

侵入者の追跡を行っていた座敷琶が止まった位置は、つまりは華鳥  
と座敷琶が交戦を始めた場所ということだ。

そして、座敷琶は依然として動いていなかった。

それが意味すること、それは：

「：恐らくまだ水沢華鳥を捉えられていない、か。」  
と、いうことだった。

水沢華鳥自信が踏ん張っているのか、音速を6、7倍は上回る速度  
で、第七学区のビルを薙ぎ倒しながら彼女を助けに向かった青髪が  
暴れているのかは不明だが。

「兎に角急がないとな。」

土御門は第九学区の電気街に向かう足をさらに速めた。  
が、

「きゃあああああ!!!!」

という、悲鳴が聞こえたかと思うと、そんな彼の頭上に、ゴン!!  
という男をたてて、落下系ヒロインが投下された。

「…なんだこれは?」

土御門は脳天に響く痛みを気にしながら、目の前の上半身だけにな  
った少女を見ると呟いた。

その時それが、

「あ、青峰くんが…」

と突然口を開いた。

「うわああああ!!!!」

土御門はすつとんきよんな声を上げて尻餅をついた。

いきなり上空から降ってきた、スプラッターな物体を見ればこの反  
応も当然である。

そんな土御門を気にも止めず、それは話し続けた。

「青峰くんが、麦野沈利と戦ってる。このままじゃ死んじゃう。」

「えっ!?!」

土御門は意表をつかれたような声を出した。

「あの人は強すぎる!!化け物でも勝てない化け物なの!!」

少女は上半身だけの体で這いずって、土御門の制服のズボンを掴ん  
だ。

「貴方が誰なのかは知らない。けど、青峰くんを助けて。」

少女は懇願した。

涙をその目に浮かべながら。

「悪いが、それは出来ない。」

土御門はそんな少女に対して少し躊躇いつつもそう言った。

「…なん…で?」

少女は絶望に打ちひしがれた。

そして、

「なんで！！青峰くんは、こんな私を二度も助けようとしてくれたんだ！！今度は私が助けれないといけないんだ！！」

少女は泣きじゃくりながら、枯れそうな声で叫び続けた。

「…お願いだから、青峰くんを助けてよ！！」

少女は、いや水沢華鳥は叫ぶ。

大切な誰かに会いたい気持ちを抱えた自分を、今日初めて会ったのに助けてくれた少年。

そんな彼を助けると、自分の気持ちをぶつけた。

だが、

「その青峰がお前を連れて逃げると言ったんだ！！水沢華鳥！！」

土御門は折れる訳にはいかなかった。

青髪ピアスが、青峰奴御が能力を使って伝えた思いがあるのだ。

どんな能力か、当たりをつけるならば、『物質に自分の思いを込める、精神感応能力』といったところであろうか。

それを使って青髪は土御門に、風力操作で飛ばした華鳥を連れて逃げるようにそう伝えたのだ。

だから、土御門は華鳥の腕を掴んでそのまま逃げようとする。

「やめて！！離して！！青峰くんを助けてよ！！」

華鳥が暴れ、顔や腹を殴られ、体を引つかかれても、土御門は構わずに上半身だけの華鳥の体を肩に担ごうとする。

その時、

「はいはい。そこまで。」

と手をパンパンと鳴らし、気怠そうにそう言う少年の声がした。

土御門は驚いてその声の方向を向く。

「土御門センパイ。そういうのなんて言うか知ってます？」

棒読みにも聞こえるまるで小さな子供のような声の持ち主は土御門に尋ねる。

土御門は、

「なんて言うんだ？」

と苦い笑みを浮かべ聞き返す。  
すると、

「セクハラって言うんですよ〜?」

と言って座敷髷は人を食ったような表情をした。

そして、

「さてと。」

と座敷髷は一息ついて、ボーダーのTシャツの長すぎる袖に仕込んだバタフライナイフを取り出し、その刃を出して土御門に向け、

「ジャツジメントです。セクハラの現行犯のため、大人しく被害者を返さないで、」

間延びした苛々を募らせるような口調で言った。

そして、急に殺意に満ちた表情になり、

「殺しますよ?」

とドスの効いた声で言った。

土御門は肩に担ごうとしていた華鳥を地面に下ろす。

そして、首をコキコキと鳴らし、

「最近のジャツジメントってのは武器を向けて、そんな物騒な事を言うんだな。」

と言って笑みを浮かべた。

それは凍りのように、殺人者がつきつける刃のように冷たい笑みだった。

(さてと。この状況、学園都市では使わないと決めていたあれを使う時か?)

土御門はそう思いながら目の前の小悪魔を睨み付ける。

攻めるタイミングを図り、敵の背中に刃を突き刺すために！。

『Acinonyx jubatus』  
地球上最速の獣であり、俗に『チーター』と呼ばれる生物がいる。  
それは最高速度113kmに達する、凄まじい速力を誇るのだが、  
『筋肉増強』を使用した青髪の速度はそれのはるか上をいつていた。  
数値で表すなら時速500km。  
その速度をもつて青髪は、麦野と椿に襲い

かからなかった。

彼はそのまま、二人の間を縫って通り過ぎ、  
人間が反応できない速度で一人の少女を捕え、  
その少女を囲んでいた二人から距離をとった。

「滝壺!!!」

浜面仕上は捕えられた少女の名を叫び、青髪の少年に対して拳銃を  
向けた。

「動くんじゃないっ!!」

青髪は定番の脅し文句を言い、滝壺の動きを封じていない手、つま  
り右手のこうにレベル3の能力で氷の刃を作り、それを滝壺の首に  
近付け、

「ぜつてえ妙な真似すんなよ。」

と更なる脅しの言葉を言った。

「てめえ!!!滝壺にそんなことして許されるとでも思ってるのか!  
?」

「ああ!!!思ってるね!!!」

浜面の怒号に青髪は自信を持って答えた。

「がっかりだな。いきなり女の子を助けて、『かけえ。マジでヒ  
ーロー。』とか思ったのによお。」

「超最低です!!」

椿と絹旗が口々にそう言った。

だが、青髪は

「勘違いすんな!!俺はヒーローなんかじゃねえ!!モブキャラだ!!」

それに、最低だと!?こんなクソみてえなモブでも、上やんみてえに誰も殺さず救いたいヤツを助けられる最高ハッピートピのどこが最低だつーんだ!!」

とまるでどこかのヒーローにでもなったかのように、自信満々にそう言った。

「つーか、てめえ等じゃ話しにならねえ!!だから、麦野沈利!!  
!てめえと一つ取り引きといきてえ!!」

青髪のその言葉に、

「取り引きですか?」

麦野が聞き返した。

「そおだ!!取り引きだ!!」

青髪は答える。

「水沢華鳥を、今後ぜってえ狙うな!!今ここで誓え!!さもねえと、学園個人を挽き肉にすんぞ!!」

「なっ!?!」

青髪の取り引きの内容に、驚きを表すブラックアイテムの面々。

「麦野ちゃんは、昔と違って学園都市が相当大事みてえだからな。

学園都市にとつて大事な、AIMストーカー能力追跡を殺せねえよなあ!?!」

青髪のその言葉に、

「てめえ!!なんで滝壺姐さんの能力ちからのこと知ってんだ!?どうやって調べた!?!」

と椿は疑問を呈した。

「んなもん、ストーリーキングした時に色々調べたに決まってんじゃねえか!!」

青髪の思わぬカミングアウト。



あの方が作っていく、未来の学園都市です。」

麦野のその言葉に青髪はワケが分からないと言いたげな表情を浮かべる。

「ですから」

と一呼吸置いて、

「滝壺理后は人質として役に立ちません。むしろ消してくれても結構です。はっきり言って任務の足手まといですし。」

と機械のように冷たい台詞を言った。

青髪の腕に捕われる滝壺は絶望の表情を浮かべた。

彼女は、麦野が変わってしまったことが十分理解できた。

理解できてはいたが、それを心の中で信じたくなかった。

だが、今それを認めざるを得なくなってしまった。

「麦野オオオオオオオオ!!!」

浜面は激昂する。

そんな浜面の行動を予測し、絹旗は彼を止めて宥めようとする。

「超落ち着いて下さい!!!あいつのあれはきつと脅しです。人質と

しての価値を失った滝壺はきつとすぐに解放され……?」

絹旗の言葉が止まった。

目の前の信じられない出来事に目を奪われ、言葉を続けることが出来なかった。

殺したのだ。

こけ脅しに聞こえた青髪の言葉は真実だったのだ。

首に突きつけた氷の刃は、滝壺の細い首をいとも簡単に貫通させ、

気筒と、頸動脈を、完璧に断絶させていた。

「脅しな訳ねえよ。俺は本気なんだから。」

青髪は滝壺の体をゆっくりと地面に倒しながら、投げやり気味に言った。

そうー

全て本気で思い、感じたことだった。

上条当麻のような、ヒーローになりたいということも。

水沢華鳥を助きたいということも。

親友を傷つけられた後の殺意も。

水沢華鳥を誰も殺さずに助けると誓ったことも。

それを人質をとるといふ卑怯な手段をしてでも成し遂げたいということも。

それを本気でないとつた少女に怒りを覚えたことも。

非道なまでの麦野沈利に憤りを覚えたことも。

そして水沢華鳥を助けるには、

死霊支配らしく皆殺しにするしかないと、

今直感したこともー。

「ざけんじゃねえぞおおおおー!!!」

青髪は怒りの咆哮を上げる。

殺すべきモノ達を指揮する、青白い翼を生やした怪物に向かって。

「むううううぎいいいいいいのおおおしいいずうううりイイ  
イイイイ!!!!!!」

喉が潰れる程、肺の空気が全て無くなる程の

青髪に濁金色の瞳の化け物の絶叫が歪んだ街に響いた。

死霊支配(デッドマスター) V モブキャラ(後書き)

青髪「来ちゃったよ…こいつ来ちゃったよ。」

椿「どおも。みんなのアイドル舞姫ちゃんだよあ〜。」

青髪「えっと、変な下ネタ言われる前に今回はこのコーナー閉めた  
いと思います〜。みんな感想・レビューよろしゅう。」

椿「えっ、ちょっ、待…」

**死霊支配？ 本当の名前（前書き）**

次の行間で死霊支配は終わります

## 死霊支配？ 本当の名前

（拝啓 土御門元春くん。このメッセージをてめえがしっかり受け取っていることを願います。早速ですが本題です。水澤華鳥を連れて出来る限り、第九学区から離れて下さい。その後、可能ならば水沢華鳥に幻想殺しに関する情報を渡してこの街を去るように仕向けて下さい。どうしてこうなったかは分かりません。けれど、そうしてくれることが私にとっての最後の願いです。 前原圭一 というのは嘘で『ひぐらし』を一人で見れない青峰奴御「笑」）

（なんなんだ？最後の方のいらんユーモアは？）

土御門は青髪ピアスが自分に送ったメッセージを思い出しながら、そんなことを考えていた。すると、

「なんだよ…それ…」

と後ろから不意に少年、座敷琵琶瞬時の声がしたため

「なんのことにゃー？」

と座敷琵琶の方を向き、普段の明るい口調で尋ねた。

座敷琵琶は、滝のように腹から流れ出る血を左手で押さえ、吐血をして苦悶の表情を浮かべている。

前方からは分からないが、背中も腹と同様になっている。

それをやったのは、他でもない土御門元春である。

そんな土御門に座敷琵琶は尋ねる。

「何だよ…一体…」

有り得なかった。

座敷琵琶は土御門が行動を移す前に、すぐさまバタフライナイフを土御門の体内に直接転移させた。

先程、土御門に攻撃を仕掛けた時と同じ。

だが、少し違っていた。

それは、先程はほぼ不意打気味に攻撃を仕掛けたが、今回は土御門にワザと自分を認知させた。余裕から来る油断。

何故、先程確実に殺した土御門が生きているのか、まるで謎だったが今度は確実に仕留めたと思った。

だが、そのナイフは何もない空中に無様に飛び出した。土御門が消えた。

そう思う前に、体の力が抜け落ち地べたに倒れ伏しそうになった。ギリギリのところまで踏みとどまるが、肉体が焼け付くような痛みに襲われる。

確認してみれば腹からは血が流れ、腹と同じ痛みが背中にあった。前方からの腹に向けた突き、後方からの背中を裂く斬撃。

それを行った土御門の手の中にある武器を見つめて座敷琵琶は尋ねた。「何だよ……その刀は……!?」

座敷琵琶は畏怖を込めて尋ねた。

邪悪さすら感じる、炎のように揺らめく真っ黒い何か。

それを纏った刀身も拵えも、雪のように真っ白な太刀。

座敷琵琶のように暗器の心得があるわけでもないのに、いきなり土御門の手に握られていたそれ。

そして、消えたと見まごう程の高速移動。

全てが全て科学的ではなかった。

「…お前、これが見えるのか？」

土御門は何故か、座敷琵琶に刀が見えることに疑問を持った。

そして、少し間を置いて、

「そうか…能力開発を受けた人間や魔術師には、この手のものが見えてしまうんだったな。」

と勝手に納得した。

その様子に、

「意味分かんない…ですよ。僕の質問に…：…答えて下さい。」

座敷琶は消え入りそうな声で、自分の質問に答えるように急かす。

「妖刀『背中を刺す刃』。これはそういうものだ。」

土御門はそう答えた。

「…妖刀？ふざけないで下さい。そんな非科学この世にあってたまるか。」

座敷琶のその反応に土御門は、

「この世には科学じゃ解明出来ないこともあるんだにゃー。」  
と言って笑った。

そしてああそうそうと思いついたように

「先に言っとくけど、この刀で付けた傷は、学園都市の医療でもどんな能力でも塞がらないんだぜい。ちなみにその原理は勿論科学じゃ解明全く無理なんだにゃー。」

と土御門が言っている最中に、

「って、もう聞こえちゃいないか。」

と座敷琶は事切れて、地面に横たわった。

その様子を見ていた華鳥は、

「…凄い。」

と驚嘆の声を漏らした。

「さてと。」

土御門はそう言って、肩を回したり軽い準備運動をした。

そして、

「ちよつとやめて！！離して！！」

華鳥がジタバタ暴れるのを気にせず肩に担いで走り出した。

「悪いな。青ピの頼みだから、なんとしてもお前を逃がさなければならぬんだにゃー。」

土御門は友人との約束を守るため、少女の願いを無視することにした。

「さあて！！かかってこいよ！！てめえらに残されてんのは、この死霊支配に弄ばれる道だけだ！！」

青髪は本当に悪魔がいるならば、それですら恐れてしまつような、殺意に満ちた笑みを浮かべた。

「巫山戯るなよ……」

浜面は呟きながら、拳銃を青髪に向けた。

怒りで手元が震え、涙で前が見えなかった。

けれど、

「ふざけんなアアアア！！！！」

浜面はそれでも引き金を引いた。

許せなかった。

本気で愛している人を殺されたことが。

浜面はそんな気持ちを入れて引き金を引いたのだ。

憎悪と怒りの籠もつた6発の弾丸が青髪を襲つた。

「よくも滝壺をオオオオ！！！！」

それと同時に絹旗が青髪の頬骨目掛けて、オフエンスアーマー窒素装甲を使い殴りかか

つた。

窒素を利用した怪力にも似た馬鹿力が青髪の息の根を止めに行く。

（こいつ等は麦野ちゃんと違って仲間思い……か。そういうのは嫌い

じゃねえ。）

青髪はその二つの攻撃を二つの能力で同時に対処した。

浜面の弾丸には方位誤報で反射を行い浜面にはね返し、絹旗のパン

チは、左頬を炭素装甲で覆い攻撃自体を防ぎ、彼女の腕を掴んで捕

らえるといった具合だ。

「ぐあああ！！」

弾丸は浜面の四肢や肩などと言つた、致命傷にならない箇所に入った。

「ちつ。細かく向きを設定せずに、『反転』とアバウトにしたのが間違えだったか。狙いが滅茶苦茶だな。」

青髪はその様子に舌打ちをする。

「浜面！！」

絹旗はその様子を見て彼の名を叫び、

「このお！！！！」

と青髪の顔鼻めがけて左手を硬く握りしめ、思い切り振りかぶり殴りつける。

だが、彼女の拳は青髪には届かなかった。

花火。

例えるならそれであろう。

絹旗の体は花火のように、真っ赤に弾けとんだのだ。

それを見て青髪は、

「たあゝまあやあゝ。」

と狂気に満ちた表情でさも楽し気に言った。

青髪は絹旗の攻撃が自分に届く前に、方位誤報で血液の流れる向きを逆流させたのだ。

半径15m以内の『方向』なら、自在に変更可能だが、体内の方向、生体電気や、血流の方向を変えるのは、かなり複雑な演算が必要で、対象の体に触れなければならない。

今回は絹旗の右手を掴んでいたため、スプラッターを作り出す事が出来たのだ。

「いやあゝ。ホントに最低だわあゝ。殺人つてのはホントに気分がワリいな。」

青髪は首を億劫そうに鳴らしながら、そう言っただけで地面に膝をつく浜面に歩みよる。

「つーか、てめえ駒場さんこの浜面じゃね？元気してたあゝ？」  
浜面に近付きながらそう言う青髪。

「あの人にさあゝ、レベル3の能力者三人にカツアゲされてた時助けてもらってたんだよ。そんな時からあの人とは仲良くさせて貰ってたから、お前のことについてちゃ、よく知ってるぜ？」

青髪はそう世間話的な調子で話しながら近づく。

そして、彼の首根っこをつかみ、顔をギリギリまで近づけ、  
「風の噂じゃ、彼女が出来たらしいって聞いたがよぉ、仲良くや  
つてかよ?」

と尋ねた。

浜面が怒りに満ちた表情で青髪を睨みつける。

その表情を見ると青髪は、にたりと笑う。

「そおいや、さつき殺した滝壺って娘誰?」

青髪はさも愉快そうに尋ねる。

「ふざけんなっ…!!」

浜面の悔しさと憎悪に満ちた顔を見ながら。

「そんなにその子が好きなら、早く逝ってやんなあ!」

ケタケタと悪魔のような笑い声を上げながら浜面を爆発させる演算  
を開始した。

その時ボーリング大の大きさの真鍮の玉と、原子崩しが青髪の背後  
に襲いかかった。

普通の人間なら気づかずに即死であろう。

だが、青髪は鳥人視覚により、360°の視野を持っている。

だから、真鍮の玉を左手で受け止め、原子崩しの方向を方位誤報反  
らすことが出来た。

「ちっ。」

青髪。ピアスは舌打ちした。

そして、

「感電爪撃!!!」  
ボルトテッククロ

そう呼ばれたレベル3の発電能力で  
エレクトロマスター

「うっ!!!」

浜面を気絶させた。

「っーかよお、お前等、何俺の邪魔してくれてんだあ?折角楽しく  
なってきたつてのによお?」

青髪はそう言いつつ麦野と椿を睨み付ける。

「オ 二ーなんてつまんねえだろおが。みんなで楽しもうや。」

椿が卑猥に笑う。

「エロい女は嫌いじゃねえが、てめえは性欲が強過ぎだな。どおも好きになれそおにやねえ。」

青髪は素っ気なくそう吐き捨てた。

「そおいうなや。ウチはあんたみてえな男、結構好みだぜ。多重能デュアル力者の兄ちゃんよお。」

椿のその言葉に、

「へえ。気づいてたのか。」  
と全く動じずに言った。

「まあ、あんだだけこれ見よがしに色んな能力を連発すりゃな。」  
椿はそう言って、

「沈利姐さん、ホントにウチがやって良いんだよな？」  
と麦野に尋ねた。

「別に構いませ……」

「よし決まった。」  
麦野の言葉を遮って椿は言う。

そして左腕を横に突き出し、アトミックタスト元素掌握で道路やビルを構成する原子を組換えて左腕に集める。

「ほお。でけえじゃねえか。」

青髪は感嘆の声を漏らす。

椿の腕に握られていた武器、それは4mに達する巨大で歪な大剣だった。

「でけえだけじゃねえ。マレージング鋼を集めて作った最強の武器だ。」

マレージング鋼。

それは鋼鉄の一種であり、硬度、耐久共に優れている宇宙・航空分野に使われる合金である。

「マレージング鋼ねえ。つか、それってかなり高級なモンだろ？」  
青髪は尋ねる。

椿は、





兎に角、そんな黒い感情が青髪の中で蠢いていた。涙さえ溢れてきそうだった。

全てはしたくもないけれど、華鳥を助けるために殺戮をしなければならなかったから。

そうだったのは全て麦野の所為である。

「さあて、麦野ちゃん。次はてめえの番だぜえ!!!」

青髪は麦野に殺意を向ける。

麦野が滝壺を助けるような選択をしていれば、青髪は滝壺を殺さなくて済んだ。

だから、麦野をただでおいでしておく訳にはいかなかった。

「…貴方にそんなことが出来るのですか？」

麦野は感情の籠っていないけれど、どこか挑発的にも聞こえる口調でそう尋ねる。

青髪は両手を横に突き出し、左手にレベル3の氷雪造形という能力ダイヤモンドメーカーで鞠のようなサイズの雹を作りだし、右手にレベル3の脱水散弾で同じサイズの硫酸の玉を発生させ、

「楽勝だ。第四位。六徳で終わらせてやる。」

と豪語した。

そして、

「喰らいやがれええ!!!」

と叫びながら、硫酸の玉と、雹を同時に投げつけた。

だが、

「フン。」

麦野が一瞥するように鼻を鳴らすと、背中の青白い翼が可動し、麦野を覆うようにして、盾となった。

そしてその盾に当たると、致命傷を与える威力を持った攻撃は形を残さず消え去った。

「なっ…!?!」

青髪は動揺する。

見た目の感覚では分かりづらかったが、確かに自分が放った攻撃は

『分解』ではなく『消滅』した。

その見方が間違いでなければ、青白い翼は…

「六徳は10のマイナス18乗ではありませんでしたか？だとしたら貴方が指定した時間をとづくに…」

「黙れ!!!」

麦野が自分にかけてた感情の籠っていない言葉が、自分を嘲ているように聞こえ、青髪は声を荒げた。

（落ち着け!!!あれも恐らく、原子崩しの応用。つーことは、あれに当たった物質は崩壊する。）

青髪はなんとか心を落ち着ける。

そして、

（だったら、話は早え!!!物質以外で攻撃すりゃ良い!!!）と結論した。

両腕を構えて、

（使用する能力は3つ。レベル4エタールブレイス永久燃焼、レベル4テンパーチャーチェンジ温度変更、レ

ベル4テレキネシス念動力。永久燃焼は温度を限界の2000に。更に、温度

変更で5000に上昇。さらに、永久燃焼の反動を受ける体を念動力で抑えるつ!!!）

と3つの演算を行い、太陽が噴出するプロミネンスのような真紅の炎が麦野に襲いかかった。

（物質じゃなけりゃ、原子崩しじゃ、防げねえ筈だ。）

青髪はそう考えた。

原子崩しというのは、曖昧な形で存在する電子を操り、物質を破壊する力である。

裏を返せば物質以外のもの、例えば炎のようなプラズマの塊等には無力である。

青白い翼は炎のような物質でないモノには無力の筈。

炎は麦野を飲み込み、辺りに真っ黒い煙を上げる。

「あはははははははははは!!!」

青髪は狂ったように高笑いした。

だが、

「その程度ですか？」

というしてはならない声によってそれは止められた。

麦野は翼を畳み、盾としていた。

だが、あり得なかった。

「…なんで？馬鹿な！？」

青髪は顔に焦燥の色を見せる。

「次はこちらの番ですね。」

麦野はそう言っただけで翼を大きく開き、青髪を睨み付ける。

人としての生気が抜け落ちた、気味の悪い瞳が、青白い翼から発生される光によって無気味に輝いた。

その姿に目を奪われ、麦野の言葉が聞こえなかった。

だが、口の動きで何を伝えたいかは分かる。

ブ・チ・殺・し・確・定・で・す

麦野はその瞬間、翼を細かい『羽根』に分解させ青髪に放った。

青髪は、とっさに永久燃焼を下に向け、上空へ飛ぶ。

青髪はこの時方位誤報を使用しようとは思えなかった。

自分の目に移る青白い翼にこの世の物理法則が通じるとは思えなかった。

青髪は念動力で空中に留まり、下を確認する。

自分のいたところのアスファルトや、椿が作り出したマレージング鋼の大剣が『羽根』にぶつかってまるで最初から無かったかのように、消え失せていた。

あの翼の性能、青髪の想像が間違っていなければ、

「よくかわしましたね。原子以下の粒子をも消し去る私の翼を。」  
思考を巡らせる青髪の背後に、翼で飛んで回りこみ、感情の失せた声で感心した。

「死になさい。」

青髪はその声に驚いて振り返ろうとするが、それをする前に青髪に二枚の翼が左右から襲いかかる。

「厄介ですね。多重能力者というのも。」

麦野はそう言っただけ息をつき、自分の後ろを振り返る。

そこには、青髪の少年がいた。

彼は空間移動で翼をかわし、近くのビルの壁面に左右上下の概念を無視して立っていた。

物理法則に逆らったことにも見えるが、単に足から能力で磁場を発生させ、ビルの鉄骨を吸い寄せ立っているように見えるだけである。

「ためえ程じゃねえよ。化け物。」

青髪はそう言っただけ苦い笑みを浮かべた。

その間にも青髪は、あの能力に対する突破口を見つけ出そうとする。

（あいつの言っただけがホントなら、電撃も無意味だ。あれは電子の集合体だから、恐らく原子以下の粒子だ。当然物質をぶつける攻撃は勿論、毒ガスなんかも防がれる可能性がある。直接殴りに行くなんてのももっての他。フーことは、俺の能力で通じそうなのは念動力、風、音ってところか。だが、念動力は殺傷力に欠ける。）  
そう考えながら、麦野の翼による攻撃を、磁場の能力を解除し、脚力を強化して向かい側のビルに飛び移ってかわす。

そして、向かい側ビルの壁に触れると、磁場を操って立ち、

（…よって取るべき手段は二つ。両方試してえとこだが…）

と思考する青髪の頭に突然雷が落ちたような痛みが走った。

あまりの痛みで青髪は頭を押さえ、顔をしかめる。

（…どうやら限界が近いな。ただでさえ、今日能力使って倒れてんのに、連発し過ぎたな。）

青髪はそう考えた。

一人の人間に能力は一つしか宿らない。

それは人間の脳が二つの能力の演算を出来るような容積が無く、  
『パーソナルリアリティ自分だけの現実』も一つしか宿らないからである。

青髪には、『パーソナルリアリティ自分だけの現実』を自分の中にいくつも発現させる才

能があつた為に、多重能力者に慣れたのだが、脳の容積は通常の間よりも大きい程度である。

これを言い換えるなら、市販のノートパソコン一台で気象衛星並の計算をするようなものなのである。

つまるところ、青髪は一日に使用出来る能力の回数に限界がある。それを超えれば、

（脳死、いや脳細胞レベルで崩壊が起こるんだっけかあ？）

青髪はそう思い出しながら、額に汗をダラダラとかき、焦りの表情を浮かべる。

（つまりこれで終わらせねえと俺の負けってことか。）

そう思うと話しは早かった。

確実に殺傷出来る方を選べば良いのだ。

「終わりにします。」

麦野がそう言つて青白い翼を広げたその時、爆撃のような音が鳴り響き、突然回りのビルの窓が一気に碎けて吹き飛んだのだ。

それが意味すること、それは青髪が『音』をとったということである。

『ボイスコーディネータ  
音量調整』という能力を使って自分の声のポリウムを最大、音

域を超高音に設定した音を使った兵器である。

窓ガラスを割るような音域の音は人の脳を揺らす。

これを大音量で放てば、それは最早兵器なのだ。

これを受け、脳をシェイクされて麦野は絶命した筈だった。

だが、

「なるほど。音を利用した攻撃ですか。」

麦野は感情もなく生きていた。

「…嘘…だろ？」

青髪は目の前の事実にとだ驚愕した。

「造作もないですよ。私の『翼』で、空気を消滅させて自分の回りに真空を作り出せば良いだけなのですから。」

麦野は吐き捨てるように答えた。

確かに、音というものの正体は振動であり、空気を振動させて鼓膜

に伝わるものである。

だが、もしそれが可能であったとしてもそれを普通はやれない。何故なら、人間の体が真空に晒されると、通常100で起こる水の沸騰が、人間の体温で起こり爆発を起こすからだ。

「んなこと出来るワケが…」

青髪がそう言いかけた時だった。

突然、ビルと青髪の体を繋いでいた力が切れ、下に向かって落ち始めた。

(やべえ!!!演算能力が!!!)

青髪は途端に慌てふためいた。

当然である。

このまま真つ逆さまに落ちれば、硬いアスファルトの地面のシミになることが確定していた。

(…死ねるか!!!)

青髪はそう一言心の中で呟き、ビルの外壁を思い切り蹴飛ばした。そのことによつて、青髪の落ちる場所を変えることが出来た。

ドシャツ!!!

という音を響かせて青髪が落ちた場所は、自分が殺した滝壺理後の体の上だった。

人の肉体はアスファルトに比べ、遥かに柔らかい。

これで一先ず致命傷は避けられた。

だが、

「がああああああ!!!」

青髪は絶叫し、左腕を押さえて地面に蹲った。

落下の衝撃で左腕を骨折したらしい。

だが、悲鳴の理由はそれだけではなかった。

頭が真つ二つに割られるような痛みに襲われた。

脳の限界。

それを意味する痛みは地獄のような苦痛だった。

「無様ですね。」

その様子を見ながら、麦野は見下すように無感情な声で言った。

「……言ってくれるじゃねえか。」

青髪は痛みで消え入りそうな声でそう言って麦野を睨みつけた。

「いきなりビルから落ちたところを見ると、演算能力を失ったようですね。」

そう自己解釈し、麦野は

「本当に無様ですよ。学園都市の害虫が。」

と侮蔑を込めて言って、青髪に『翼』を向けた。

（華鳥。ごめん。俺は嘘をついたみてえだ。地獄じゃねえなんて言ったが、こんな化け物がいる世界なんて間違いないく地獄じゃねえか。）

青髪は目線の先にいる化け物を見つめてそう思った。

（…しかもよお、テメエをこんな地獄から救ってやりてえっーのに、俺の力じゃ、それは無理そうなんだよ。）

細かい『羽根』に分解した青白い翼が青髪に襲いかかった。

麦野は思った。

これで終わりだと。

だが、

「なっ!? これはどういうことですか!?!」

麦野は思わず声を上げた。

自分が放った『翼』が青髪に当たる寸前でドロドロに溶け出したのだ。

「何がどうなっているんですか!?!」

麦野がその声を上げた時、突然腹に硬い物が突き刺さったような激痛を伴う衝撃が走った。

口から赤黒い血を吐き出し、その衝撃の余り後方に吹き飛ばす麦野。

麦野はいきなり空を見上げながら錯乱した。

「ちっ！！反射に設定したのに、いきなり溶けやがった。どおなつてやがる！？」

麦野はその声にハツとして、体を無理矢理起こし、ゆっくりと立ち上がった。

すると、そこには今にも倒れそうな様子で、体中に脂汗をかきながら、自分を睨みつける『死霊支配』の姿があった。

「ごめんな。華鳥。どおやら地獄の底から引きづり上げてやんのは無理だからよお、」

青髪は何かに魔されるように言う。

どうやら彼は今、まともな状態ではないらしい。

「引きづり上げねえなら、地獄の果てまでついて行くしかねえよなあー！？」

だが、その言葉には妙な力強さがあった。

そして、

「筋肉増強、大旋風、永久燃焼、炭素装甲発動。」

と青髪は呟いた。

麦野はその声に反応して青白い翼を畳もうとする。

「神様こんなクソみてえな世界があんたの描く幸福ハッピーエンドつーなら、」  
だが、麦野の行動は遅かった。

気付いた時には、讒言のようなことを言う青髪が目の前にいた。

「まずは、」

青髪はそう言いながら、右腕を振りかぶる。

祈るように、願うように、宣言するように。

「不幸バッドエンドに塗り替える！！」

そう叫びながら、青髪は右拳を思い切り振り抜いた。

その拳は、麦野の顔を歪ませながら、彼女を吹き飛ばし、そしてー青髪。ピアスト、ヒーローや多角スパイからそう呼ばれる普通の少年の戦いの幕を引いた。

「はあ…はあ…」

息を切らしながらも、青髪の少年は歩き続けた。どこに向かう訳でもない。

ただ歩き続けた。

殺人をしたことへの自責、演算のし過ぎによって痛み続ける脳、折れた左腕。

全てが彼が足を踏み入れた地獄を体現しているように思えた。

その時、

「青峰くん!!」

自分が助けた多重妖混じりの少女がそこにいた。

何やら哀しそうな顔をしながら。

関西人を語る普段の青髪ならば、殆ど全裸に近い姿で路上に立つ少女にツツコミを入れているところだが、そんな余裕はなかった。

彼女のその表情に目を奪われてしまったのだ。

(んだよその表情は。引いてんのか?この化け物によお。)

青髪の頭には卑屈な考えが浮かんでいた。

だが、

「なっ!?!」

いきなり華鳥は青髪を抱きしめた。

「ごめん。青峰くん。私がもっと強ければ貴方がこんなことになっていなかったのに。」

華鳥はそう言って青髪に謝る。

涙を浮かべながら。

青髪はそれを見て、思わず微笑んだ。

そして、

「謝る必要なんてねえよ。」  
と言っ。

「それにな」と続けて、  
「俺の名前は『青峰奴御』じゃねえよ。」  
と言った。

華鳥は

「じゃあ、本当の名前は？」  
と尋ねた。

青髪はそう言われて気がついた。

自分はその日、『木山先生』が消えて以来、ずっと名前を呼んでもらっていないことに。

いや、彼女以外には名前を呼んで貰いたく無かったのだ。

上条でもなく、土御門でもなく、姫神でもなく、吹寄でもなく、彼女にだけ名前を呼んで欲しかったのだ。

だが、何故だろうか？

自分は今、何故だか分からないが、水沢華鳥には名前を呼んで欲しいと思っっている。

だから、青髪は言う。

自分の名前を言う。

「正義。せいぎ高たかまがはら天あま正義。せいぎ俺の名前は高天原正義だ。」

その名前を言つと、華鳥は

「良い名前だね。正義くん。」

と言って笑う。

青髪の、いや正義の思った通りそう彼女に呼ばれることは心地良かった。

「…なあ華鳥ちゃん。第七学区の『パンの大王』ってパン屋まで僕を運んでくれん？」

正義は華鳥にそう頼む。

「えっと、どうして？」

華鳥がその真意を尋ねる。

すると、

「疲れた。頭が痛い。腕を折った。」

と子供のように立て続けに文句を言った。

「あと、君に抱きつかれてるとこめちゃ痛いねん。君、どんな力してるん？」

正義が苦言を呈すると、

「ごめんなさい。」

と顔を赤らめてすぐさま正義の体を離れた。

そして、正義の体を背負い、第七学区に向かう。

これが二人の出会いであった。

**死霊支配？ 本当の名前（後書き）**

正義「どうも。青髪ピアスこと高天原正義ですー。」

当麻「とある魔術の禁書目録主人公の上条当麻です。」

良守「結界師主人公の墨村良守です。」

正義「あれ？なんで君らが出てるん？」

当麻「作者が、『彼の主人公化が決定したらしいから祝ってやってくれ』って言うってたんだよ。」

良守「てなわけで。」

良・当「おめでとう！ー！」

パーン！！（クラッカー）

正義「みんなありがとう…！」

当・良「てなわけでこれからもこの話は続きます。みんな応援よろしくな。」

正義「感想・レビュー待ってるでー。」

行間？（前書き）

土御門「降りろ。これは俺のバスだ。」

正義「ジェルミさん……」

土御門「お前が女だと知った時は許せたけど、テギョンさんを好きっていうのは許せない!!」

土御門「コ・ミナム!!なんで俺じゃダメなんだ!!バスのこともお前だけに教えたのに…なんで俺じゃダメなんだ!!」

正義「ジェルミさん……」。

プルプルプル

上条「ジェルミ。ファンがお前の生歌を楽しみにしている。携帯で繋いで歌えるか?」

土御門「はい。分かりました。」

土御門「受験生のみなさん。お疲れ様!!貴方達にこの曲を捧げたと思います」

土御門「曲名は、『魔法少女まどか マギカ』よりコネク……」

アスタ「トウ!!」

ドゴッ……

土御門「アブっ!!」

正義・上条「ジェルミさん!!」

アスタ「てめえら、3バカ揃いも揃って、微妙な声優ネタやってんじゃねえよ!!ここはにじファンだぞ!!韓流ドラマのネタ分かる人いねえだろ!!読者の皆さん、置いてかれたぞ!!」

上条「いや、土御門がやりたいうつていうから…」

アスタ「巫山戯んな!!危うく作者の性別バレるトコだろおが!!内緒にしてんによお!!」

正義「いや。薄々みんな気づいてるんと違う?」

アスタ「いや!!きつと気づいていない筈だ!!」

正義「まあええけど。んじゃ、最後は火黒くんしめてえな。」

火黒「俺はこの物語の主人公さ。」

上・正・土・ア「違う!!!!」

行間？

第七学区のとある病院。

ここには冥土返しと呼ばれるカエル顔の医者がいる。<sup>△フンキャンセラ</sup>

心臓手術を局部麻酔で行ったり、切断された右腕を綺麗にくっつけたりと、凄い腕の持ち主の名医のだが、そんな医者のいる病院の中にも至極当然のように、自動販売機というものは存在する。病院の受け付けの近くに置かれた自販機。

その自販機の前で、容器の缶に『いちごおでん』と書かれた、どこかのバラエティー番組の罰ゲームのようなおでんをさも美味そうに食べる少女がいた。

髑髏の描かれたタンクトップの上に、ショッキングピンクに黒いラインの入ったパーカー、下はダメージ加工を施したジーンズという、少しパンクなファッションに身を包んだ長い黒髪が目つきの悪い、12歳ぐらいの少女である。

そんな少女に対して、どこかの学校の制服を身に纏った、整った顔立ちの高校生ぐらいの少年が近寄り、

「悪いな海鳥。結構時間かかったな。」

と悪びれた様子を微塵も感じさせない軽い調子で言った。

「…待ち過ぎで『いちごおでん』がさめちまったじゃねエか。」

と少女、黒夜海鳥はそれとは思えないぞんざいな口調で言った。

「……前から思ってたけど、それって美味しいの？」

少年は素朴な疑問を述べた。

すると、黒夜は鼻で笑い、

「てめエには、分かんねエだろオナア。」

と吐き捨てるように言った。

「…で、『ブラックアイテム』の奴らはどオだった？」

黒夜のその質問に、少年は

「浜面は軽傷。椿は重軽傷、麦野は意識不明の重体だが、どうやら助かるらしい。」

と、そこまで言って俯いた。

「だが、滝壺と絹旗は……」

顔を伏せる少年。

そんな少年に、

「凹んでんじゃねエよ……!」

と言って尻に蹴りを入れた。

「あの冥土返しだって、死ンじまった命までは救えねエ。しかたねエだろオが。」

黒鳥は怒鳴るような調子で言った。

「だとしたら、俺が助けるのが遅かったから、」

少年がそう言いかけると黒鳥は、

「てめエのせいでもねエ……!」

と、今いる場所が病院の中ということも忘れ、大声で怒鳴りながら少年の顔をグーで思い切り殴りつけた。

「痛え。」

と呟きながら頬を押える少年にの胸ぐらをつかみ、黒鳥は

「てめエは、下らねエ慈悲を振りまく為に暗部やってンのか!? 俺みてエにそこでしか生きれねエから暗部やってンのか!? 違エだろ!?!」

とまるで諭すように怒鳴った。

「第一位のクソ野郎一方通行を闇から通ざけてエンだろ!? ソイツに幸せになって欲しいンだろオ!?!」

少年はその言葉に体をピクリと動かした。

「その為に永澤なんつくソ野郎の下に就いたンだろオが……!」  
「バツドスクール」クソ野郎なんつくソ組織に入ったンだろオが……! 一方通行に傷ついて欲しくなくて、俺を『バツドスクール』に引き入れたンだろオが……!」

その言葉はしっかりと少年に届いた。

そうだ。

俺が戦う理由は一方通行しんゆうの為だ。

その為に俺は戦っていたのだった。

「それにてめエの優しさで泥を塗ンな！！優しさが悪いとは言わねエが、暗部に留まるプライドを汚してまで尊重するモンじゃアねエぞ！！！」

その言葉を浴びせるとすぐに、

「……つと悪い。言い過ぎた。」

黒夜はそう謝って、少年の襟から手を離れた。

すると、少年は

「そんなことねえ。お前のお陰で目が覚めたよ。」

と言って微笑んだ。

すると、

「なっ……!? やめろっ……!! その表情オ……!! 恥ずかしくなッたらオが……!!」

と黒夜は顔を赤らめて訴えた。

「悪い悪い。」

そう言いつつ、少年はおちゃらけたノリで悪びれた様子は無かった。

「まあ、この桐生正宗、お前の為だったらいくらでも笑ってやるよ。」

と、少年はそう言って親指を立てる。

「だから、やめろっ……っつてンたらオがア……!!」

病院にはた迷惑過ぎる少女の叫びが響いた。

時を同じくして、第14学区のとある洋館。

学園都市に一番似つかわしくない中世ヨーロッパを思わせる古風な

建物。

そこに暗部組織『バッドスクール』の隠れ家があった。彼等の主な任務は永澤久継の警護、又は彼にとって邪魔なモノの始末である。

「んで、なんで『バッドスクール』のリーダーのアンタが敵も倒さずに帰ってきてんのよ。」

洋館の一室の、書斎と見られる部屋。

その窓に座る、名門常磐台中学の制服を来た茶髪のショートヘアの少女が、やって来たホストのような風貌のゴールドブロンドの髪の高い少年に尋ねた。

すると、ホスト風味な少年が、

「相手をしていたヤツが、未元物質おれ以上に常識が通じねえヤツでな。正直本気を出さずに無傷で帰ってこれたことも奇跡に近いんだ。」と皮肉気に言った。

「貴方にしては随分弱気ね？垣根帝督。」

少女の嘲るような言葉に、少年垣根帝督は、

「聞いて無かったのか、超電磁砲レールガン？俺は『本気』を出さず『無傷』でと言っただぜ。俺が本気を出せば、あんな野郎は無傷で殺せるんだよ。」

と豪語した。

「てか、てめえこそ大丈夫なのかよ超電磁砲レールガン？」

垣根がそう尋ねると、超電磁砲と呼ばれた少女は、

「何がよ？」

と聞き返す。

「てめえ、統括理事長アレクスターに妹達シスターズと愛しのあの人を人質に盗られてんだろ？そんな状態で戦えんのかよ？」

垣根のその質問に、

「私をあまり侮らないで。私は常磐台の超電磁砲よ。」

と凍りのような冷たい瞳を彼に向け、闇のように暗い声で常磐台のリースと呼ばれる少女は答えた。

「頼もしいじゃねえか。」

垣根はニタリと、無気味な笑みを浮かべた。

「痛え。あの娘どういって顎してんだ？」

土御門は歩きながら首を押さえながらボヤいた。

先刻、青峰奴御（高天原正義）に頼まれて水沢華鳥を運んでいたのだが、運んでいる途中に彼女に思い切り首を噛み付かれ、その隙に、何故か上半身だけだった体が全回復した彼女に逃走されるといふことがあったのだ。

「大丈夫かい？坊や。」

隣を歩く黒スーツを着た瞳の赤い青年が尋ねた。

「大丈夫だ火黒。それよりもお前は……」

「お互いに本気じゃなかったから、無傷で済んだよーん。」

土御門がそう言うと、火黒はおちやらかした様子で答えた。

「そうか……ところで聞きたいのだが」

土御門がそう言いかけると、

「垣根ならあれは本物だと思うよ。」

と火黒は答えた。

「根拠は？」

土御門がそう尋ねると、

「戦士の勘ってヤツ??？」

と巫山戯ているとしか思えない答えが帰ってきた。

土御門のイライラとした表情を見ると、

「いやマジで。垣根っていつの日に今日初めて会ったばっかだからはつきりしないけど、あれは長い間血生臭い戦場にいたヤツの目だ。しかも相当の猛者。」

火黒が真剣な表情で答えた。

「…確かにあいつは学園都市の暗部において血生臭い戦場を体験しているだろうし、第二位だから相当の猛者だろうな。だが」

「脳を三分割されて能力を生み出すだけの存在に成り下がった。だから本人がいる筈ない。」

土御門の言葉を遮って火黒がそう言つと、

「火黒。お前、それやられた方、相当気分悪いって分かってんのかにゃ〜?」

と土御門が満面の笑みで尋ねる。

すると、

「うん?」

と火黒が清々しいまでの笑みを浮かべて答えた。

ブチッ!!

土御門の額に浮かんだ血管が破れる音がして、殴り合いが勃発した。

お互いの顔が、こぶやら、青アザやら、出血やらでボロボロになった時、

「…火黒、俺は一旦裏会に戻る。」

と急に真面目な口調で言つた。

「どうしてだい?」

と火黒が腫れた頬を気にしながら尋ねると、

「永澤久継のことを調べる。あいつを調べれば、垣根のことも、新たな暗部組織の全貌も全てが見える筈だ。」

土御門はそう答えた。

「いや、それは大体そう思うが、何故学園都市じゃなくて、裏会なんだい?」

火黒のその間に土御門は、

「俺の想像が正しければヤツの正体は、あいつの筈だ。」  
と答える。

「あいつ…。」と呟き暫く考えると火黒は何かを思いついたように、ニタリと笑い

「なるほど。あいつね。」

と納得した。

「そういうことなら全は急げだぜ、第十一客様。」

火黒が不敵な笑みでそう言うと、

「おう。」

と、土御門も同じような笑みを浮かべて答えた。

そして、携帯を取り出しある人物に連絡をとる。

「もしもし。俺俺。土御門元春だぜい。悪いけど正っさん、蜈蚣くんこつちに回してくれるかにゃ〜?」

土御門が電話の向こうの人物に尋ねた。

すると、暫くして返事が帰ってきた。

その答えに土御門は顔を青ざめる。

「えっ!? 差し入れに甘いもの!? ちゃんとしたのじゃなかったら、絶対迎えに行かない!?!」

土御門はそう驚いて叫ぶ。

そして暫く、「うーん」と唸りながら少し考えると、意を決して、

「メロンの乗ったコンビニの豪華プリンを持っていくぜい!?!」

と明かるい声で答えた。

すると、

「ッーッー。」

「切られたな。」

その会話を聞いていた火黒が言った。

「……………」

土御門は少し黙り込む。

「どうする？常盤台の女の子に化けて、『学舎の園』までケーキ買  
いに行く？」

火黒がそう尋ねると、

「……………あそこのケーキ高いかにや〜？」

と今にも泣きそうな顔をして尋ねた。

「どこぞの第一位は八兆円の借金したらしいが、それよりましじゃ  
ない？」

火黒のその言葉に、

「はあ〜。」

深いため息をついて頂垂れる土御門であった……

行間？（後書き）

正宗「こんにちは。』とある魔術の絶対値変更』主人公の桐生正宗です。」

青髪「まさかのコラボやで〜。みんなビックリやろあ〜。」

正宗「だろうな。てか、俺の作者のオメガウエポンさんはよく許したよ。」

青髪「せやな〜。アスタもビックリやで〜。」

正宗「つーか、おまえんとこの作者で大丈夫なのか？オメガウエポンさんは天才だから、俺を表現し切れるが、アスタじゃな〜。」

青髪「そうなんやよなあ〜。」

アスタ「あははは…頑張りまーす…。」

青髪「感想・レビューよろしゅうなあ〜。」

卒業！！ 当麻視点（前書き）

青髪ピアス「『とある化学の接 回路』って知ってますー？」

アスタ「人気だよなあ。あのくらいに人気な作家になりてえなあ。」

青髪ピアス「君、あの作品に感化されすぎやて。」

アスタ「そうか？」

青髪ピアス「せやなかったら、こんなチートのオンパレードにはならんやろ……」

## 卒業！！ 当麻視点

2月16日

今日は烏森学園高等部の卒業式である。一般的に八レの門出等と言われる縁起の良い日だが、

「不幸だ…」

上条当麻はいつも通り不幸である。それは、自分の隣に座る友人の田端が、

「上条一体どうしたんだ？」

と卒業式という場にあったヒソヒソ声で尋ねてこようともし、雪村時音の名が呼ばれ、彼女が壇上に上がり卒業証書を授与されようとそれは変わらない。

来賓のお偉い様方が座る席に、あるうことかアウレオルスがいて、何故かテレビのカメラマンが持つような大きな目のビデオカメラを肩に担いで、卒業式の一部始終を、取るうとしていている状況を今まさに目撃しているのだ。アウレオルスが同居人だと考えると自然と不幸という言葉が出てしまう。

「落ち着け。クールになるんだ上条当麻。今取り乱しては、良守時音の彼女の卒業式が滅茶苦茶になってしまう！！アウレオルスを殴りたい気持ちを捨てるんだ！！」

と、自分に言い聞かせた。その様子に田端は、

「上条：俺はお前の人生が心配でたまらないよ。」  
と哀れみの目を当麻に向けた。

「これが落ち着いてられる状況か！？田端！？自分の同居人が、卒業式で浮いてるんだぞ！？お前だったらこの状況耐えられるか！？」「間違いなく無理だろうね。」

無気になる当麻に対して、清々しいまでの爽やかな微笑みで返す田端。

「しかもさ、それが一人じゃなくて二人だったら!？」

当麻は尋ねる。横目でもう一人の同居人、元神の右席の一人であり、普段整った顔の形状が崩れる程顔にピアスを大量につけているのに、今回に限ってはそれを全て外し、黒いキャリアウーマン風のスーツに身を包み、烏森学園の教師と当然のように話している『前方のヴェント』を見ながら。

「死にたいね。そんな状況。てか、この空間の中に上条の家族が二人もいるのか。是非調べたいね。」

田端は恐ろしいことを口走る。

「本気で辞めて下さい。」

当麻は切実にそう思った。『自称烏森学園一の情報通』田端。実際の情報は殆ど役立たずのゴミ情報で、学園内での需要は

少ないのだが、そんな彼であれ自分の家族、もとい同居人のことを知られるのはまずかった。何故なら、自分の同居人は、世間の明るみに出ることさえも間違いな、危険な連中なのだ。

(はあ…てか、なんでアウレオルスのみならずヴェントまで…ヴェントは『スノウさん』の補佐で、日本各地の『神佑地』とかいうパワースポットの調査をしていて、暫く家には帰ってきて無かった筈なのに…)

上条当麻はため息混じりに、ボヤクように、心の中で疑問を吐露した。

(つーか、あいつ等問題とか起こして卒業式を滅茶苦茶にしたりとかしねえかな?そこら辺マジで恐いんだけど…)

上条はさらに疑問を浮かべた。今日まで共に生活してみ分かったことだが彼らの人格は非常に破綻している。卒業式で何かやらさす可能性も充分否定出来ない。だが、決してそうなつてはいけない。何故ならこれは雪村時音の卒業式である。これが滅茶苦茶になれば彼女のことを本当に思っている隅村良守が、きつと彼女本人よりも

傷ついでしまう。

「一丁、釘刺しときますか。」

当麻はそう決心し、言葉を紡ぐ。

「ゲンソウヲクイアラスノヲサツサトテイシシロ。ソシテタツタイ  
マカラゲンジツヲノミコンジマエ。」

その声はこの世のどんな場所よりも冷たく、この世界のどこよりも  
暗かった。

「どうしたんだ？上条？」

田端が心配そうに声をかけたが、それは当麻の耳には届かなかった。

「トットメヲアケロオオグライ。コノヨノスベテガテメエノエサダ。」

すると、当麻の右手の甲に青いケルト十字が現れた。そのケルト十  
字は反転し、まっ赤に染まる。

「『<sup>ドラゴン</sup>竜王』！！！」

その瞬間、当麻とアウレオルスとヴェント以外の人間の時間は停止  
した。卒業式の場面が、不自然な形で止まったのだ。その様子を確  
認し、アウレオルスは

「……時間を停止させるとは。一体何がしたいのだ？」

と持っていたビデオカメラをその場に起き呆れるように言った。

「ていうか、『スノウフェアリー』にこういう人が多いところでの

『竜王』の使用は止められてなかったっけ？」

ヴェントも同じような調子で言う。

「お前等に聞きたいことがあったからな。」

当麻のその言葉に

「聞きたいこと？」

と口を揃えて言うアウレオルスとヴェント。

「そうだ。なんでアウレオルス、てめえはそんな巨大カメラを持っ  
て、来賓席にいやがる。ヴェントもなんで当然ですみたいな顔でう  
ちの学校の教師と話してやがる。」

上条はそう言っ

「もし『おもしろそうだから卒業式の邪魔しにきました。』とかだつたら殴り殺すぞ。」

と後付けした。その言葉にアウレオルスは、

「いや。厳然、私はただPTA会長に、『私、仕事で忙しいくて来れないから、娘が卒業証書貰うところ撮つといて。』って言われたから撮影を行つてただけだ。」

と言った。

「お前がなんでPTA会長と知り合いなんだよ!?!」

当麻が疑問を投げかけると、

「飲み仲間。当然、毎晩のように濁酒を飲んで語りあっているのだよ。」

と何故か腕を組み、誇らし気に答えた。

「お前、見た目があれだから、偶にわすれるけど、まだ19歳だよね!?!お酒飲めないよな!?!」

当麻のその言葉に、

「お前の近くには、14歳のクセにヘビースモーカーがいるではないか。当然、私の飲酒も目を瞑るべきなのだよ。」

と人を棚に上げる最悪な発言をした。当麻は、

「まあ、お前は良いや。」

と半ば諦め混じりな調子で言った。

「んで、ヴェント。てめえは一体どうしてここにいる?しかもそんなスーツなんて着ていかにも教師みてえな感じでさ。」

当麻はヴェントに尋ねる。

「教師みてえじゃねえ。正真正銘本当に教師なのよ。」

ヴェントのその答えに、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をする当麻。

「『スノウフェアリー』が、『烏森学園に、馬鹿みたいな魔力を持ったヤツがいるから潜入調査してくれない?』的なこと言ったんだ。だから、産休に入るここの音楽教師の代わりつてことで本日付けでここで働くことになっちまったのよ。式の後でそのことについて報告があると思うわ。」

「てかお前、教員免許とか持ってたのか…」

「ええ。色々と便利だからね。中・高の音楽をどの国の学校であっても教えられるわ。」

当麻は意外な新事実を知った。だが、魔術師がそういうものを持つことに、必要性はあるのだろうか、当麻は思った。

「ところでなんで音楽教師なんだ？」

「好きなのよ、音楽。こう見えても、昔、カンツォーネ歌手とか目指してたし、そういうコンクールでも何回も優勝してるし。弟にこんなことが無ければ、きつと今も本気で目指しているんだろうし。」

「へえ。そうなのか…」

当麻はその事実を知り、なんだかやりきれない気持ちになった。

前方のヴェント。

彼女は科学的に安全な筈だったジェットコースターで、弟と共に事故に逢い、彼女と弟の血液型がB型RH-であったために、どちらか一方が死ななければならなくなり、弟の意思によつて、医者が彼女を救い弟を殺した為に『科学』に対して怨みを抱いていた。その怨念をもつてして、学園都市に侵入し、『天罰術式』という魔術で学園都市の人々を昏睡状態にさせた。当麻はそんな彼女の考えが間違っていると感じ、彼女と交戦し、復讐に凝り固まることをやめさせようとした。だがよもや、自分の夢すらも捨てていたとは…

「どうしたのよ？暗そうな顔しちゃって。」

ヴェントが、浮かない表情をする当麻を見て心配そうに言う。

「いやっ！！何でもない！！！」

当麻は慌ててそう言った。

「というか、上条当麻。当然、私達に説教をするためだけに時間を止めた訳ではあるまい？」

アウレオールの問いかけに、

「いや。その為だけに止めたんだけど。」

と当麻は至極当然のように言った。

「愕然。君はこの中に馬鹿げた力を持った『見えざる者』の気配を感じた訳ではないのか？」

「いや。そんな訳ねえよ。てか、いんの？この中に？」

アウレオルスの質問に対して、逆に尋ね返す当麻。その言葉に、

「はあ。」

とアウレオルスは深いため息を漏らした。

「ダメよ、アウレオルス。当麻はそういう感知能力は低いんだから。」

「

ヴェントは諦めを含んだ口調でそう言った。

「そうだったな。」

アウレオルスはそう言って、「はあ」と再びため息をした。

「で、結局妖はいんの？」

当麻は苛立ちながら尋ねる。短気な彼はなんだか馬鹿にされている気がしてならず、苛立ちを押さえられなかった。そんな彼を見かね、アウレオルスは天井を見上げ、立ち上がり

「灰は灰に、塵は塵に。」

と詠唱を始め、両手を広げた。すると、両手から炎が上がった。本来はステイル・マグヌスというルーンの魔術師の魔術であるそれを、アウレオルスは究極錬金法、黄金錬成を使用し再現したのだ。

「吸血殺しの紅十字！！！」

アウレオルスは両手をクロスさせ、二本の炎の剣を天井に向けて放った。

「馬鹿野郎！！そんなもん放つたら、体育館が…」

「君が時間を止めている。已然、炎は建物を焼く筈がない。」

当麻の心配をよそに、アウレオルスは答えた。その言葉通り、体育館の天井は燃えなかった。一箇所を除いては。

「おい！！あそこ燃えてるぞ！！！」

「毅然。心配するな。あれは天井が燃えているのではない。」

当麻が怒鳴る中、アウレオルスは落ち着いて答える。

「君は少し、自分の力を信じるべきだ。『竜王』の力は完璧だぞ。」  
アウレオルスは眈々とそう言った。

「さて。ロンドンの魔術師程度の炎では、貴様程の力の持ち主を倒すこと等不可能だろう。」

そう言い、「だが」と続けて、

「貴様の術を解いて、その姿を曝け出させる程度は可能！」

と叫ぶ。すると、炎の中から「クククククク」という異様な笑い声が響いた。そして、そこから激震と呼ぶべき旋風が現れ、天井を床にして逆さまに立つ男が現れた。顔立ちの整った美青年のようではあるが、緑色の異様な髪の色、そこに簪かんざしのようにさした風車、頭から伸びる二本の角、身に纏った江戸時代ごろの浪人のような小汚い灰色の着物、それら全てがこの者が人外であると語っていた。人外は、そよ風に乗った羽のように、フワフワと地面に舞い降りた。

「凄いなあー。オイラがここにいてるって事、よく分かったね。」

人外は小馬鹿にした態度でそう言った。

「当然、式が始まる最初から、貴様が術で姿を消してここに紛れ込んでいたことくらいは気付いていたさ。気付かなかったのは上条当麻カくらいなものだ。」

「アウレオルスさん？今、上条当麻と書いてバカと読んだ気がしたのは気のせいでせうか？」

アウレオルスの発言に当麻は素朴な疑問を投げかけた。

「ははは。オイラの強すぎる力が仇になったか。」

余裕の調子で笑う妖。

「愕然。自分の力を過信するとは、愚か者の典型だな。」

アウレオルスは相手を詰った。

「いや、オイラが強いつてのは間違いないでしょ。なんたってその子の『時間を止める力』にかからなかったんだから。」

妖が当麻を指差して言った。

「その子の力、『時間』を止めるといって、神の定めた法則を軽々破る恐ろしい力だ。その絶対法則違反の力に耐えたオイラは間違いな

く強者というわけだ。」

「で、そんな強者な貴方様は何者なわけよ？」

自慢気な妖に痺れを切らしたヴェントが尋ねた。

「オイラの名前かい？オイラの名は、葵<sup>あおい</sup>。紫苑様が配下の一人。」  
妖はそう、どこかの英国貴族のような振る舞いで自己紹介した。

「で、貴様は何故ここに忍び込んでいたのだ？」

アウレオルスは、尋ねる。

「そうだなあ。一番の目的はここを制圧して、紫苑様の城にすることだけ……」

と言い、右腕を振った。すると、暴風が巻き起こった。自然界の台風や竜巻を遙かに凌駕する風速が当麻、アウレオルス、ヴェントの三人に襲い掛かる。それを当麻は右手を前に突き出し、幻想殺して打ち消した。

「おっ！オイラの風を防いだ。すっごい力だねえ。」

葵ははしゃいだ。

「これじゃあ、オイラのもう一つの目的、『多くの悲劇』を作り出すは、達成できそうにないやあ。」

「多くの悲劇……だと！？」

当麻は葵の言葉に目を見開いた。

「そうだよ。『多くの悲劇』。オイラはそこから生まれた。だから、沢山の人が死んだり、傷ついたりする時に生まれる悲鳴、断末魔つてのが大好物でさあ。ぶっちゃけオイラはそれを聞く為だけに息をしていると言っても良い。」

葵はそう言って、ケタケタと笑い出した。

「オイラはこの喜びを紫苑様と分かち合いたい。だって、オイラは紫苑親衛隊の一員だから！！」

アウレオルスとヴェントは身震いした。彼等の心に宿ったのは確かな恐怖心だった。しかし、それは葵に対してではなかった。

「悲劇を……作り出すだと？てめえ、本気で言ってるのか？」

「あん？何言ってるの？そんなの決まってるじゃんか。」

何故、葵は気付かないのだろうか？ 幻想殺しの少年は心中穏やかではないということ。彼から発せられる圧倒的な殺意を。

「……けんな。」

「何だつて？」

少年の唇の動きを確認した妖はその言葉の真偽を求めた。

「ふざけんなつってんだよ！！ 今日がどんな日なのか分かってんのかよ？ 俺の友達が、大切な人との別れを惜しむ日だぞ？ てめえのつまねえ悲劇はそれの邪魔にしかならねえんだよ！！」

当麻は自分の思いをぶつけた。友達を大切に思う気持ち。

「それにな、こんなに沢山の人達を、てめえの勝手な都合で悲劇に巻き込むなんて、そんなの絶対間違ってたよ！！」

さらに当麻は、そこに最も彼らしい思いを乗せた。それは、人が傷つくことを最も嫌うヒーローの一番純粋な思いだった。

「もしてめえが悲劇を作るって言うなら、そんなモン、幻想だろうが現実だろうが欠片も残さず俺がこの手でぶち殺す！！」

当麻の数々の人々の生き方を変えた言葉を変えた言葉を妖は、

「アハハハハハハハハハ！！」

嘲笑った。

「綺麗ごとだな。これだから、綺麗に生まれて、綺麗に死んで人間ってのは困るんだ。」

ただそう吐き捨てる葵。

「だからお前から悲劇になれ！！」

そう叫び、肩についた汚れを振り払うように右手を振るい、自らの力である暴風を巻き起こそうとする。これだけで、死という悲劇を簡単に生み出せる暴風を。

だが、

「…風が…出ない！？」

起きる筈だった悲劇は、全く起こらなかった。

「…そんな筈！？」

葵は風を起こそうと、何度も腕を振る。しかし、何も起こらない。

「…なんで！？…どうして！？」

取り乱す葵に当麻は、

「だから言っただろうが。幻想だろうが現実だろうがぶち殺すって。」  
と言った。

「俺の右手に宿る力、『幻想殺し』はそれが異能に関わるモノなら、異能で作り返した現象も、その異能の存在も、異能を作り出す力の源も、俺が消したいと思えばなんでも消せる力だ。てめえが悲劇を生み出す力も、俺が望むだけで簡単に消せるんだよ。」  
当麻の言葉に葵は愕然とする。

「能力が無くなる！？そんな馬鹿げた力、土地神でも使えないぞ！？」

望んだだけで、異能に関わる事柄を消し去る。今の当麻にかかれれば、聖人としての性質も、能力者の『自分だけの現実』も、魂蔵持ちとしての力の全ても、なんであろうと消せるのだ。

「もっと面白いものを見せてやるよ。」

当麻はそう言って右手を掲げた。

「アウレオルス、ヴェント。巻き込まれないように注意しろ。」

そう当麻は、後ろの二人に言う。

「オオオオオオオオオオオ！！！！」

そして当麻は叫んだ。

それに呼応するように右手に浮かんだ、逆ケルト十字が血のような紅蓮に輝き出した。

「…当麻の強化された『幻想殺し』は、当麻が本来の力を使うために『幻想殺し』の出力の操作を身に付けた段階で生まれた副産物に過ぎない。」

ヴェントは目の前の光景に畏怖するように言った。

「必然。あれの本来の力によって、私は禁書目録との記憶も、アウレオルスIIザードとしての思考も、全てを奪われたのだ。」  
アウレオルスも同じような口調で言った。

「時間も、感情も、記憶も、絆も、空間も、運命も、限界も、存在すらも奪う、『現実を喰らう幻想』。」

『幻想殺し』という名の恐ろしい力の影に隠れた、おぞましい力は産声を上げた。

「t w q k あ h w : @ 殺 r j ) ! ! ! ! 」

この世のどの言語でも表すことの出来ない雄叫び。

それを上げる化け物は、皮肉にもこの場にいる誰もが関わったことのない、学園都市の最高機密である天使の俗称と同じであった。

「『<sup>ドラゴン</sup>竜王』」

「馬鹿な！？なんで腕から竜が！？」

ヴェントとアウレオルスがそう呼んだそれは、確かにそう呼ぶしかない姿だった。白金に輝く、不健康な光を上げる竜の顎。

「なんだよ！？あれ！？あなんと戦って、オイラが勝てる訳ないだろうが！！」

当麻の右腕に存在する顎は、存在するだけでその場の生きとし生けるものを、全て消し去るだけの威圧感があった。

圧倒的な迫力。

やる前から勝負の結果が見えてきていた。

「…………喰らうぜ。その巫山戯た現実。」

当麻はそう言っ、右手を目の前の妖に放った。

2月16日

卒業式。ハレの日。

この日、沢山の人々の悲劇の代わりに、一人の妖の悲劇が生まれた

……

卒業！！ 当麻視点（後書き）

当麻「やっと俺がゲストか。」

青髪ピアス「てか、なんかチート過ぎな能力を発現させてたなあ。」

「

当麻「まあ、良守がチートだからな。レベルを合わせようとしたらこっぴどくなったんだろ。」

青髪ピアス「ホンマ、これでええんか？」

当麻「もう良いよ。この話は。それより、オルソラさんの話をしようぜー！！」

青髪ピアス「おっ！！ええやんそれ！！やろっやー！！」

華鳥「せえ〜い〜ぎい〜くう〜ん？」

青髪ピアス「うおっ！？華鳥！？」

華鳥「今、『オルソラさんの話す』とか言わなかったっけえ〜？」

青髪ピアス「いや。これは、その……」

華鳥「私の生まれたままの姿を見て欲情して、あんなことや、こんなことや、さらにはそんなことまでしておいて、他の女の子の話をするなんて……ねえ？」

当麻「お前っ！？それは流石に犯罪だぞ！？」

青髪ピアス「待て！誤解やて！そもそも当てはまるの最初の一つだけであとのなんて身に覚えあらへんし！」

華鳥「誤解……貴方という人は私をもて遊んで……」

青髪ピアス「あの……水沢華鳥さん？」

華鳥「貴方が他の女を見つめるそのエロい目を繰り抜いてあげる！  
！」

青髪ピアス「ぎゃあああ！！ヤンデレ！！そして、完全変化！！」

青髪ピアス「不幸やあー！！」

ー青髪ピアスさんが退出しました。

華鳥「待てええええええ！！」

ー華鳥さんが退出しました。

当麻「青髪……それは俺のセリフだ……」

？「さアて。やっと馬鹿みてエな三下どもが消えたか。」

当麻「？」

一方通行「悪イが、次回から先は俺のコーナーだ！！侵入は禁止つてなア！！」

当麻「……お前、本編まだ出てない。」

一方通行「!!!?」

当麻「いや、『!!!?』じゃなくて。」

一方通行「つうわけで、感想やらレビューやら待ってるわ。(はア

…俺も早く本編出たい……)」

時音と禁書目録（前書き）

久しぶりの更新です

## 時音と禁書目録

雪村時音は携帯（REGZA）片手に手提げ鞆を持ち、第十八学区を歩いていた。

「うーん。この辺の筈何だけどなあ……」

携帯の画面に表示された地図とにらめっこしながら、唸るその姿は完全に不審者であるがそんなことは気にしていられない。4月から時音が通うことになる霧ヶ岡女子大。その寮の近くまで来ている筈なのに見つからないのだ。

「……誰かに聞いてみるか」

と考え、白いコートのポケットに手を突っ込んで歩く、これまた白い髪の、というか全身白づくめの少年に声をかけることにした。

「ねえ、君」

「……」

声をかけたが素通りされた。仕方ない。追いかけてもう一度。

「ねえ、ちょっと」

「……」

無視された。仕方ない。三度目の正直。

「あの！ねえつてば！」

「……」

やはり返事は返ってこない。

さて、ここで敢えて語ろう。雪村時音は割と気が短い。それは恋人の良守にも、その友人の当麻にも、彼の義兄のアウレオルスにも指摘されている。そんな時音を悉く無視する。それが何を意味するのか。答えは一つ。

「結！！」

鉄拳制裁だけである。長方形の、薄緑色の透明な箱のようなものが白い少年の頭上に出現し、

「痛っ！！」

そのまま脳天へと一撃。少年は頭を抑え地面にうずくまる。

「あの、すいません道を尋ねたいんですが．．．」

「俺の置かれてるこの状況はスルーですかア!？」

あくまで何事も無かったかのように接する時音に対して涙目で抗議する白い少年。

「いや、そんな目を真つ赤にして．．．何もそこまで泣かなくても．．．」

「違エ!!色々違エ!!これは元々こうなんですウ!!」

時音のおとぼけ発言に白い少年はたじろぐ。

「なんだ。なら良かった」

ほっと胸を撫で下ろす時音に、

「いや、よくねエ。全然よくねエ。なんつウか、人殴つといてその態度は全然よくねエ」

と、白い少年はみごとなツッコミを入れた。

「てか、クソ女ア。てめエ、一体エ何しやがったア?俺の反射をくぐり抜けるなンざただ事じゃアねエぞ?」

白い少年がそう尋ねると、

「結!!」

「じばア!!」

再び箱が現れ、白い少年にアップercatを喰らわせた。

「私には、雪村時音って名前があんの。今度クソ女とか言い出したら、本気で叩き潰すから」

どうやら、クソ女と言われたのが気に入らなかつたようだ。

「クソオ．．．」

白い少年は顎を押さえ唸る。

「で、道を教えてくれない?」

時音はお構いなしと言った感じに尋ねる。正直、自分の質問に答えて欲しかった白い少年だったが、

「．．．地図かなンかあるか?」

時音の後ろに修羅が見えた為やめた。

「へえ．．．ここが大学の寮か．．．」

少年の道案内のおかげで、大学の寮へとたどり着いた時音。まず、感想だが、

「すごい．．．」

だった。何がといえばデザインだ。女心を完璧に計算して作られたかのような可愛らしい外観。かと言って、景観を損ねるような派手さが無い。素直に口に出して言うてしまう程だ。流石は学園都市の建築技術と言ったところか。

「301号室．．．だったわね」

そう確認し直し、時音は自分の部屋へ向かう。

・今日から始まるんだ。私の新しい生活が。何があっても頑張るんだ。あいつに．．．良守に頑張るって約束したから。

一歩一歩踏みしめながら、恋人と口づけをして誓ったことを思い出しながら時音は部屋に向かい、そして自分の部屋の扉を開け、リビングについた時、

「．．．．．」

思わず、手提げ鞆を落とした。愕然とした。自分の生活はこのまま頓挫するのではないかとさえ思えた。

「白いシスターが、ベランダに？」

かけられていた。白い柔道服を着た、銀髪の、14歳くらいのシスターが。

「ハハハハハハハ」

これは流石に何かの冗談だ。きっと下の住民が、等身大の巨大フィギュアか何かを落としたに決まっている。と、考えていると、ムクリと、シスターが顔をぱつと上げ、ベランダに上がり、ドンドンドンドン、窓を叩きまくった。

「えっ!?!? ちょ、何これ? どういうこと?」

途端にパニックになる時音。当たり前だ。考えてみてほしい。新居につき、シスターがベランダに引っかかっている状況を。普通は混乱するだろう。そんなどきまぎしている時音をよそに白シスターは、「お腹空いた！！お腹空いた！！お腹空いた！！ご飯！！ご飯！！ご飯！！」

と、窓をドカドカ叩いて暴れ、窓をぶち破り、時音の服を前後に揺さぶって時音に空腹を訴える。

「????？」

最早パニック。一体全体どういうことなのか……訳が分からない

そして、その後白シスターが時音に噛みつき、收拾がつかなくなり、仕方なく時音は最寄りのファミレスに白シスターを連れて行くことにした。

「おいしかった」

食事を探ってご満悦の白シスター。この笑顔の為に時音の財布の中身が全ていかれたの言うまでもなかった。

「ありがとうね。えっと」

感謝の言葉を述べる白シスターであるが、時音の名前が分からず、困った表情をする。

「雪村時音よ。どういたしまして」

やややつれた表情で時音は自己紹介した。

「アナタの名前は？」

時音の質問に、

「私の名前はインデックスって言うんだよ」と白シスターは答える。

「えっと……偽名？」

時音は率直な感想を述べる。

「偽名じゃないんだよ！」

銀髪碧眼の白シスター、インデックスは主張した。

「いや。いくら外国人でも『索引』なんて単語が本名になるわけないでしょ」

時音は言った。

「違うんだよ！！『インデックス』は『禁書目録』っていう意味なんだよ！！」

「『禁書目録』？何それ？」

インデックスの発言に疑問を述べる時音。だが、

「.....」

インデックスはそのことに触れられると途端に黙りこむ。

「.....まあ、答えられないなら答えなくて良いわ」

時音はインデックスの様子を見てそう言った。

「ところで、何でアンタはあんなところに引つかかったの？」

時音は一番疑問に思っていたことを尋ねた。するとインデックスは、

「追われてる途中で、建物から建物にとびうつろうとしたらね、失敗しちゃったんだよ」

と答えた。

「追われてた？誰に？」

時音はさらに尋ねる。

「学園都市最低最悪最強のスキルアウトに、だ」

時音の背後からそう語る男性の声がした。振り返るとそこには男が立っていた。悪魔がデザインされたTシャツ、白虎が描かれたフィット感に乏しくポケットがいくつもついたジーンズ、赤黒い革ジャン、首にかけられた銀色の海星を直接鎖で繋いだようなアクセサリーと威圧的なフッシュョンをした2m近い体躯を持った青年。本物の純金よりも金色な髪の色をした、蠟人形のように肌が真っ白で、切れ長の瞳が鮮血のように赤い、右目の下に『No hope』という文字を刻んだ、美形ながらも不気味な青年がそこに立っていた。

「探したぜ。禁書目録。てめエをな」

青年は言った。その時、時音は気付いた。インデックスが異常に震えていることに。

「あの、この子に用ですか？」

時音が警戒しながら尋ねた。

「ああ、滅茶苦茶用ありだ」

青年は言った。まるで時音を威圧するように。

「だからよ、大人しくソイツを渡してくれねえか？じゃねえとスキルアウトらしく実力行使に出ねえといけねえからさ」

青年が言葉を発する度に声が出なくなるほどの殺気が時音に突き刺さった。だが、時音は

「この子、嫌がつてるから渡せないね」と宣言した。

「そうか。残念だ」

青年はそう言つて首をコキコキと鳴らした。時音が青年から何かをされる覚悟をし、青年が動き初めようとしたその時、真っ白い噴出がファミレスの窓をぶち破りながら青年に直撃した。その瞬間青年は吹き飛び、その余波で店内が滅茶苦茶になり、その場に広がっていた日常は、悲鳴と突然の恐怖によつて塗り固められた。食事を楽しんでいた客達やファミレスの従業員達は一斉に、我先にとその場から逃げていく。そんな惨劇の最中、時音はただただ呆然とし、インデックスは未だに震えていた。

「ああ、クソ。よくもやつてくれたな」

瓦礫の中から、完全に吹き飛んだと思われていた青年が現れて店の外に立つ青年を睨んだ。時音がそちらを向くとそこにいたのは先ほどの、真っ白い少年がそこにいた。真っ白い翼のような何かを背中から噴出させながら。

「何してくれてんだあ！？一方通行くんよあ！？」  
アクセラレータ

紅蓮の瞳をキラキラと憎しみでたぎらせながら、青年は白い少年の名を呪詛のごとく紡いだ。

「そのガキから離れやがれ、『第六位』」

純白の少年『一方通行』は言った。

「いやア、こう言った方がいいかア？」

一方通行は青年を逆撫でるように、あえてこう言い直した。

「木原くんの親友、『圧殺空間』の阿頼耶家康くんよオ」

## 時音と禁書目録（後書き）

一方通行「どオも。前回からこのコーナーを乗っ取った一方通行だ。早速だが第一回ゲストを呼ばせて貰う」

一方通行「こいつだ！」

家康「どうも。こっちに出たら容姿が別物だった阿頼耶家康だ」

一方通行「なんであアなったんだろオな」

家康「それ言うと、ネタバレになるらしいよ」

一方通行「そオか・・・」

家康「つーわけで、感想・レビュー待ってるぜ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3562u/>

---

とある結界術のi渾沌世界《カオスワールド》

2011年12月18日07時47分発行